110号住居址　（図81～83）

古墳時代の103号住居址に南壁を若干切られるが、ほぼ完掘しえた。

平面プランは4.90×6.90mの中型の隅丸長方形住居址である。確認面からの掘り込みは平均20cm前後と浅い。本住居址は焼失住居であり、床面ならびに壁面はかなり焼け締まった状況を呈していた。柱穴はP1～P10を検出した。主柱穴はP1～P4で短辺1.80～2.00m・長辺3.00mの4本長方形配列である。P5は棟持柱であり、P6・7、P8・9は共に出入り口施設に関連する二本一対の支柱である。P11は貯蔵穴で、径50cm・深さ31cmを測る。炉は奥壁側柱穴間中央やや内側に位置し、径70cm・深さ10cmほどの地床炉である。床面より壺（1）・甕（2・3）・杯（4）・蓋（5）・高杯（6）が出土している。甕（3）は北陸系の土器であり注目される。

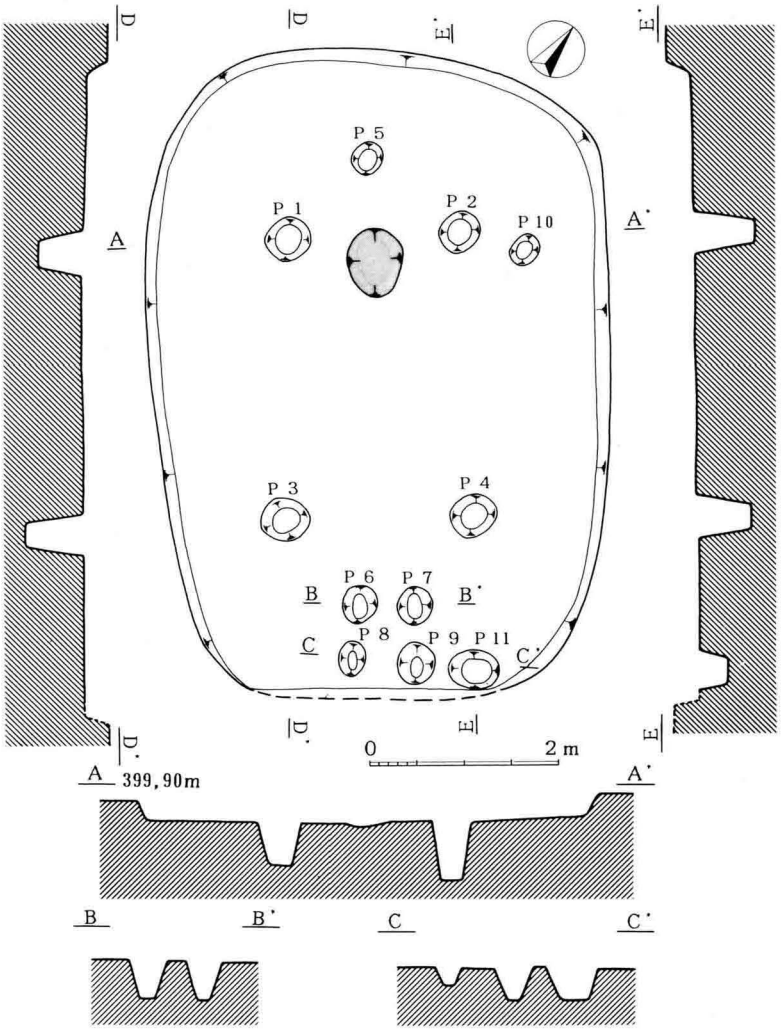


図81　110号住居址実測図　（1：80）

110号住居址

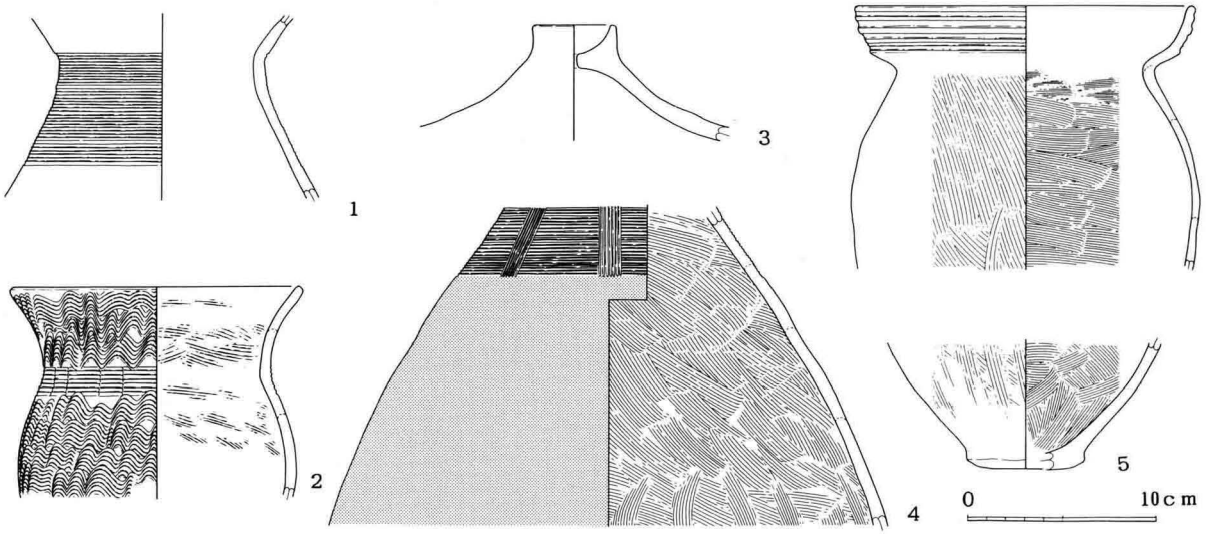


図82　110号住居址出土土器実測図　（1：4）

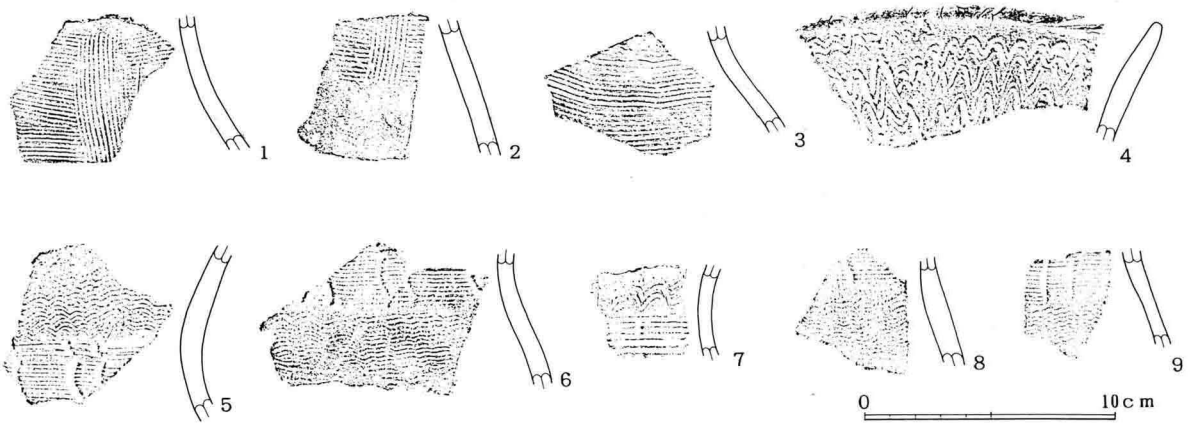


図83　110号住居址出土土器拓影　（1：3）

建物址１（図84）

規模は桁行３間・梁行１間であると考えられる。

桁行は総長7.60～8.00m、梁行は3.00mでやや不整な長方形を呈する。柱穴は平均径60～70cmで深さは50cm前後である。

P2より弥生時代後期箱清水式期の高杯脚部が出土しており、この時代の所産と把握した。

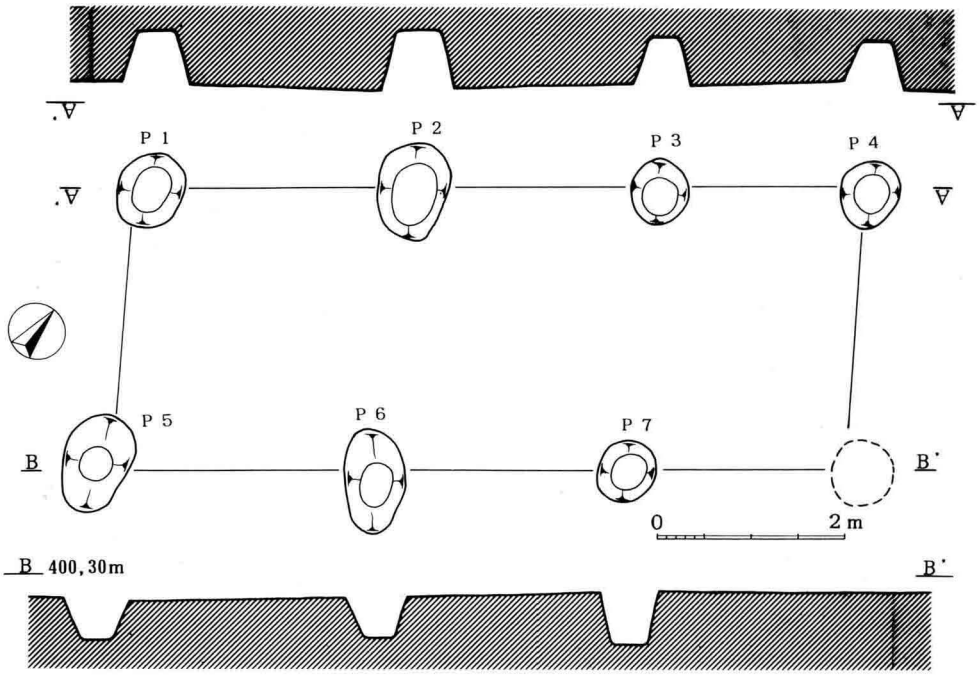


図84　建物址１実測図　（1：80）

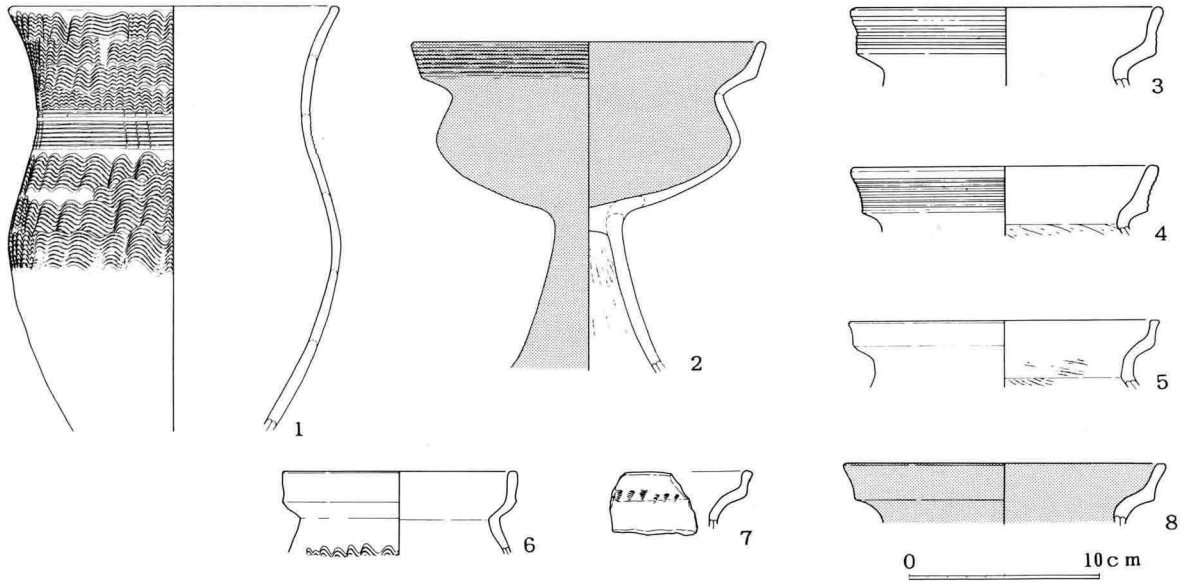


図85　遺構外出土弥生土器実測図　（1：4）

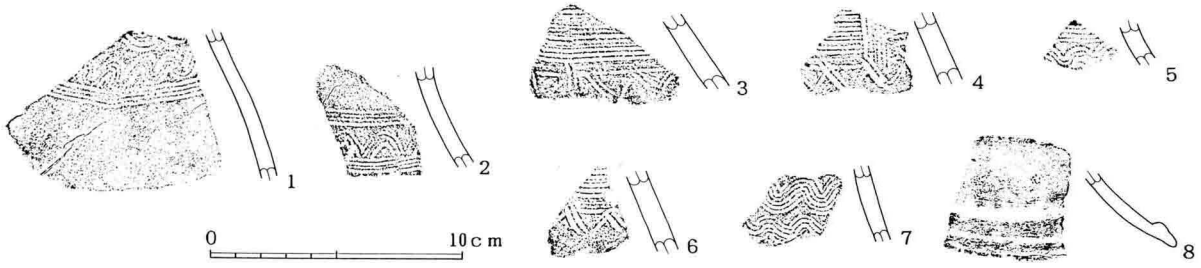


図86　遺構外出土弥生土器拓影　（1：3）

調査区遺構検出状況

3　古墳時代前期の遺構と遺物

46号住居址　（図87・88）

43・45号住居址を切る。平面プランは3.80×3.50mの隅丸長方形住居址で、確認面からの掘り込みは15cmと浅く床面は全体に軟弱である。柱穴はP1～P11まで検出しているが、明確な主柱穴は不明。P12は貯蔵穴で、0.70×1.00mの方形で深さ50cmを測る。明確な炉は確認されていない。幅20cm・深さ10cmほどの壁周溝が全周しており、一部は間仕切り状に住居址中央部に伸びる。西側を中心に覆土中に炭化材と多量の円礫が検出されている。円礫はおそらく投棄されたものであろう。炭化材の上にのった状況で若干の土器が出土している。

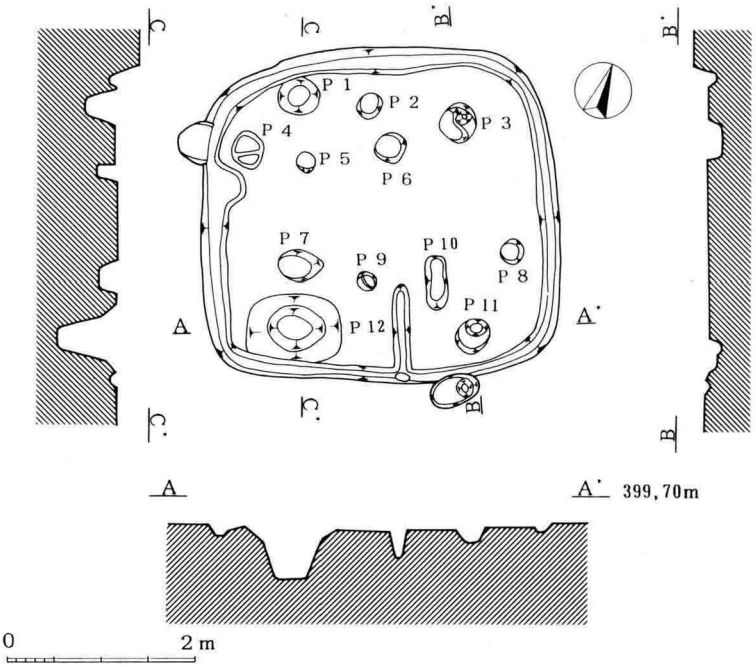


図87　46号住居址実測図　（1：80）

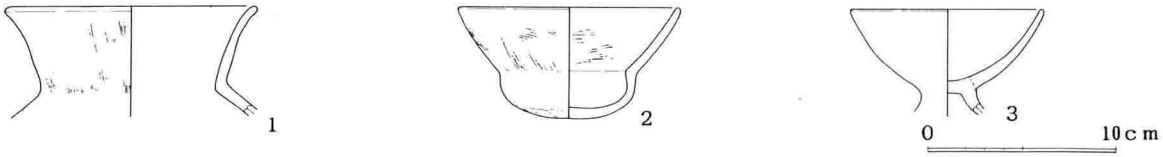


図88　46号住居址出土土器実測図　（1：4）

46号住居址

106号住居址　（図89・90）

住居址北東側を古墳中期の98号住居址に切られ、1/2程を検出したのみである。平面プランは一辺5.40mほどの隅丸長方形住居址と考えられる。確認面からの掘り込みは15～20cmと浅く床面は軟弱である。

壁際は幅1.00～1.30m・高さ10cmほどのベッド状の部分が全周するものと思われる。柱穴はP1～P9を検出した。明確な炉は確認されていない。出土土器はいずれも住居址中央付近の床面上より出土したものである。

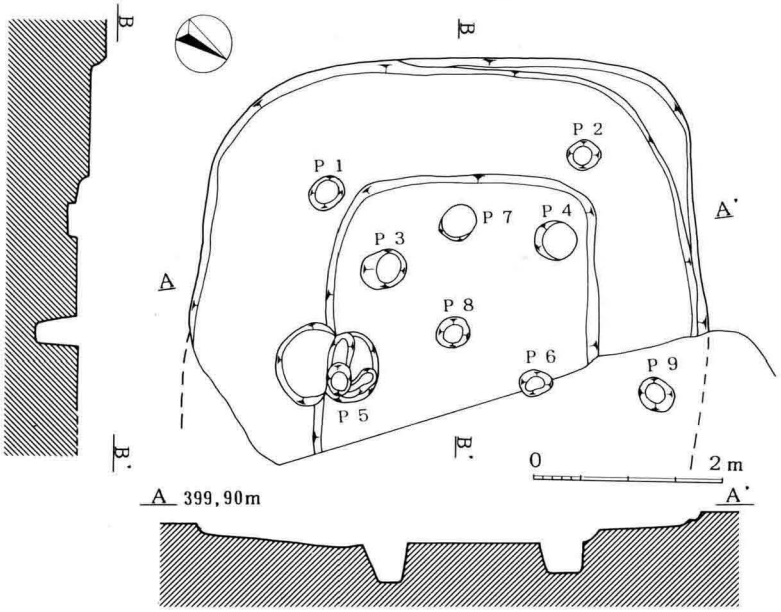


図89　106号住居址実測図　（1：80）

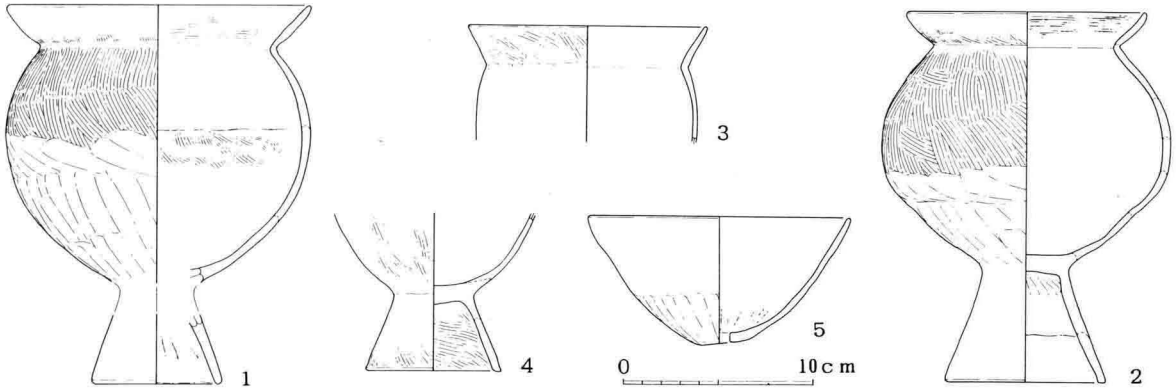


図90　106号住居址出土土器実測図　（1：4）

106号住居址

4　古墳時代中期以降の遺構と遺物

5号住居址　（図91・92）

7号・10号住居址を切って構築され平面プランは5.30×5.40mの隅丸方形住居址である。確認面からの掘り込みは平均30cm程で、床面は全体に軟弱である。主柱穴はP1～P4で、やや不整な4本方形配列である。カマド等の施設は確認されていない。P2・P4間やや壁よりの部分に径70cmほどの焼土の堆積があるが性格は不明。住居址西側の覆土上層より、多量の土器が投棄された状況で出土している。図示した土器はすべて住居埋没過程に投棄されたものである。

5号住居址

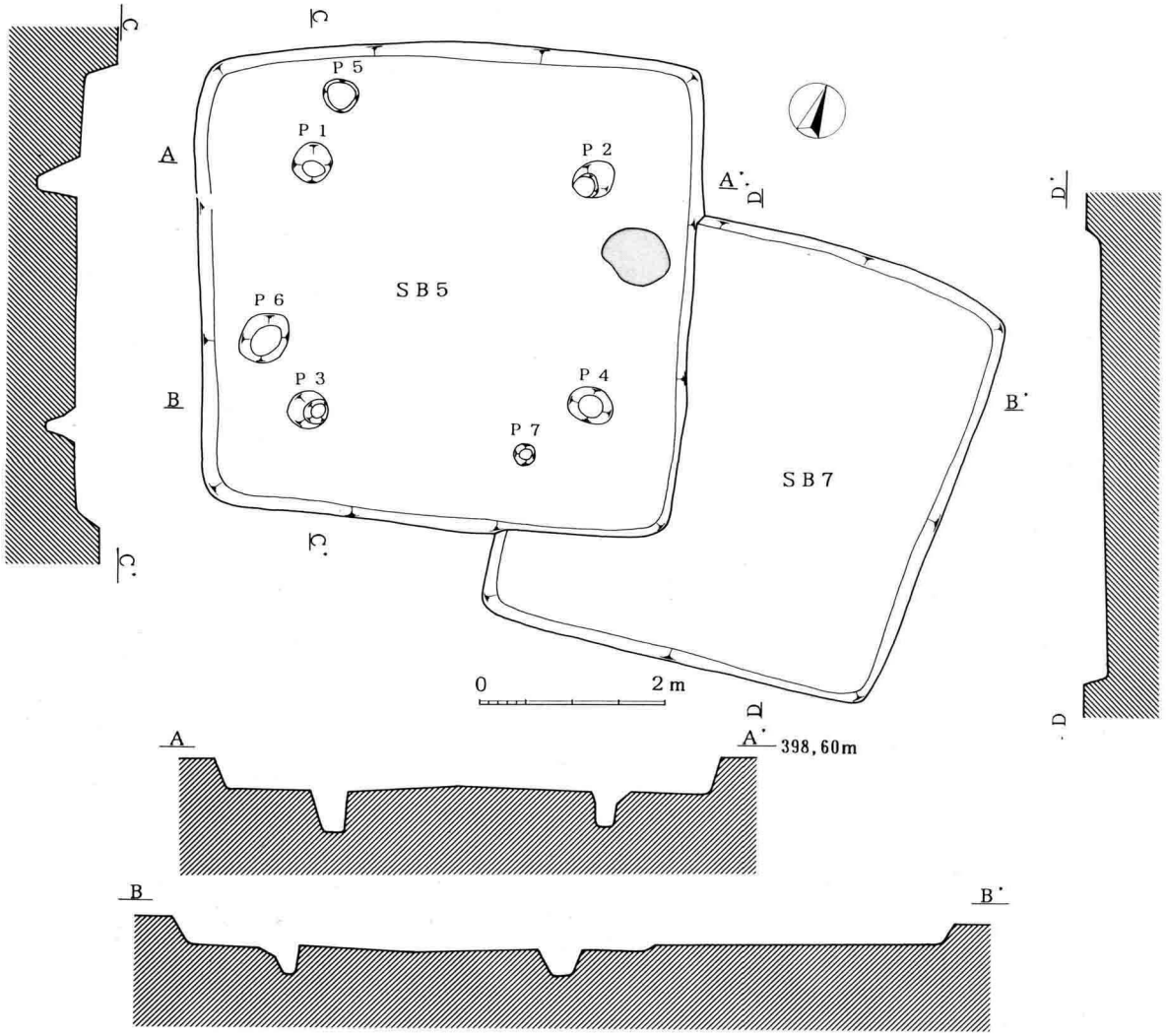
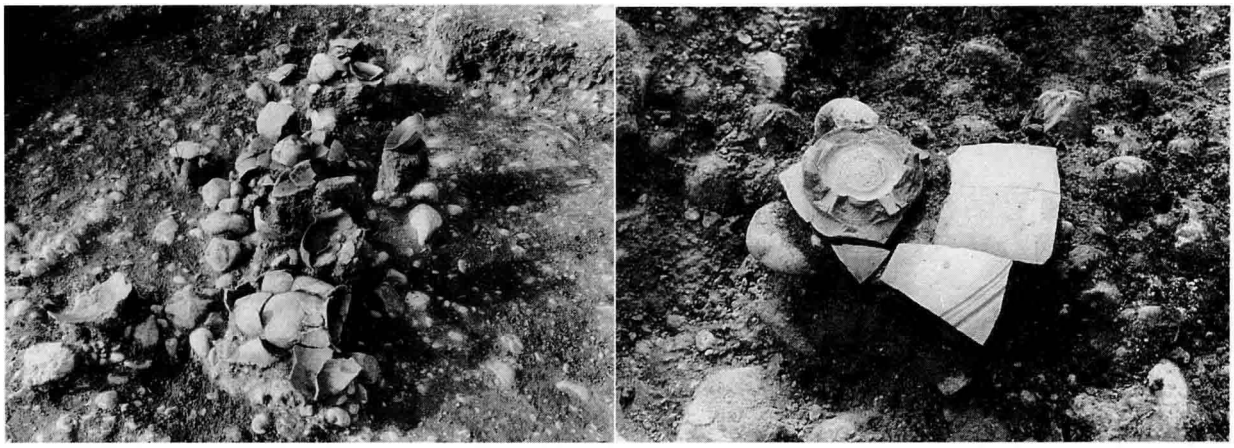


図91　5号・7号住居址実測図　（1：80）

図92　5号住居址出土土器実測図　（1：4）



5号住居址土器出土状況

12号住居址　（図93・94）

弥生時代後期の11号住居址を切って構築され、9.60×10.50mほどの大型のやや不整な隅丸方形住居址である。確認面からの掘り込みは平均30cm前後と深い。床面は住居址中央付近を中心に若干締まった部分も認められたが、全体に軟弱で不明瞭である。住居址中央付近を中心に多数の柱穴を検出しているが、主柱穴は掘り込み規模・配置等の点から見てP1～P6のやや不整な6本長方形配列が想定される。短辺3.30～3.50m・長辺5.70～5.80mである。炉は住居址中央奥壁よりの部分に2個検出されている。主炉は径50cm、副炉は30cmほどの地床炉である。住居址北西隅を中心に、幅1.40～1.80m・高さ10cmほどのベッド状の高まりを検出している。形態がやや不整で、通常のベッド状遺構として把握しうるのかは不明である。また明確な規則性はないものの、各壁に直交する形で住居址中央方向に伸びる間仕切り溝を多数検出している。溝の規模は長さ2.00m前後・幅20cm前後・深さ5cm前後である。P7・P8は貯蔵穴と考えられ、P7は内部より比較的多量の土器を出土している。

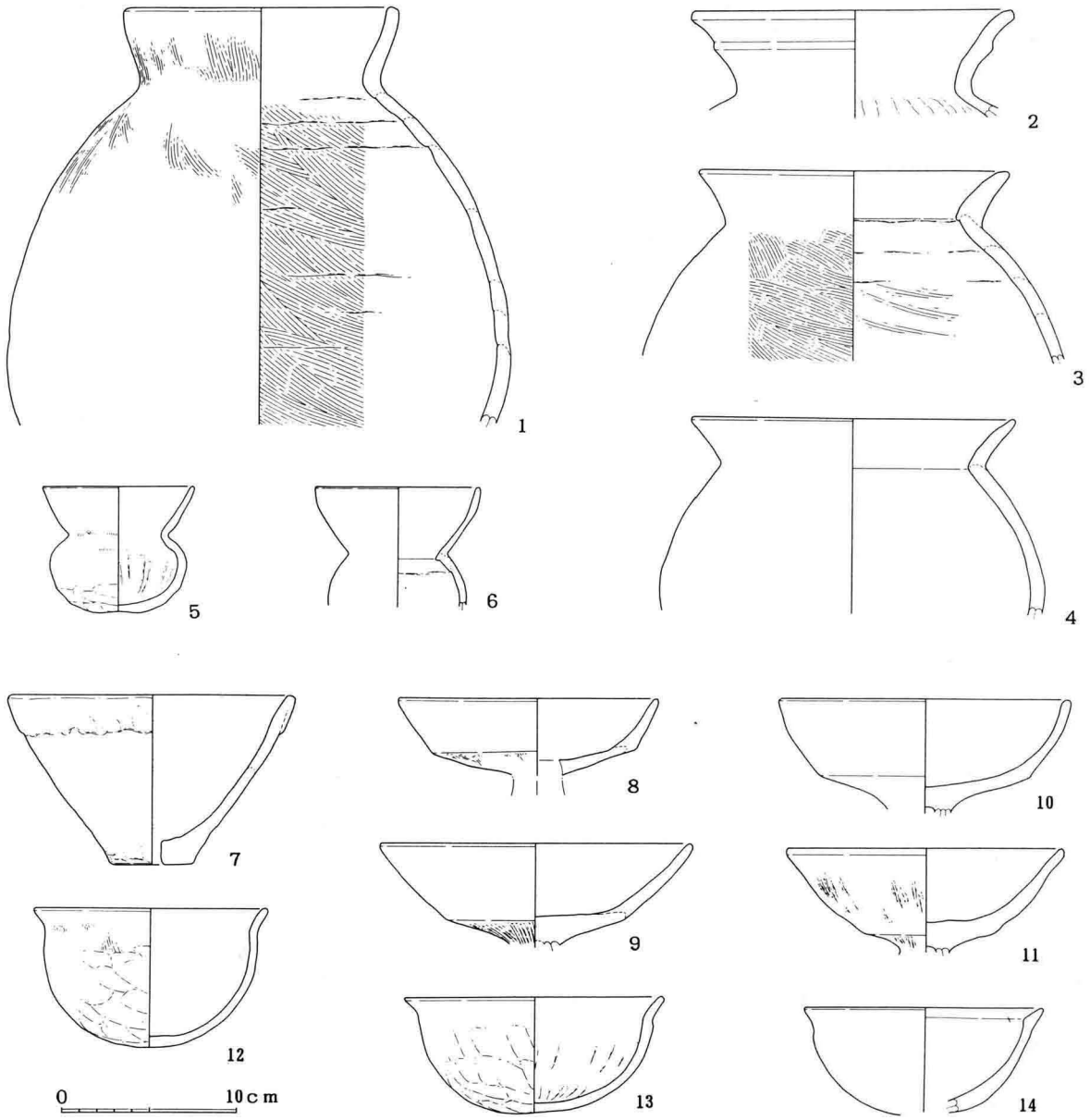


図93　12号住居址出土土器実測図　（1：4）

図94　12号住居址

12号住居址

13・14号住居址

13号住居址

13号住居址貯蔵穴

13号住居址　（図95・97）

古墳中期の14号住居址を切って構築され、北東隅は調査区外となる。平面プランは一辺7.40mほどの隅丸長方形住居址である。確認面からの掘り込みは平均30㎝前後で、床面は全体に軟弱で不明瞭である。柱穴はP1～P14まで検出している。主柱穴はP1～P3と考えられ、4.40×5.10mの4本方形配列と予想される。間仕切り溝との関係から見ればP8・P10も支柱となる可能性が高い。P15は入り口部に存在するピットで、1.00×0.80m・深さ30㎝を測る。貯蔵施設であるのかは不明。両脇に間仕切り溝を有する。住居址中央奥壁寄りの部分に焼土の堆積を確認したが、明確な地床炉ととらえられるものではない。P2・P3からそれぞれ壁に向けて、またP71の両脇に間仕切り溝を検出している。特に住居址南西隅の一角は、P14を囲むように間仕切り溝がめぐらされている。

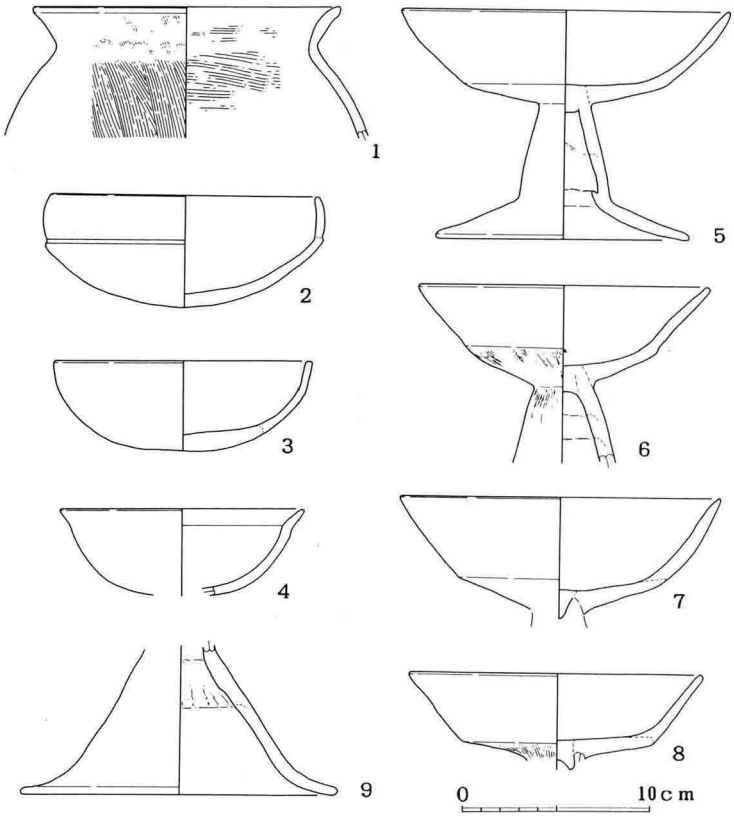


図95　13号住居址出土土器実測図　（1：4）

14号住居址　（図96～98）

13号住居址に西側を切られ、1/2ほどを検出したのみである。平面プランは一辺8.40mほどの隅丸方形住居址である。床面は全体に軟弱なものであった。柱穴はP1～P8を検出している。主柱穴はP1・P2と考えられ、一辺4.00mほどの4本方形配列が予想される。壁際には幅0.70～1.10m・高さ10㎝ほどのベッド状の部分がみとめられ、全周する可能性が高い。住居址中央東寄りの部分に焼土の堆積が認められたが、明確な地床炉といえるものではない。床面ならびに覆土下層を中心に比較的多量の土器が出土している。

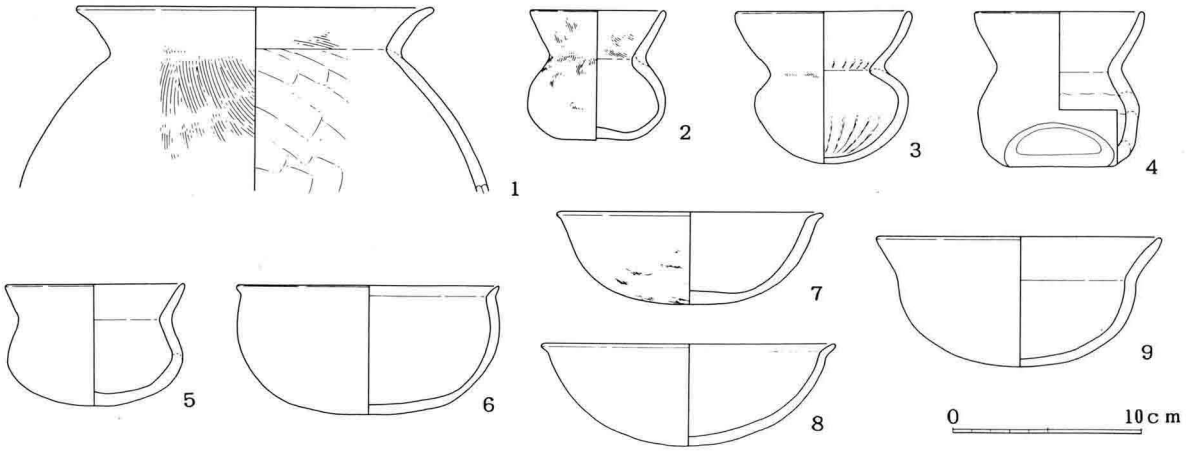


図96　14号住居址出土土器実測図①　（1：4）

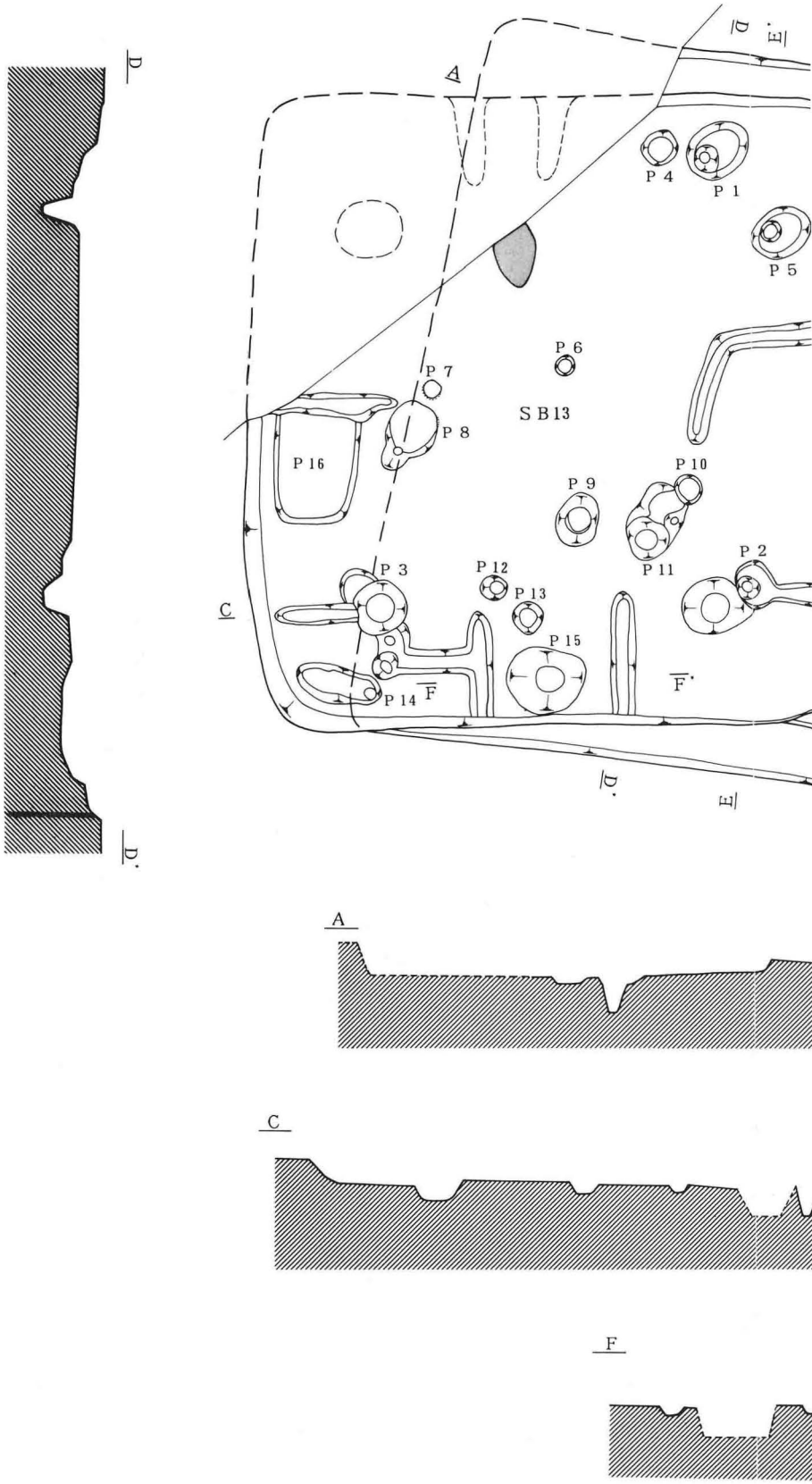


図97　13号・14号住居

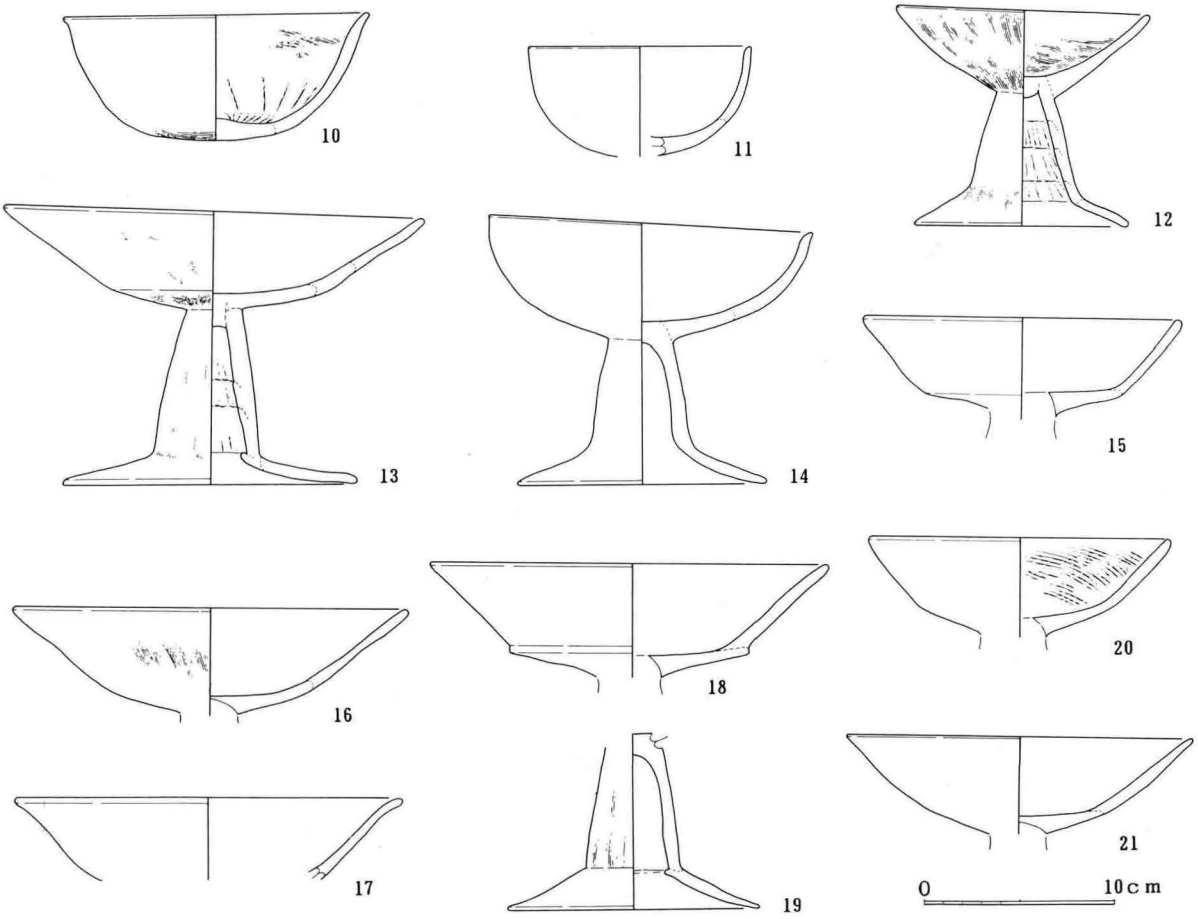


図98　14号住居址出土土器実測図②　（1：4）

15号住居址　（図99・100）

弥生後期の16号住居址を切って構築される。平面プランは一辺7.30～7.40mの隅丸方形住居址である。確認面からの掘り込みは平均30cm前後で、床面は軟弱である。柱穴はP1～P23まで検出している。主柱穴はP1～P4で、一辺3.80～4.20mほどの4本方形配列である。間仕切り溝との関連よりすれば、P5・6・19なども支柱として考えられる。P24は入り口部のピットで、径1.00m・深さ34cmを測り、両脇に間仕切り溝を伴う。カマド脇に存在するP25は0.80×0.90m・深さ25cmを測り貯蔵穴の可能性が高い。カマドは新旧の2個が確認されている。旧カマドは奥壁中央に位置し、その東側に新たに新カマドが構築されていた。

間仕切り溝はP3・P5・P6からそれぞれ壁に向けて1本づつ、P24の両脇に2本、ならびにP19からP24へ向けて小規模なものが1本検出されている。壁周溝はP3・P6の間仕切り溝から南壁側に、またP5の間仕切り溝からP25までの住居址北西隅に検出されている。幅15cm前後・深さ10cm前後である。北東隅は16号住居址との切り合いのため明確には成し得なかった。

15号住居址

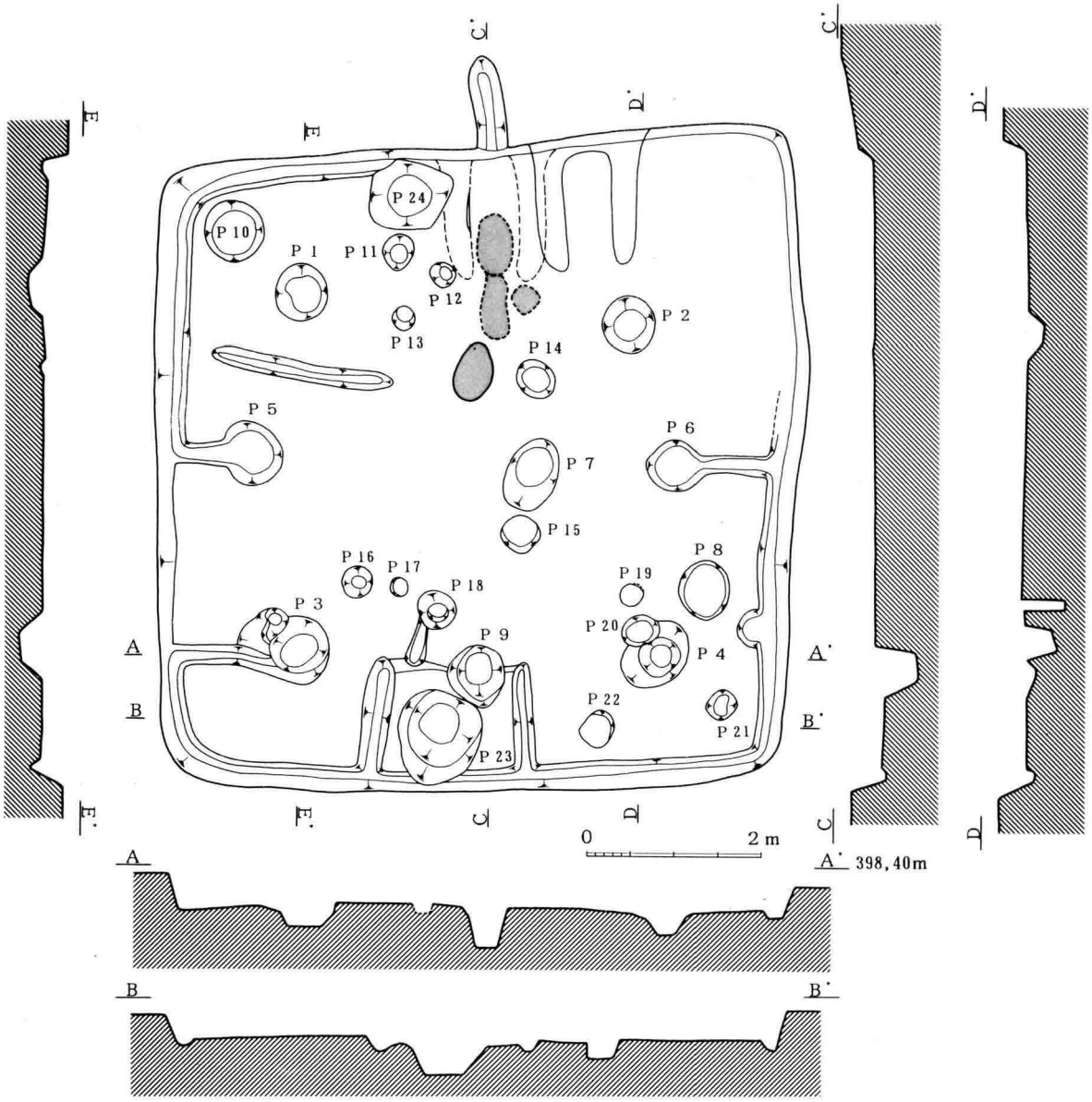
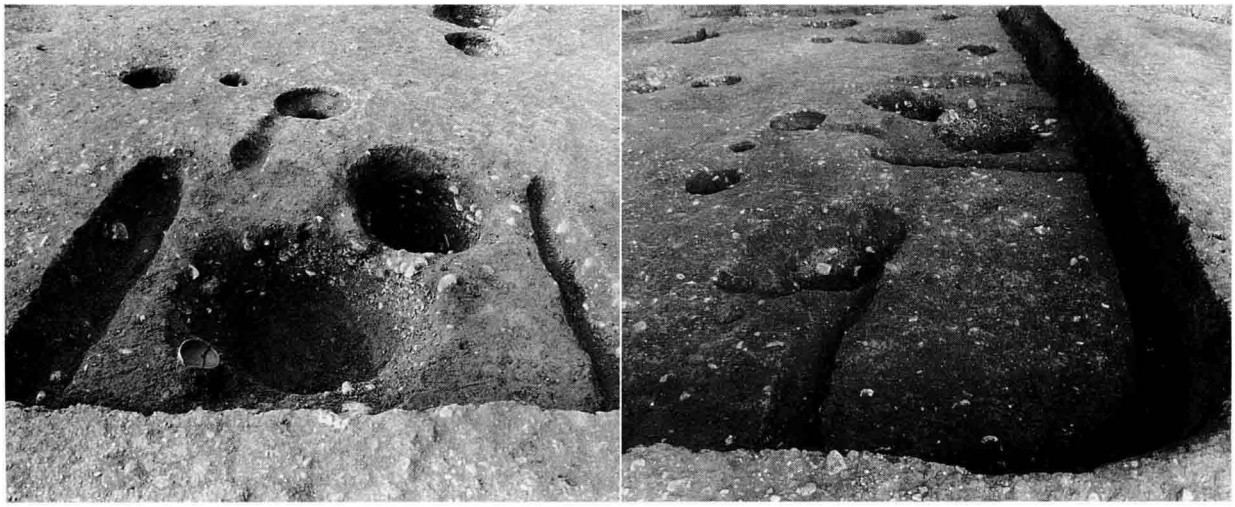


図99　15号住居址実測図　（1：80）



15号住居址入り口部ピット・周溝

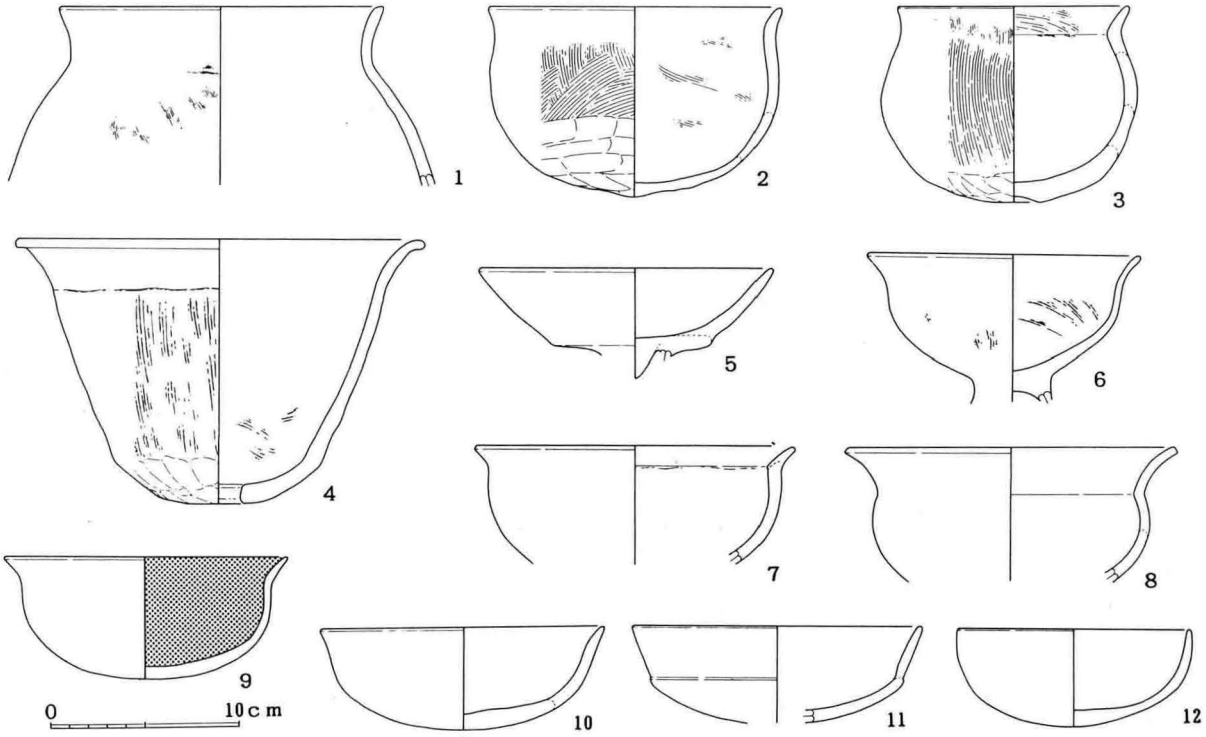


図100　15号住居址出土土器実測図　（1：4）

17号住居址　（図101・102）

弥生後期の16号住居址を切って構築され、住居址南東隅は調査区外となる。

平面プランは一辺5.80mほどの隅丸方形住居址である。確認面からの掘り込みは5～10cm程と浅い。床面は住居址中央付近が若干締まっていたが、南側は不明瞭なものとなる。

柱穴はP1～P10まで検出した。主柱穴はP1～P4で3.10×3.40mの4本方形配列である。奥壁側に検出されたP5・P6ならびにP7・P8はそれぞれ対になる支柱の可能性が考えられる。P11は貯蔵穴であろうか。

炉は奥壁側柱穴間中央やや内よりのところに位置し、径30cmほどの地床炉である。

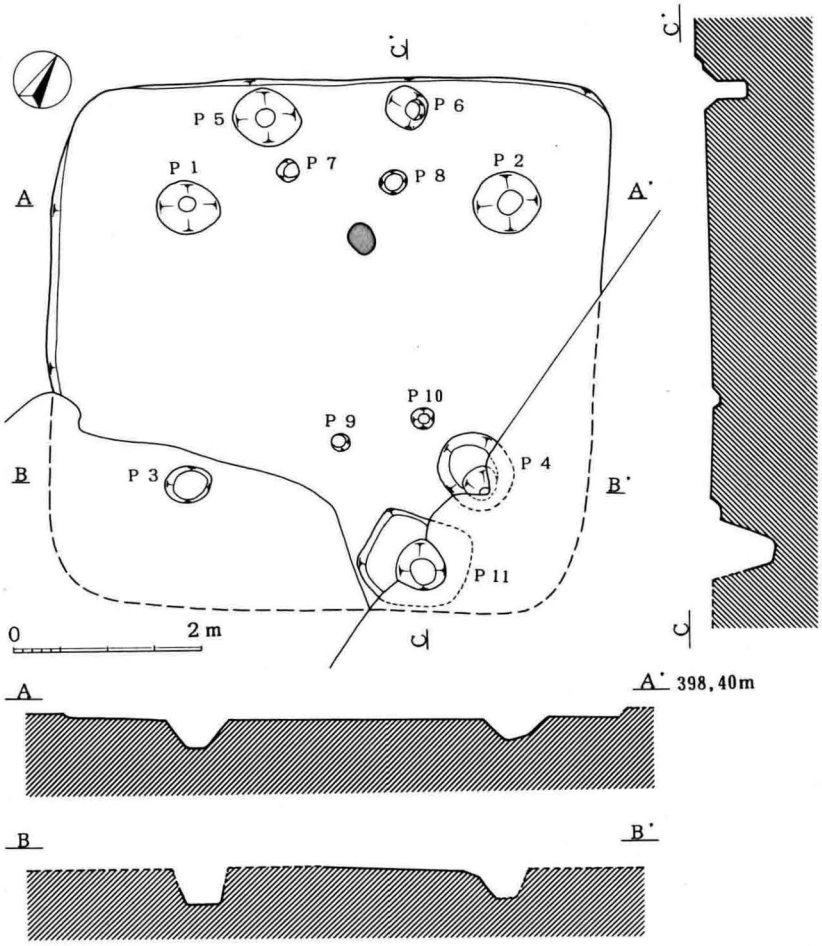


図101　17号住居址実測図　（1：80）

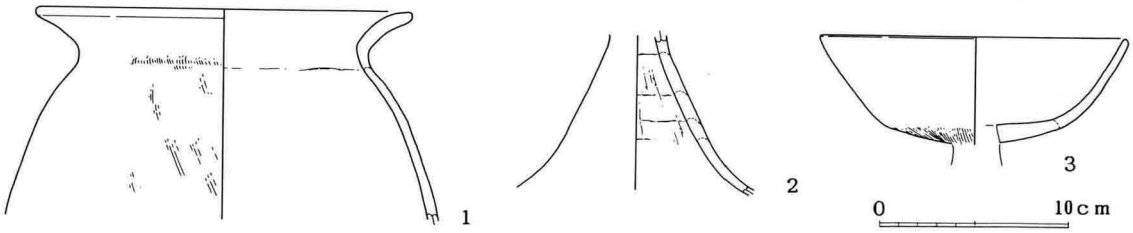


図102　17号住居址出土土器実測図　（1：4）

17号住居址

25号住居址　（図103）

古墳時代の10号住居址に南側上層を切られ、北側は1/2ほどが調査区外となる。

平面プランは一辺6.00mほどの隅丸方形住居址と考えられる。確認面からの掘り込みは平均30cmほどと比較的深いが、床面は全体に軟弱である。柱穴はP1～P4を検出した。主柱穴はP1～P3で、2.80～3.00mの4本方形配列と考えられる。柱穴の掘り込みは50～60cmと深い。P1・P2間中央に長径50cmほどの地床炉が検出されている。

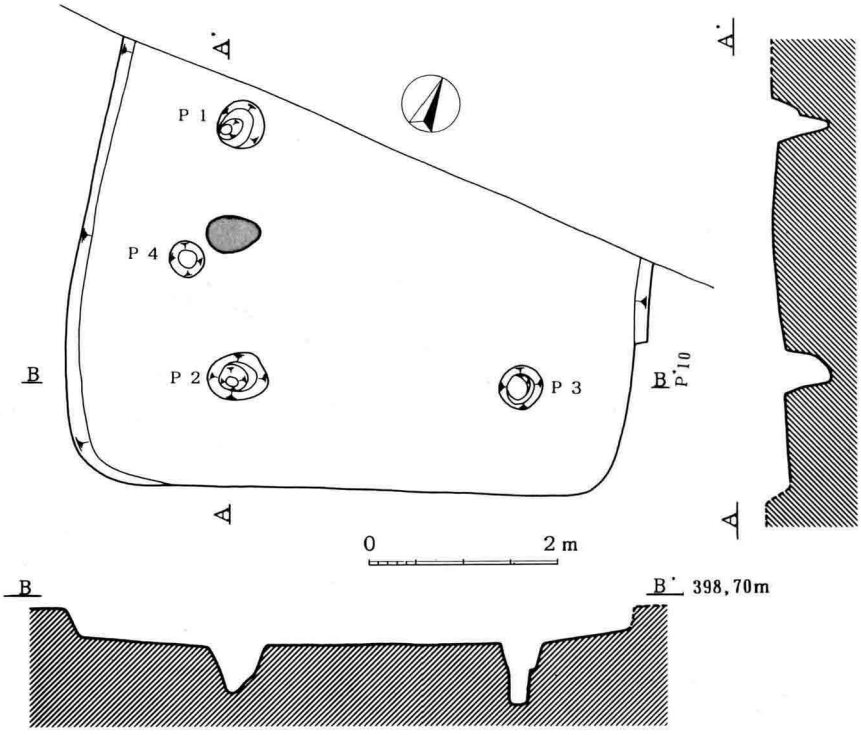


図103　25号住居址実測図　（1：80）

26号住居址　（図104・105）

弥生後期の38号住居址を切って構築され、古墳時代の69号住居址に上層を切られる。東壁側は掘り込みが浅く壁の立ち上がりは確認していない。西壁側の掘り込みは平均20cm前後である。床面は全体に軟弱で不明瞭である。

平面プランは5.90×5.50mの、やや不整な隅丸方形住居址である。柱穴はP1～P13まで検出している。主柱穴はP1～P4で、一辺3.30mほどの4本方形配列である。P13は貯蔵穴と考えられ、1.00×0.90m・深さ37cmで、内部より甕・高坏・坏などが出土している。

カマドは奥壁中央に位置し70cmほどの袖部から確認されている。燃焼部からは甕ならびに高坏が出土している。煙道は確認されていない。

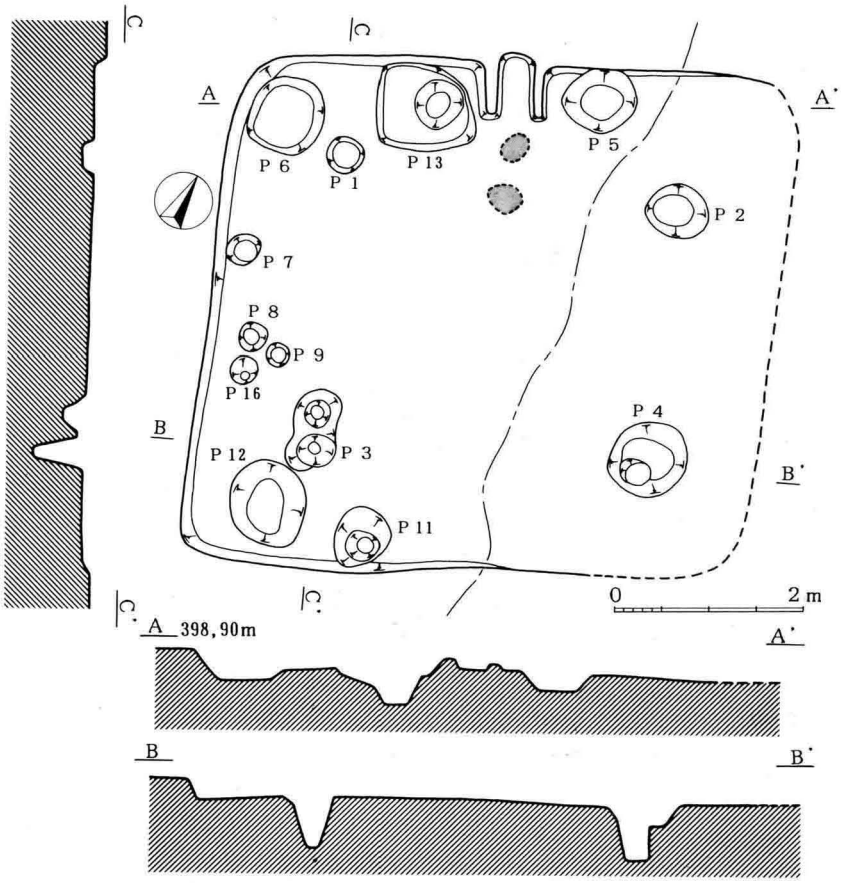


図104　26号住居址実測図　（1：80）

26号住居址カマド

26号住居址貯蔵穴

26号住居址

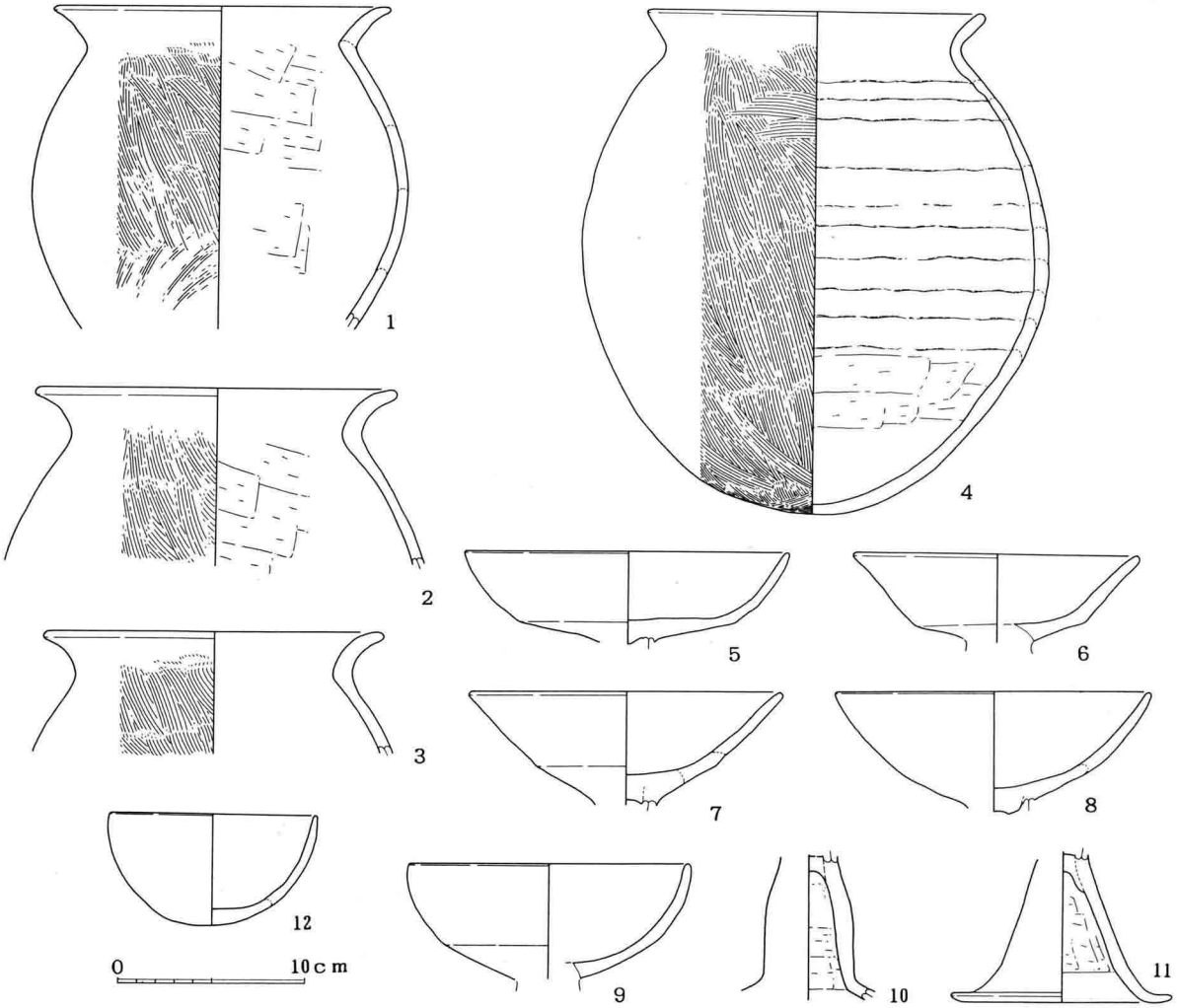


図105　26号住居址出土土器実測図　（1：4）

27号住居址　（図106・107）

弥生後期の38号住居址を切って構築される。確認面からの掘り込みは平均50cm前後と深い。床面は全体に軟弱である。

平面プランは6.00×5.50mの隅丸方形住居址である。柱穴はP1～P13までを検出した。主柱穴はP1～P4で一辺2.60～2.70mの4本方形配列である。

カマドは奥壁中央やや西寄りのところに位置し、遺存度は良好である。規模は両袖間外側で0.90m内側で0.30m、長さ0.90m、煙道部の長さ1.20mである。燃焼部はフラットで床面より若干高いレベルにある。

P14は径60cm・深さ30cmを測る。工作ピットの可能性が高く覆土内より臼玉ならびに石製模造品の未製品を出土している。P15は入り口部ピットで二段にわたる掘り込みを有し、規模は上面で1.20×1.90m、深さ55cmを測る。

東側壁際は幅50cm・深さ10cmほどのベッド状の高まりが認められ、周溝によって区画されている。

間仕切り溝はP2～P4より壁に向けて各1本づつ、P15の東側に1本、西壁中央部分に3本が検出されている。壁周溝は全周しており、幅20cm・深さ5cmほどである。

カマド周辺より比較的多量の土器が出土している。ただし図示した須恵器は覆土中層よりの出土である。

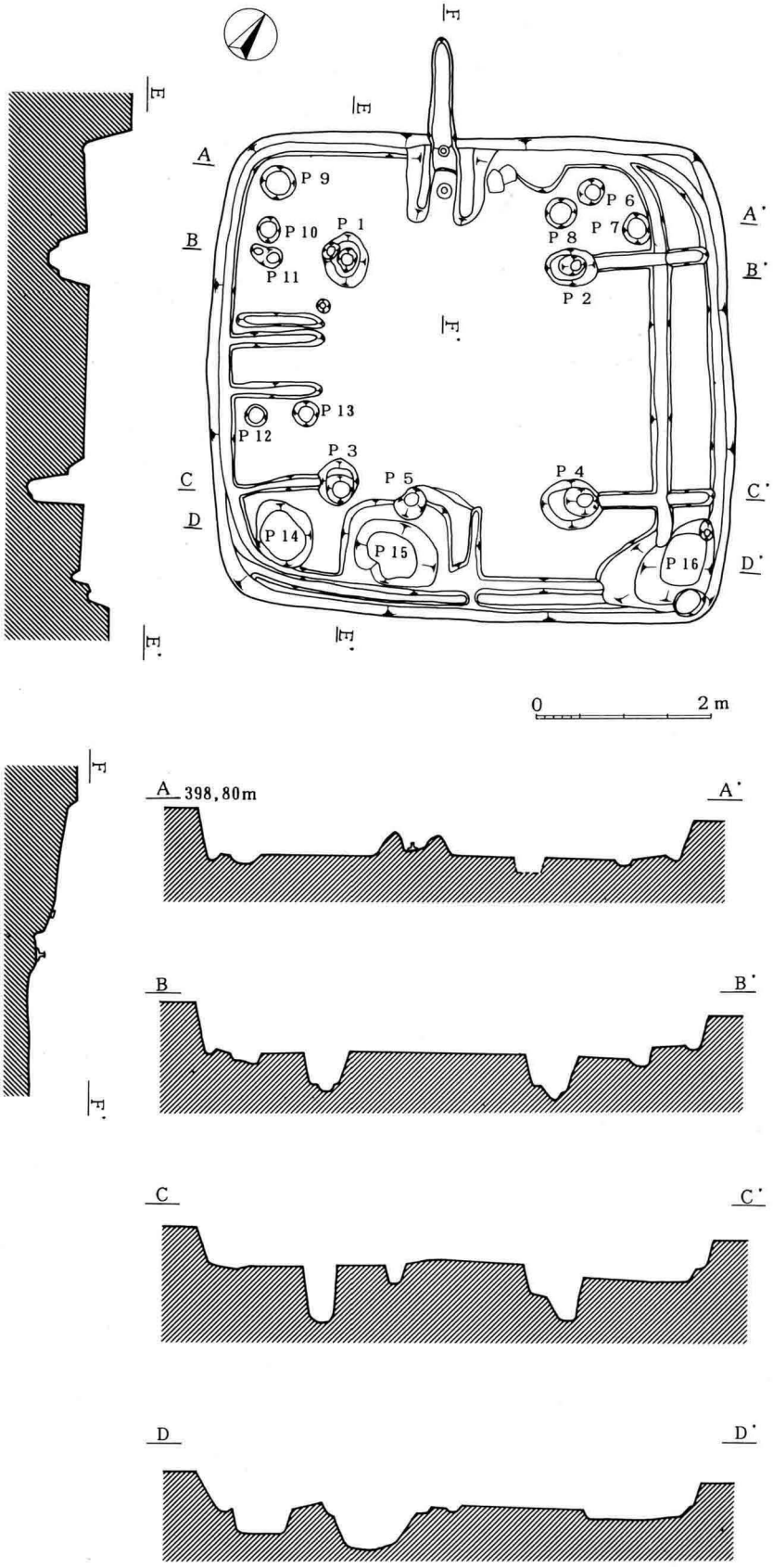
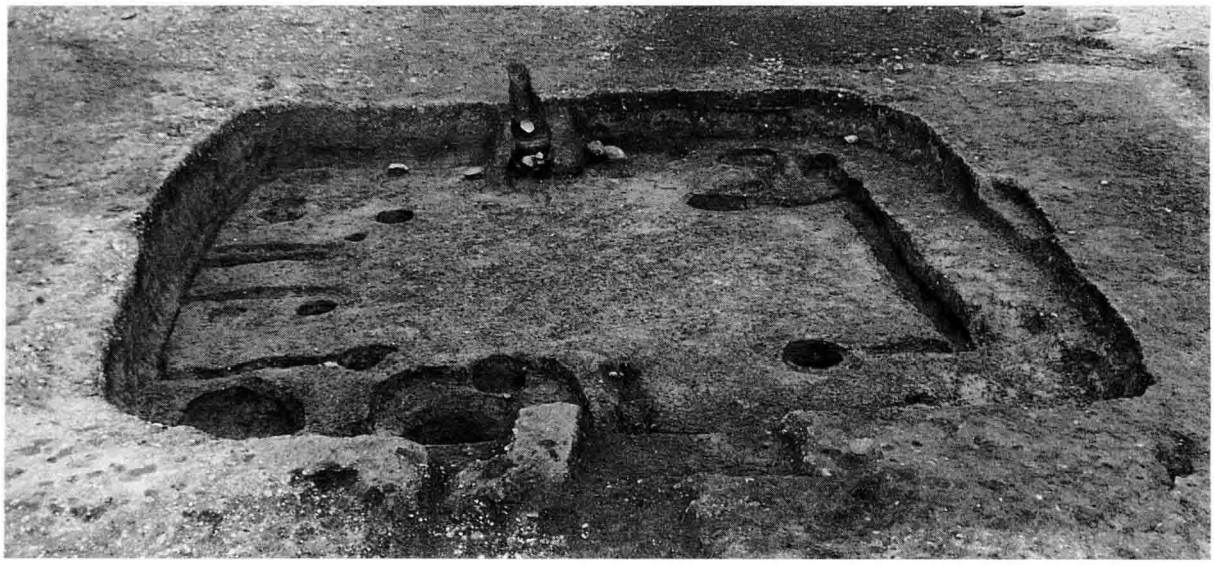
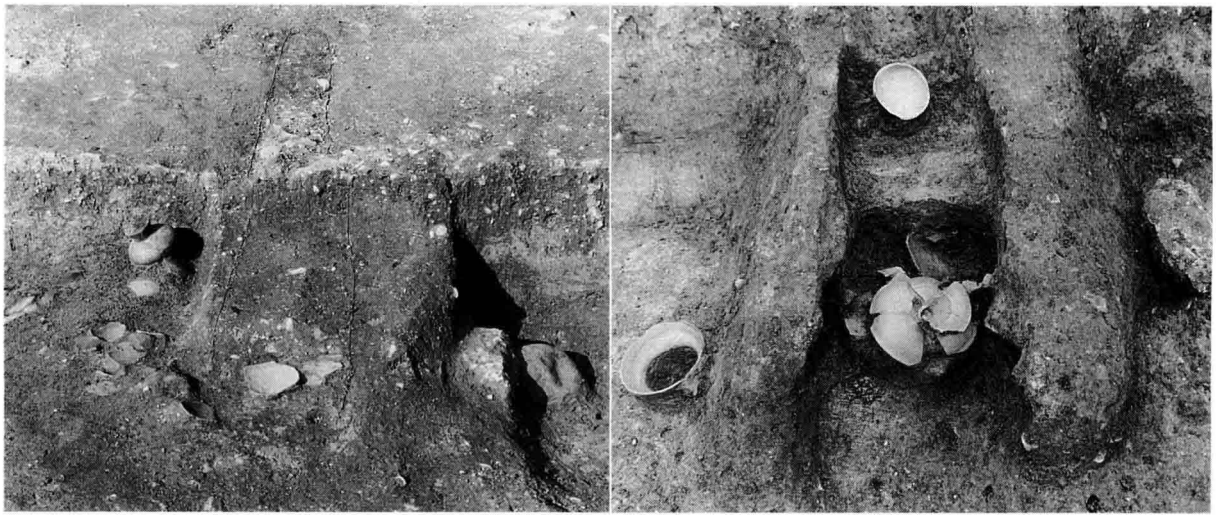


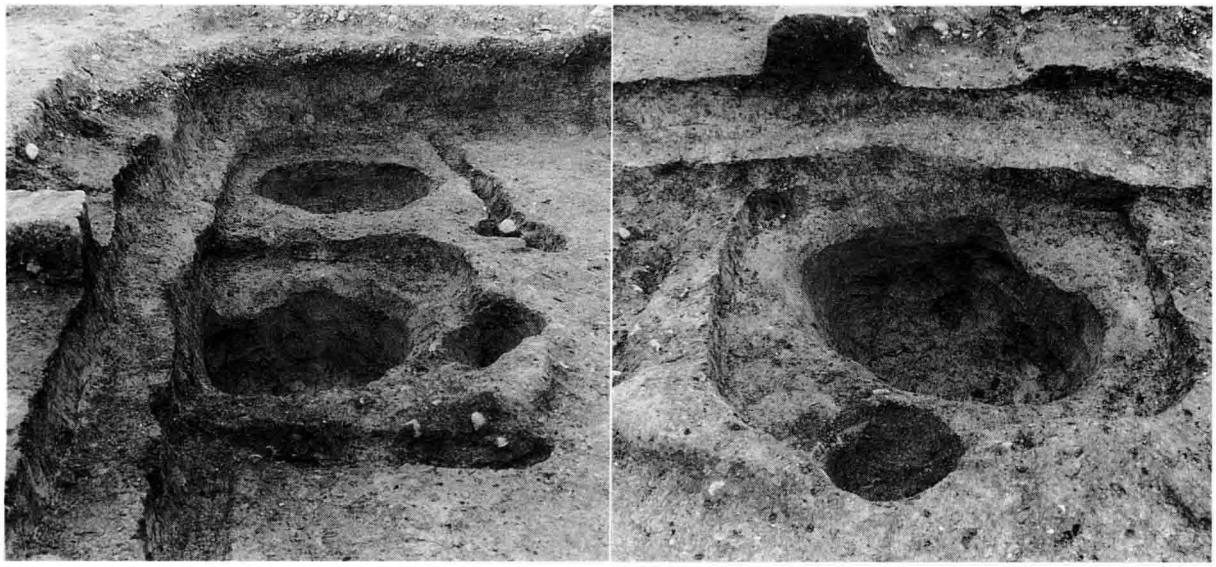
図106　27号住居址実測図　（1：80）



27号住居址



27号住居址カマド



27号住居址入り口部ピット

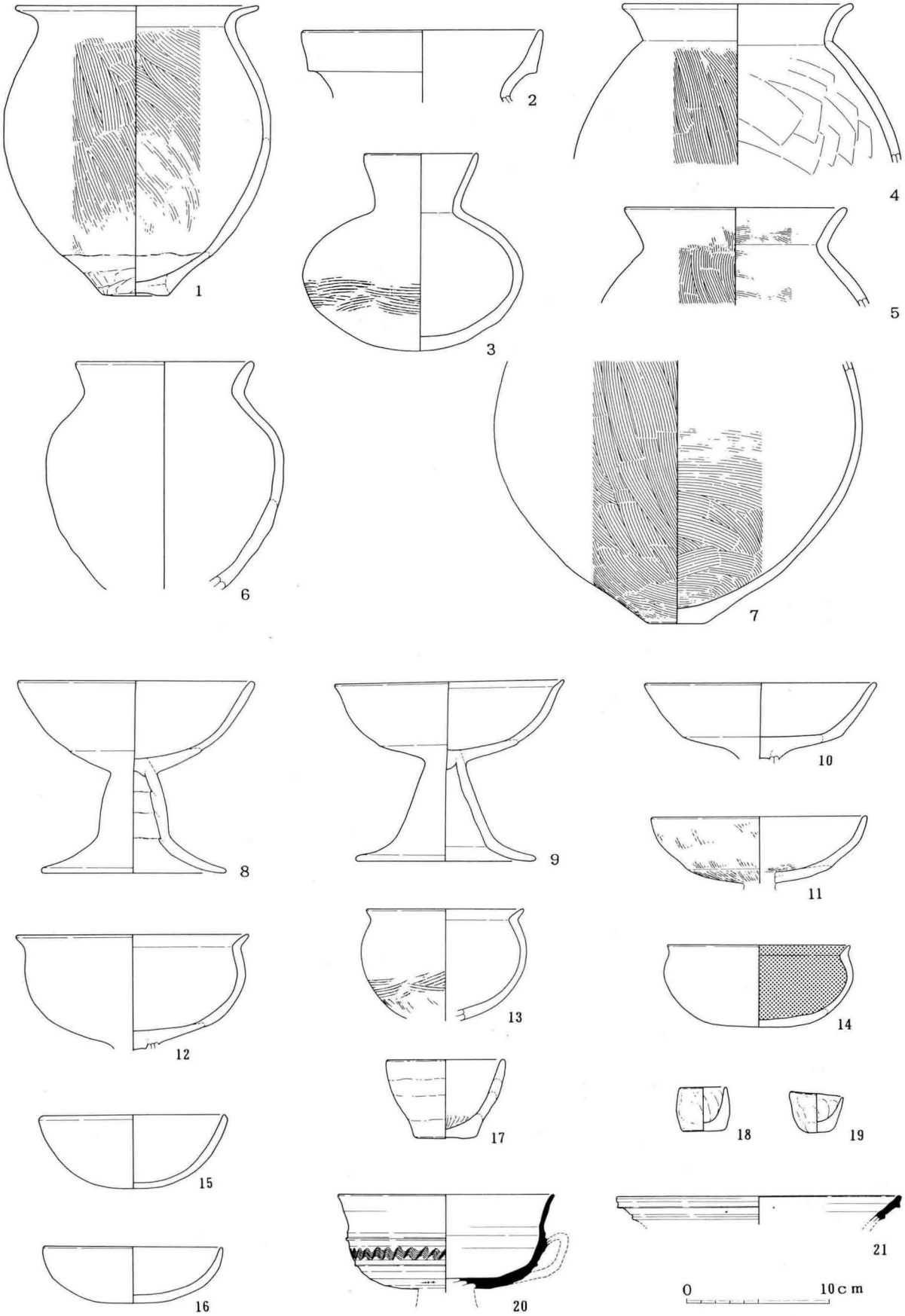


図107　27号住居址出土土器実測図　（1：4）

30号住居址　（図108・109）

弥生後期の41号住居址を切って構築される。確認面からの掘り込みは平均60cm前後と深い。床面は全体に軟弱である。平面プランは5.40×5.70mの隅丸方形住居址である。柱穴はP1～P7を検出している。主柱穴はP1～P6で短辺2.90～3.00m・長辺3.20～3.30mの6本方形配列である。P8は2段の掘り込みを有する入り口部ピットで、内部にさらに2本のピットを有する。上面での規模は1.60×1.00m、内部のピットの深さは60cm前後である。カマドは奥壁中央やや西寄りのところに位置し、河原石を利用した石組カマドである。焚き口部の天井石が落ち込んだ状況で検出された。規模は両袖間外側で1.00m、内側で0.40m、長さ1.00m、また煙道は長さ0.90mである。燃焼部は若干掘りくぼめられるが床面とほぼ同一のレベルである。支脚には河原石が利用されている。間仕切り溝はP1～3・5・6からそれぞれ壁へ向けて1本づつの5本が検出されている。また奥壁側を除いて壁周溝がめぐらされている。幅20cm・深さ15cm前後である。カマド周辺ならびに住居址中央付近の床面上より、比較的多量の土器が出土している。

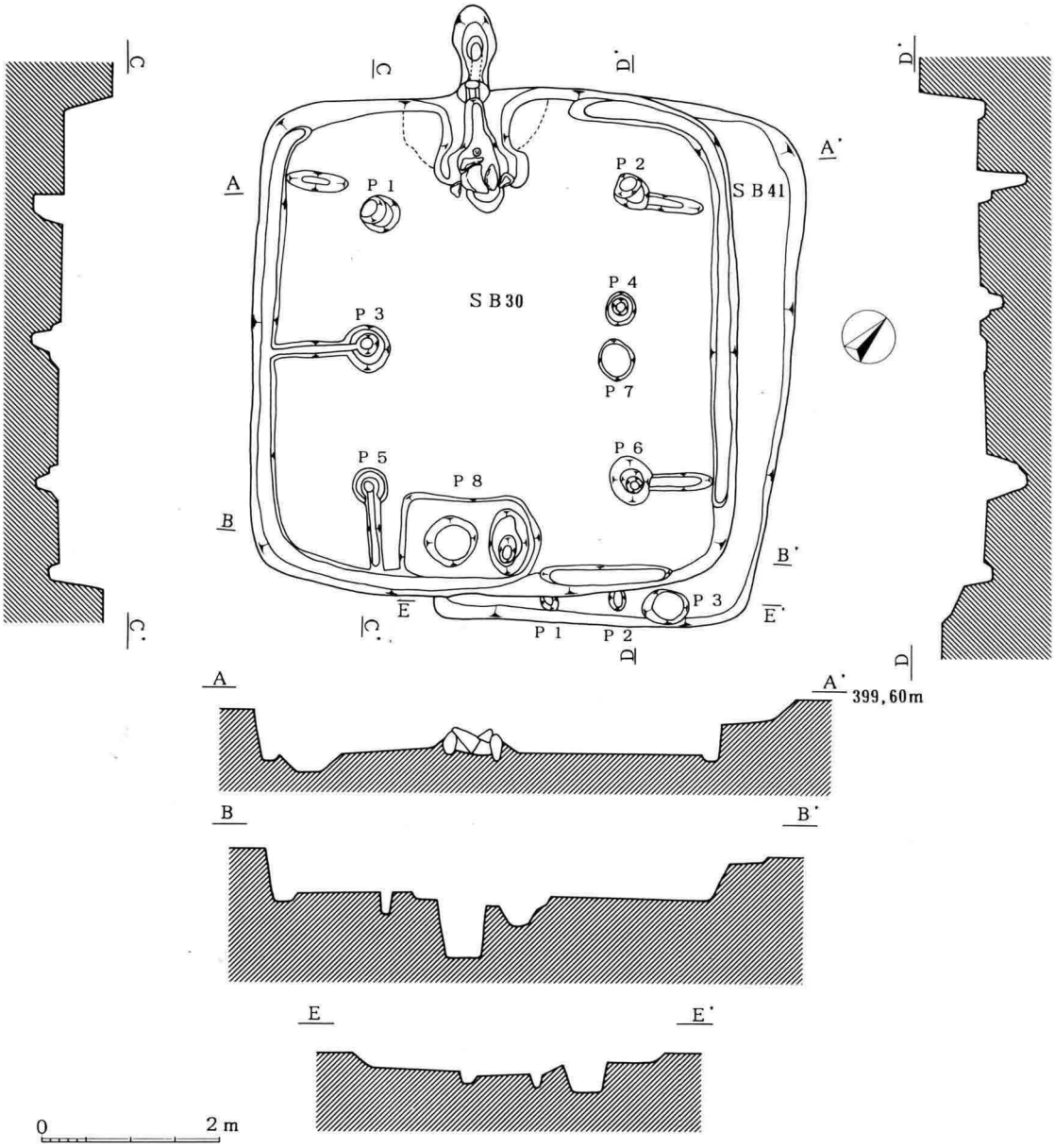


図108　30号・41号住居址実測図　（1：80）

30号・41号住居址

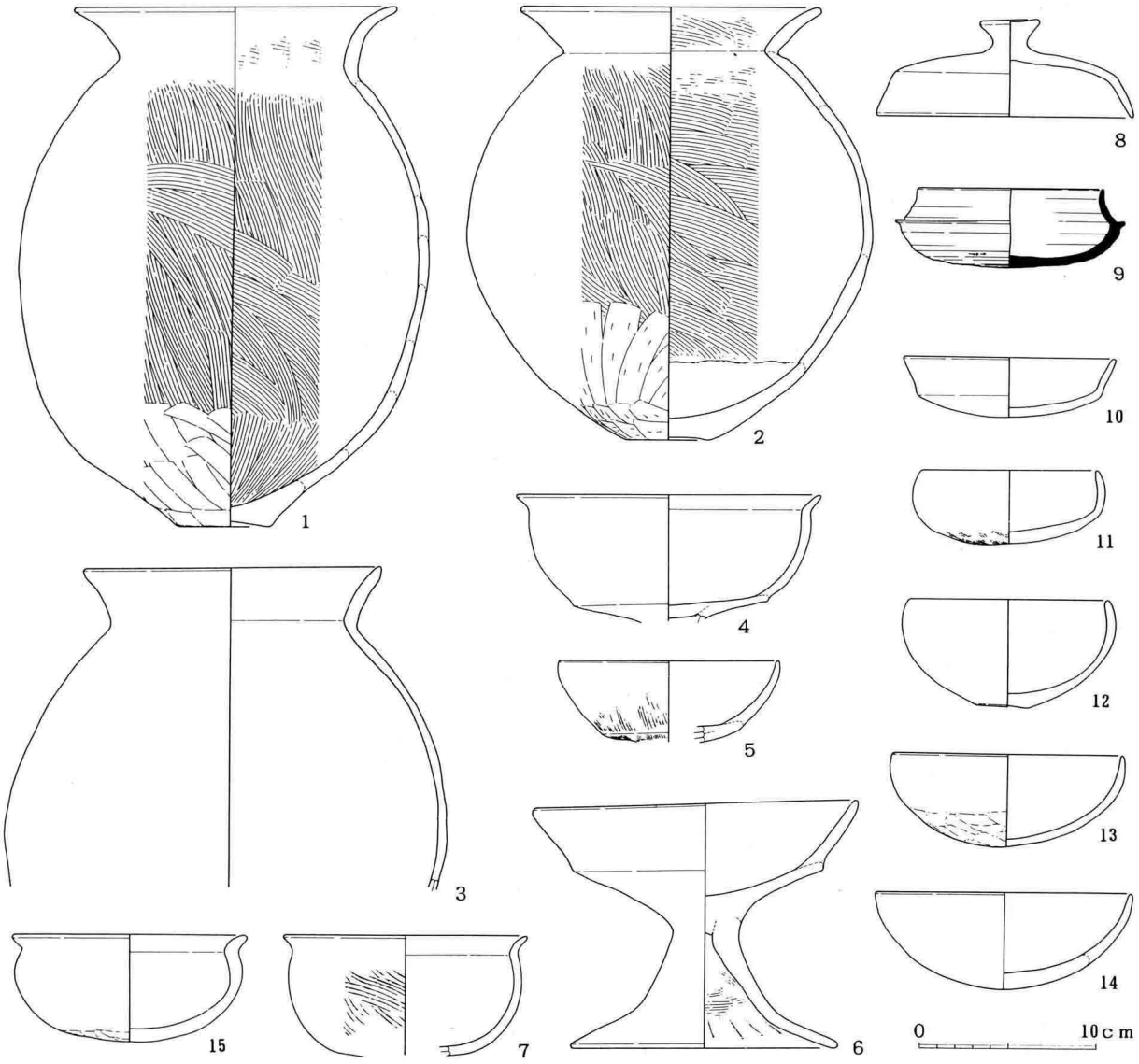


図109　30号住居址出土土器実測図　（1：4）

30号住居址カマド

30号住居址土器出土状況

31号住居址　（図110・111）

古墳時代の44号住居址と切り合い、南東側は大半が調査区外となり詳細は不明な部分が多い。確認面からの掘り込みは平均10cm前後と浅く、床面は全体に軟弱である。平面プランは一辺8.00mほどのやや大型の隅丸方形住居址と予想される。主柱穴は掘り込み規模からＰ1と考えられるが配列等詳細は不明。カマドは奥壁中央に位置するものと考えられる。規模は両袖間外側で1.10m、内側で0.40m、長さ1.30mである。燃焼部はフラットで床面とほぼ同一レベルである。住居址北東隅に高さ10cm前後の不整形なベッド状の高まりが検出されており、この部分より子持勾玉が１点出土している。

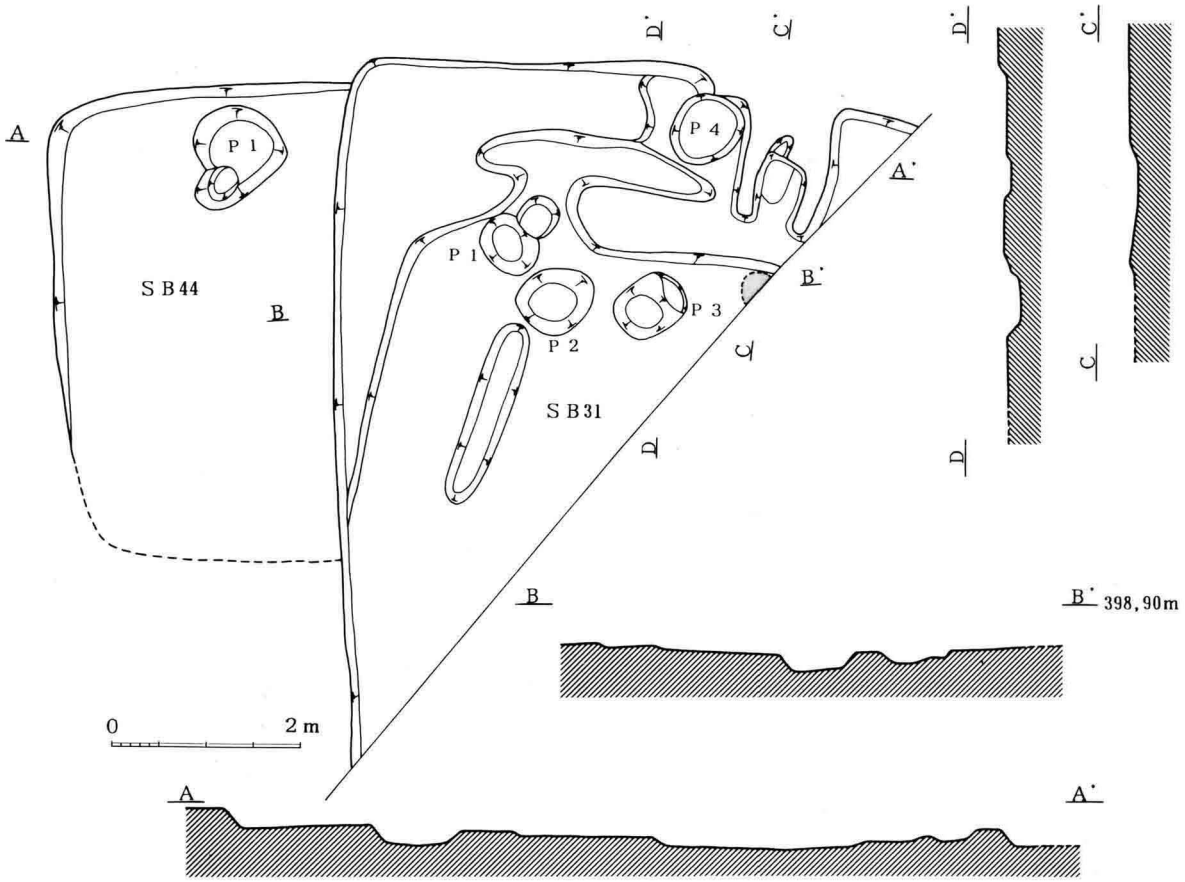


図110　31号・44号住居址実測図　（１：80）

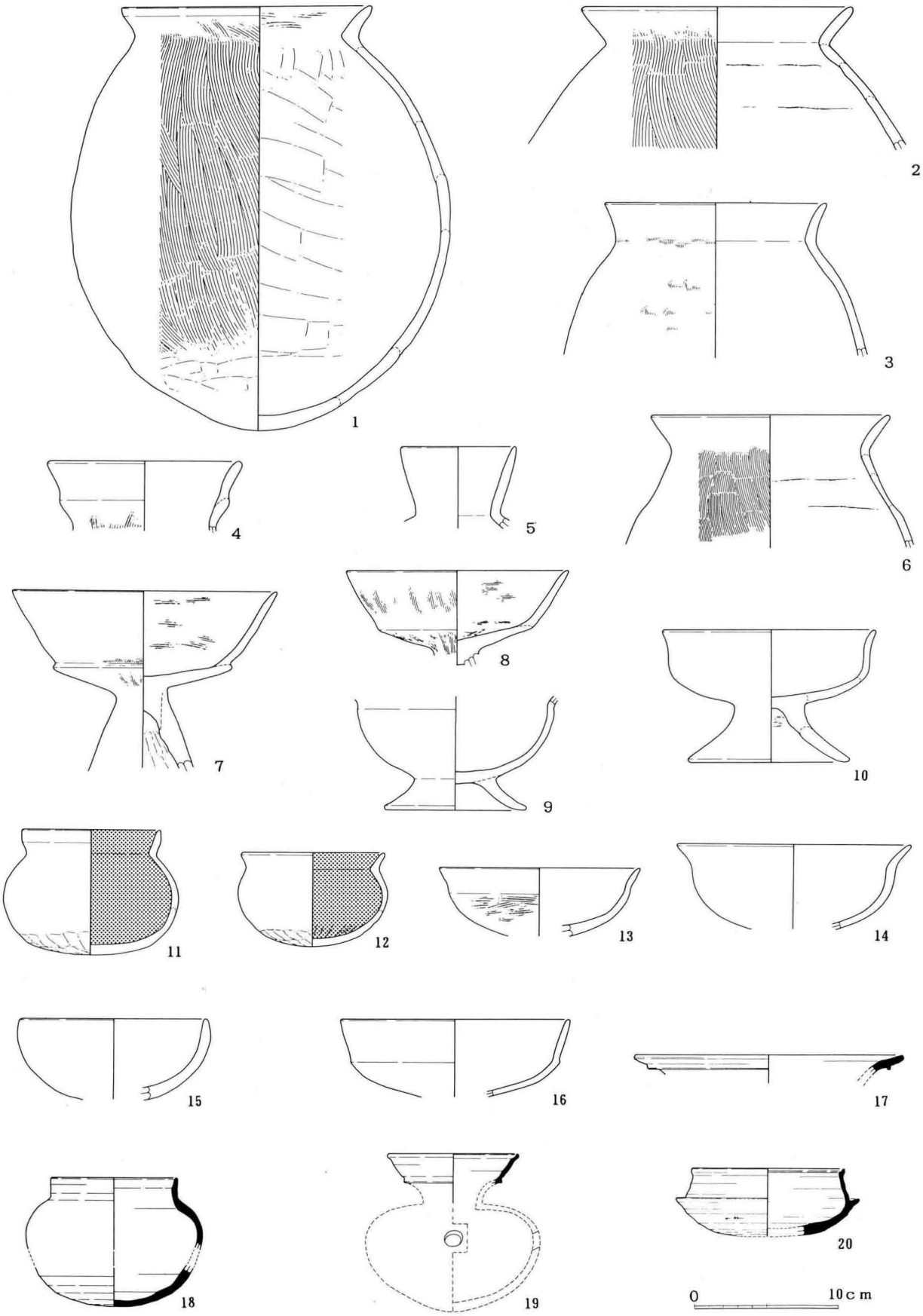


図111　31号住居址出土土器実測図　（1：4）

31号住居址

31号住居址カマド

36号住居址床面円礫検出状況

36号住居址

36号住居址　（図112・113）

古墳時代の47号住居址を切って構築されるが、北西側は上層を51号住居址に切られる。確認面からの掘り込みは平均40cm前後と深いが、床面は全体に軟弱である。平面プランは7.30×7.50mのやや大型の隅丸方形住居址である。柱穴はP1～P18までを検出している。主柱穴はP1～P4で4.00×4.20mの4本方形配列である。間仕切り溝との関連よりすればP5も主柱の一部となる可能性がある。P19は二段にわたる掘り込みを有する入り口部ピットで、0.90×0.70m・深さ28cmを測る。カマドは奥壁中央に位置する。規模は両袖間外側で0.80m・内側で1.25m・長さ1.00mである。また0.50mほどの煙道も確認している。北壁と東壁際には幅1.00m前後・高さ10cmほどの、また南壁際には幅30cm・高さ10cmほどのベッド状の高まりを検出している。間仕切り溝はP1・P3から壁に向けて各1本、P2から壁に向けて2本、P1・P5間に1本、東壁中央付近に1本の計6本を検出してい

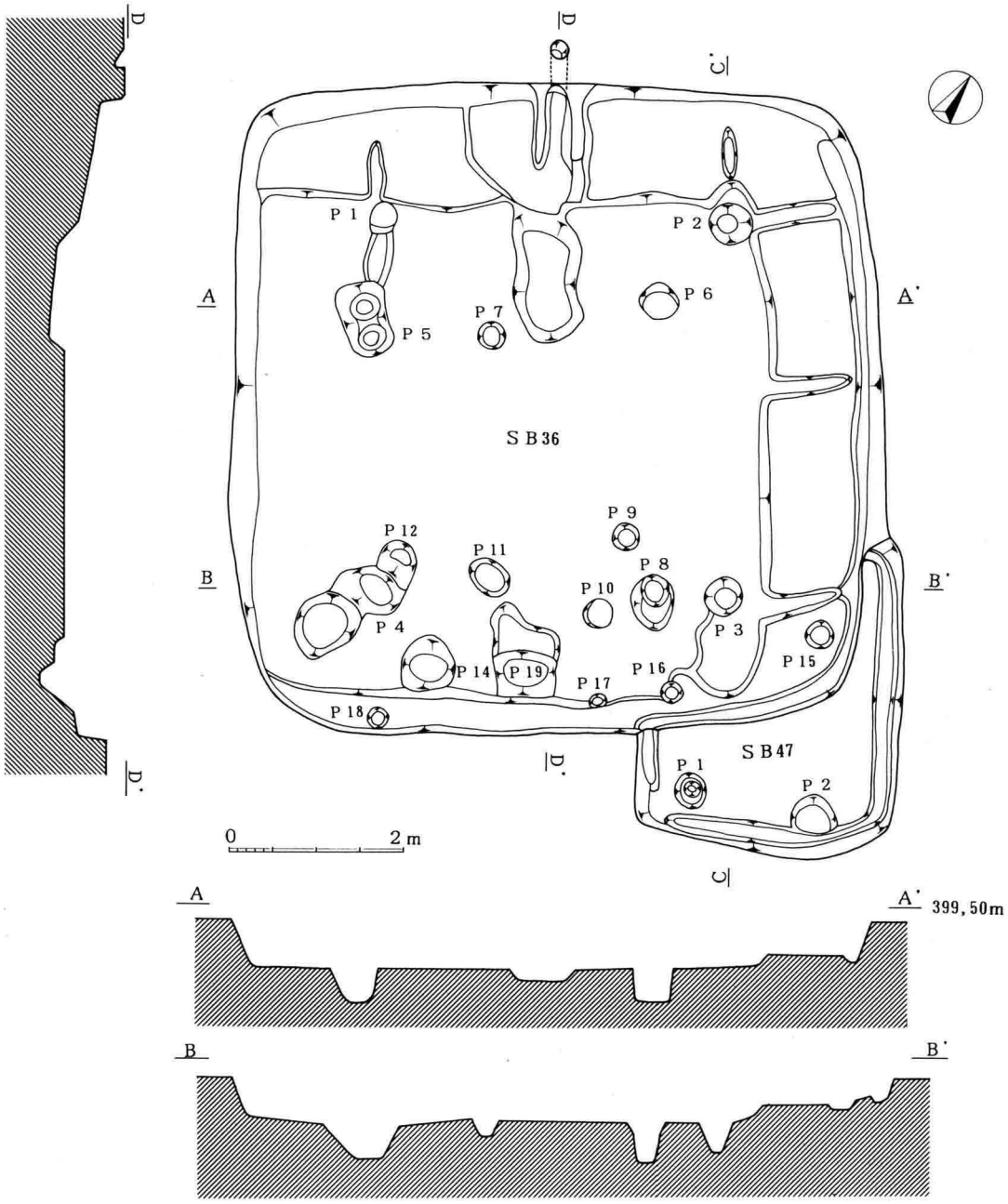


図112　36号・47号住居址実測図　（1：80）

る。東壁中央に位置する間仕切り溝とP3よりのびる間仕切り溝によって区画されたベッド状部分からは、大量の石製模造品の未製品が出土している。いずれも製作工程上の同一過程のもので、本住居址は工房址もしくは工人の住居と言った性格も想定される。ベッド状部分を除く住居址中央部の床面上には明黄燈色砂質土にまじえて円礫が敷きつめられたような状況で検出されている。このうえに板材等を敷設して床面とした可能性も考えられるが性格不明である。いずれにしても大量に出土した石製模造品の未製品とともに、本住居址の特殊性を示す施設ととらえられよう。覆土上層からは炭化材・円礫とともに比較的多量の土器が、本住居の埋没過程に投棄された状況で出土している。図示した土器のうち(1)～(9)は床面ならびにカマド周辺より出土したもの、(10)～(19)は覆土上層より出土したものである。

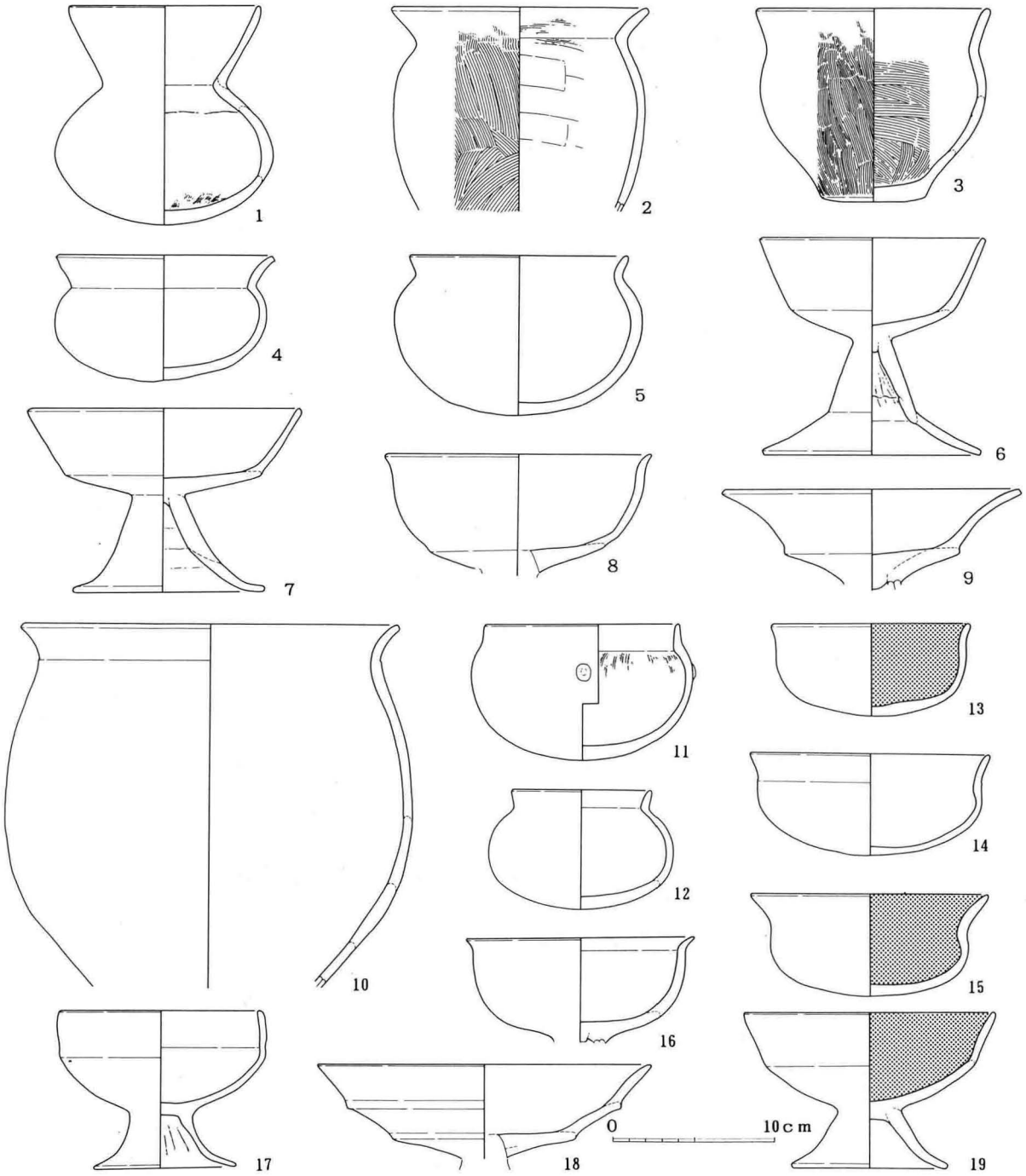


図113　36号住居址出土土器実測図　（1：4）

37号住居址　（図114・115）

弥生後期の38号住居址を切って構築され、東側1/3ほどが調査区外となる。確認面からの掘り込みは平均50cm前後と深い。床面は全体に軟弱である。平面プランは6.20×6.30mの隅丸方形住居址である。柱穴はP1～P7を検出している。主柱穴はP1～P3で3.20×3.30mの4本方形配列と考えられる。P8は入り口部ピットで深さ34cmを測る。両脇に間仕切り溝を伴う可能性が高い。カマドは奥壁中央に位置し、焚き口部に石組を有する石組カマドである。石組はほぼそのままの状態で検出されている。規模は両袖間外側で1.10m、内側で0.40m、長さ1.10mである。また1.00mほどの煙道も検出されている。燃焼部は若干掘りくぼめられるが、床面とほぼ同一のレベルである。支脚に転用された高坏が、倒立した状態で出土している。カマドより西

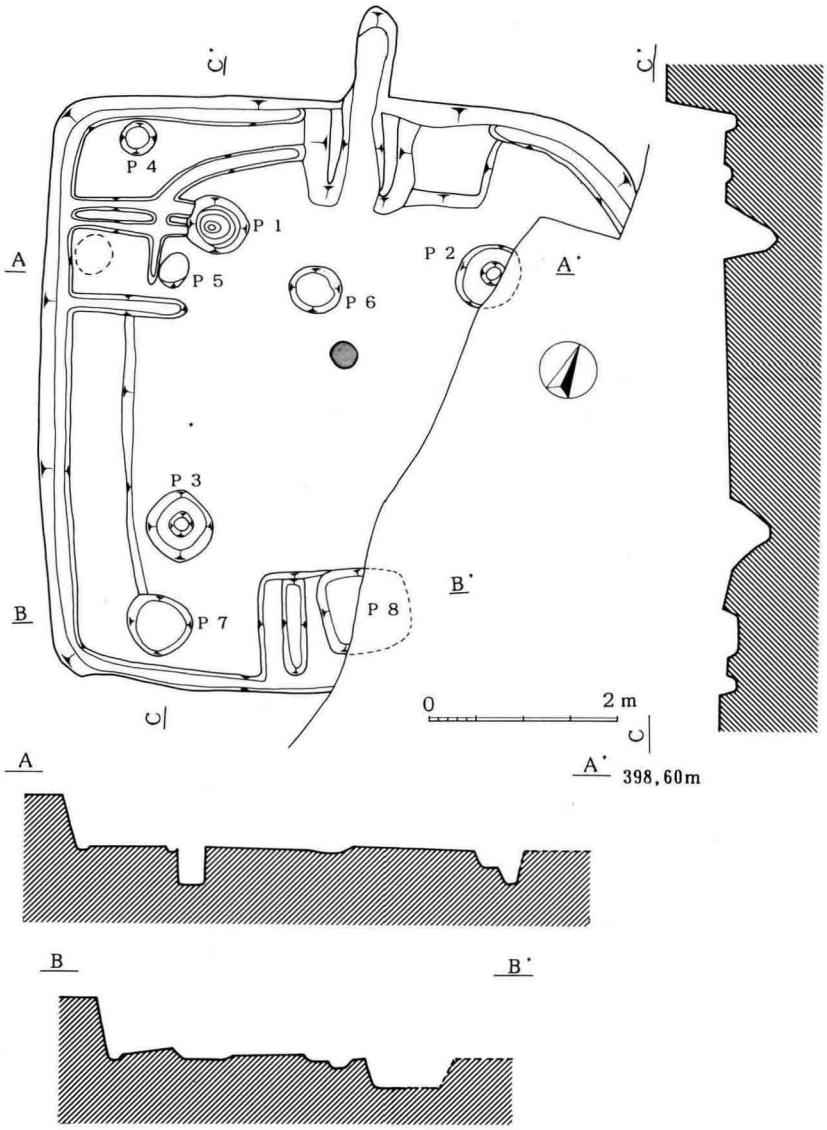
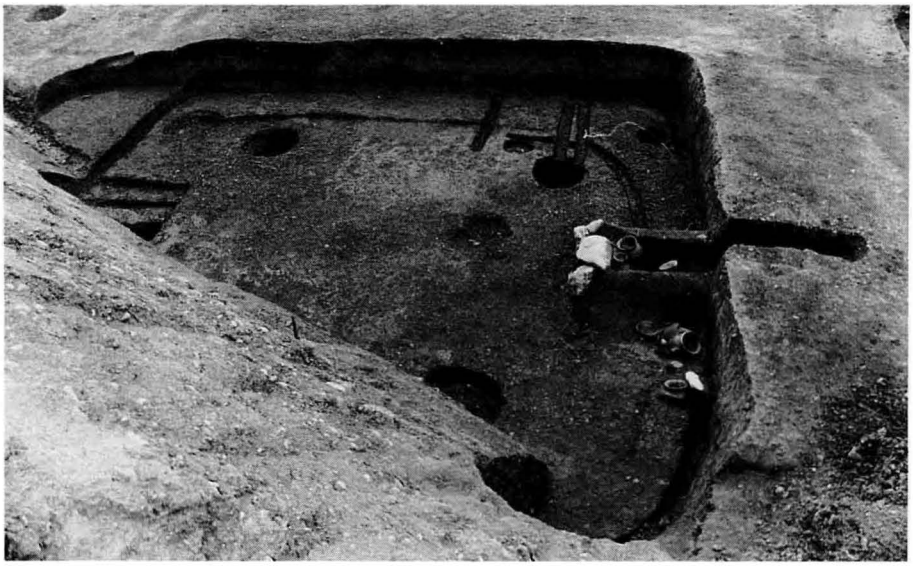


図114　37号住居址実測図　（1：80）



37号住居址

側の奥壁際から西壁にかけては、幅50cm前後・高さ10cmほどのベッド状の高まりが認められ、特に奥壁側は内側にも周溝がめぐらされている。またカマドの東側は若干掘りくぼめられ、この部分より甕・高坏・坏等が集中して出土している。間仕切り溝はP1から壁に向けて2本、P8の西側に1本、西壁中央やや北よりのところに1本の計4本が検出されている。壁周溝はカマド付近を除いて全周しているようで、幅15cm・深さ5cm前後である。住居址中央やや北寄りのところに計30cmほどの焼土の堆積が確認されている。

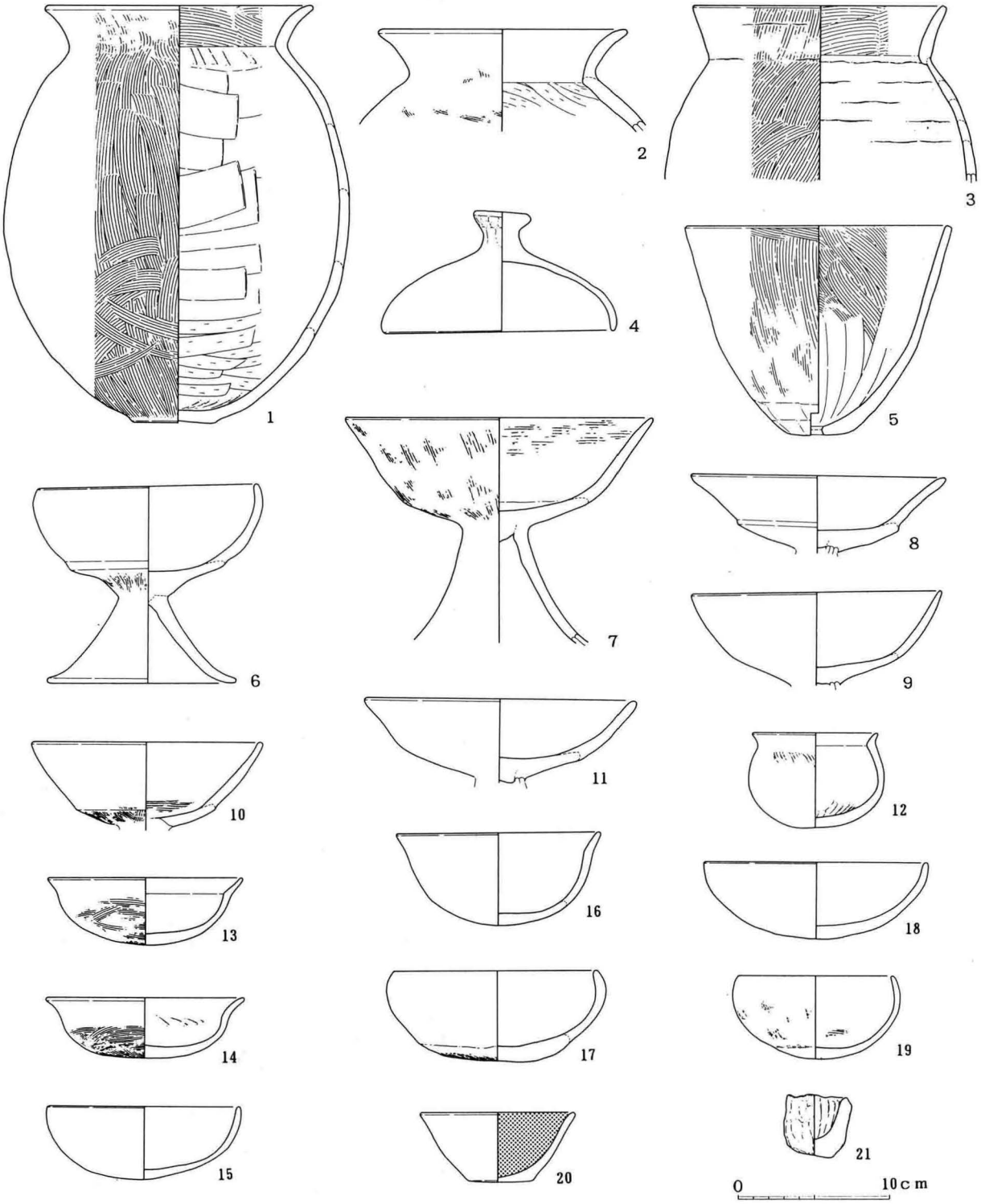
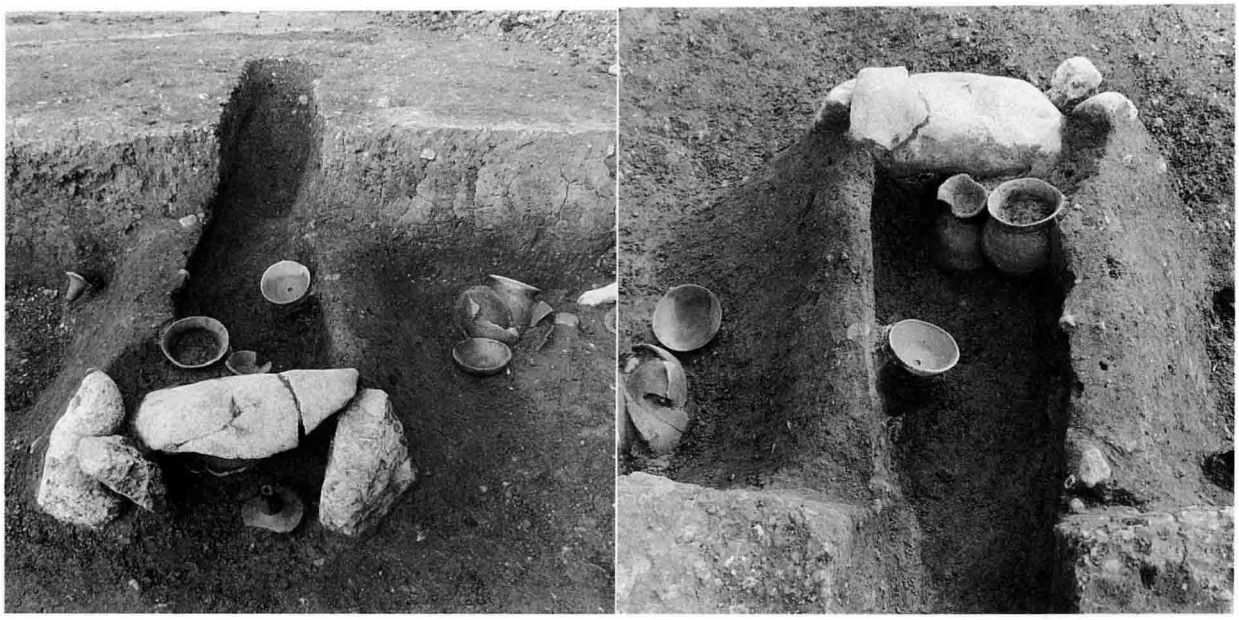


図115　37号住居址出土土器実測図　（1：4）



37号住居址カマド

39号住居址　（図116・117）

平面プランは3.90×3.80mの小型隅丸方形住居址である。確認面からの掘り込みは北壁側で平均30cm前後とやや深いが、南壁側は他遺構との切り合いもあり、壁の立ち上がりは確認していない。床面は全体に軟弱である。柱穴はP1～P5を検出している。P1・P2等は主柱穴の可能性が考えられるが、柱穴配列等詳細は不明である。P6は貯蔵穴の可能性が高く、深さ24cmを測る。炉、カマド等の施設は確認されていない。西壁～南壁にかけては幅20cm・深さ10cm前後の壁周溝が認められるが、全周はしない。甕・坏・高坏等が出土している。

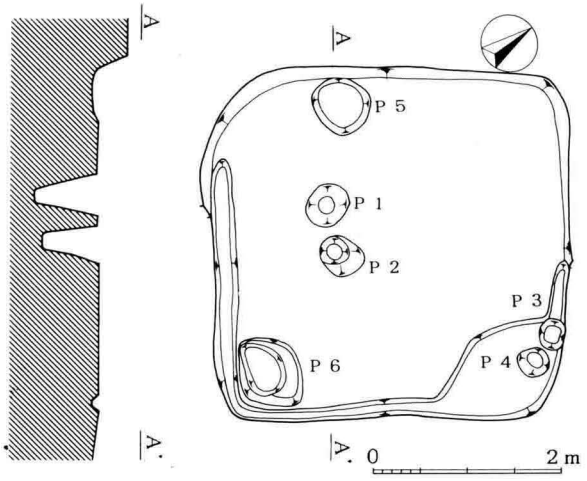


図116　39号住居址実測図　（1：80）

44号住居址　（図110・118）

古墳時代の31号住居址と切り合い関係がある。平面プランは一辺5.00mほどの隅丸方形住居址と予想される。確認面からの掘り込みは北壁側で平均25cmであるが、南壁側は浅く壁の立ち上がりは確認していない。床面は全体に軟弱で不明瞭である。柱穴はP1を確認したのみで、柱穴配列等詳細は不明である。炉・カマド等その他の施設も確認していない。

39号住居址

47号住居址　（図112）

古墳時代の36号住居址に切られる。平面プランは3.00×3.70mほどの小型の隅丸長方形住居址である。確

47号住居址

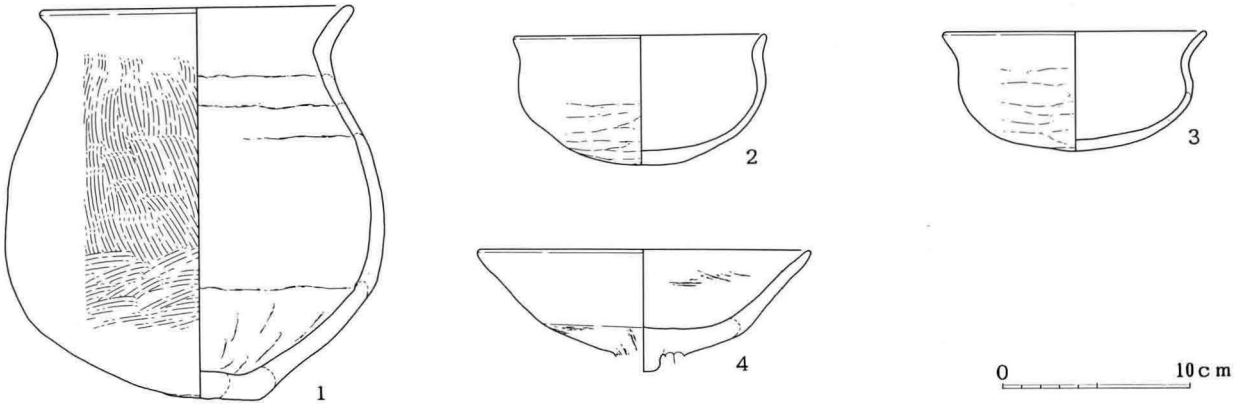


図117　39号住居址出土土器実測図　（1：4）

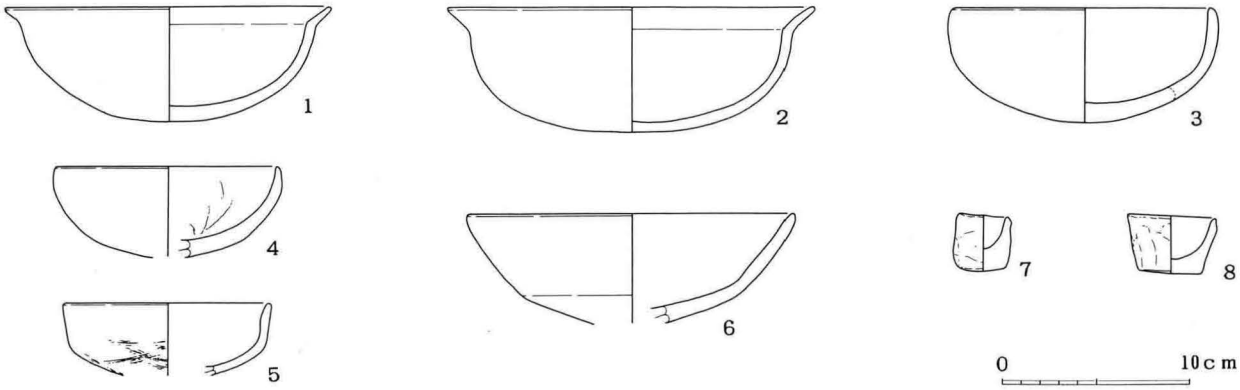


図118　44号住居址出土土器実測図　（1：4）

認面からの掘り込みは平均20cmほどで、床面は全体に軟弱である。柱穴はP1・P2を検出しており、4本長方形の配列が考えられる。幅20cm・深さ10cmほどの壁周溝が全周するようである。出土土器が少なく時期比定は困難であるが床面より鉄亜鈴型の土鈴が出土している。

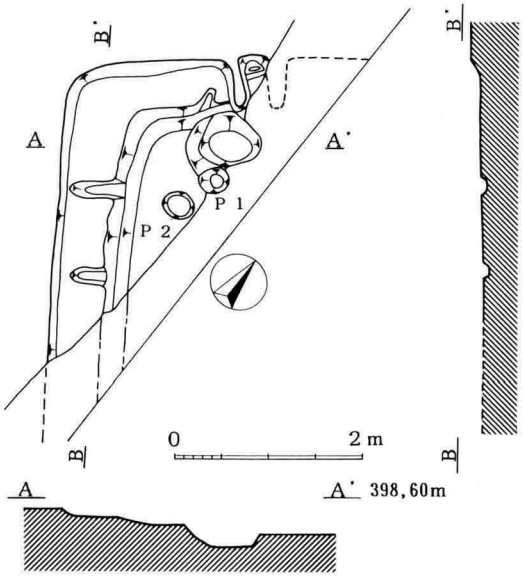


図119　50号住居址実測図　（1：80）

50号住居址

50号住居址　（図119・120）

南東側は大半が調査区外となり、1/4ほどを検出したのみである。確認面からの掘り込みは平均30cmほどで、床面は全体に軟弱である。平面プランは一辺4.20mほどのやや小型の隅丸方形住居址と予想される。柱穴はP1・P2を検出している。主柱穴はP1と考えられるが、柱穴配列等詳細は不明である。カマドは1/2ほど確認できた。奥壁中央に位置するものと考えられ、規模は両袖間外側で0.60m、内側で0.20m、長さ0.60mほどと予想される。壁際は全体に幅50cm・高さ10cmほどのベッド状の高まりが認められる。また西壁には2本の間仕切り溝も確認されている。

カマドの西側ならびに住居址北西隅の床面上より比較的多量の土器が出土している。

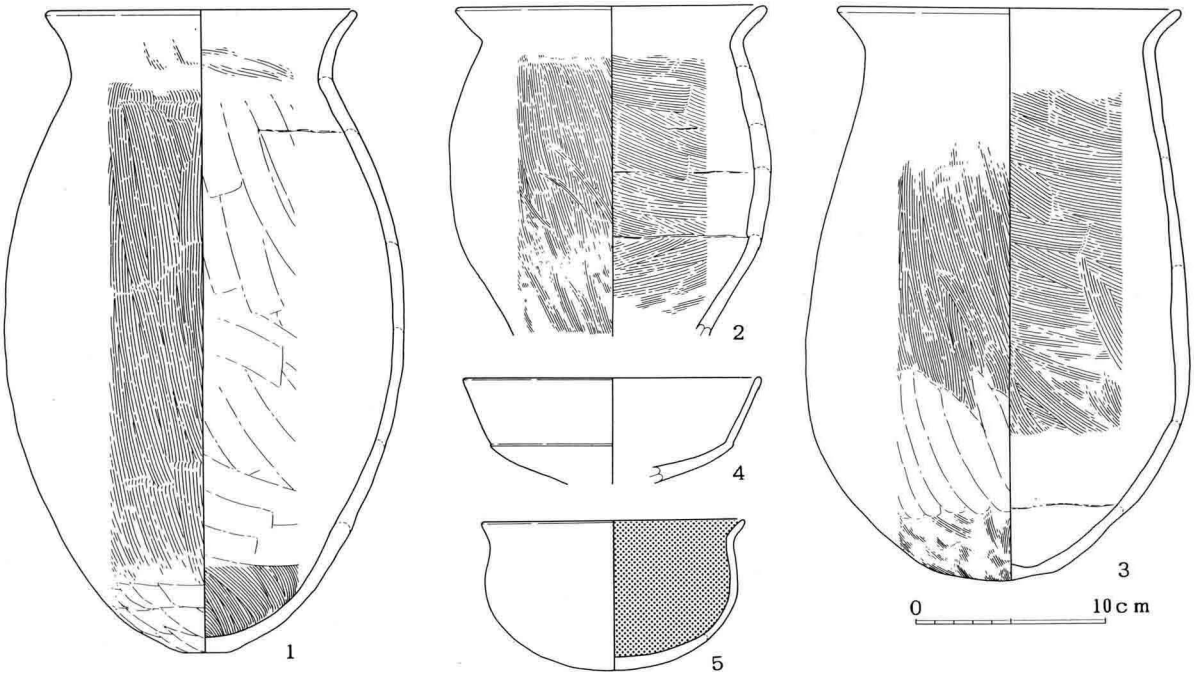


図120　50号住居址出土土器実測図　（1：4）

50号住居址カマド

50号住居址土器出土状況

50号住居址土器出土状況

51号住居址カマド

51号住居址

51号住居址　（図121・122）

弥生後期の40号・48号・52号住居址ならびに古墳時代の36号住居址の上層を切って構築される。ただし検出時の不明瞭さから36号住居址の調査を先行してしまい、住居址南東隅は一部破壊してしまった。確認面からの堀り込みは平均20㎝前後で、床面は全体に軟弱で不明瞭である。平面プランは7.90×8.30mの大型の隅丸方形住居址である。柱穴はP1～P7まで検出している。主柱穴はP1～P4で、3.50×4.00mの4本長方形配列と考えられる。カマドの横にあるP8は貯蔵穴と考えられ、長径0.90m・深さ0.90mを測る。P9は二段にわたる掘り込みを有する入り口部ピットで、上面は1.70×1.80m・深さ24㎝を測る。カマドは奥壁中央やや西寄りのところに位置する。規模は両袖間外側で0.70m、内側で0.30m、長さ0.90mである。燃焼部には高坏を支脚に転用している。間仕切り溝はP4から壁へ向けて2本、P2から壁へ向けて直交する形で3本検出されている。また西壁には周溝が認められる。幅20㎝・深さ10㎝前後である。

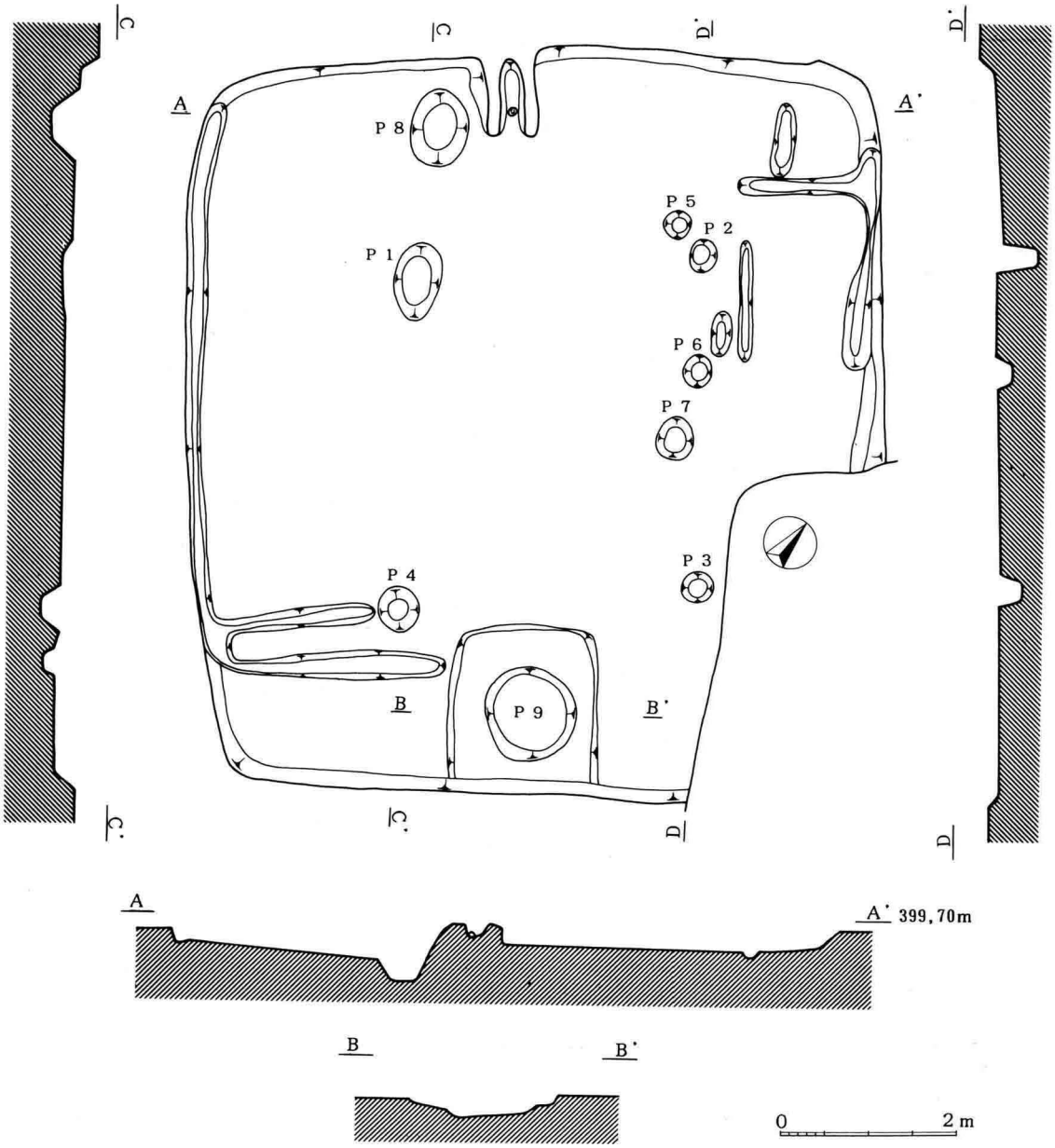


図121　51号住居址実測図　（1：80）

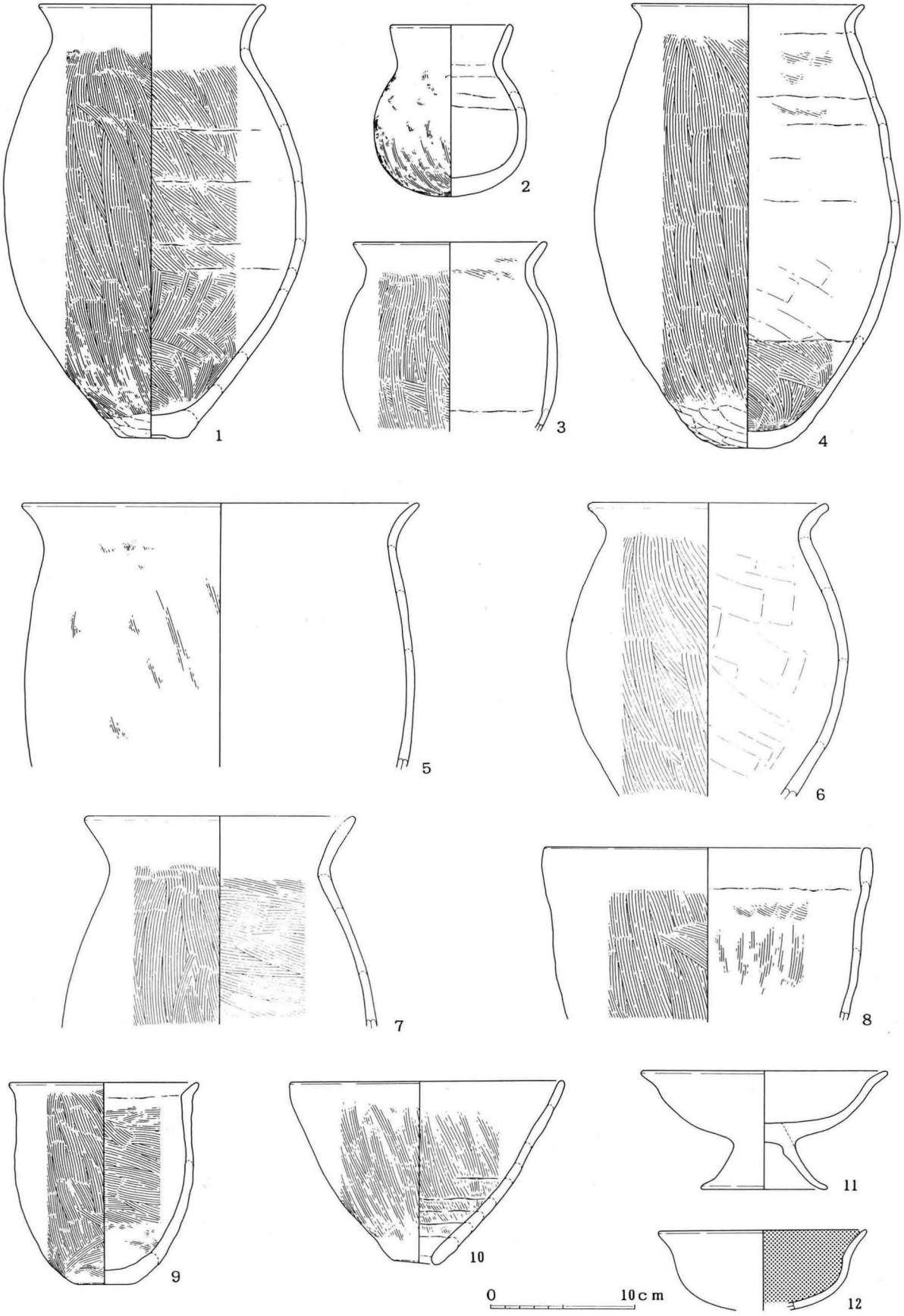


図122　51号住居址出土土器実測図　（1：4）

54号住居址　（図123～126）

住居址南東隅は1/4程が調査区外となるが、他遺構との切り合い関係はない。確認面からの掘り込みは平均50cm前後と深い。床面は住居址中央付近を中心に部分的に固く締まったところが認められたが、全体に軟弱で不明瞭である。平面プランは7.80×8.50mの大型の隅丸方形住居址である。柱穴はP1～P19まで検出している。主柱穴はP1～P3で、一辺4.50mほどの4本方形配列と考えられる。P20は貯蔵穴と考えられ、1.40×1.50m・深さ70cmを測る。炉は奥壁側柱穴間中央やや内寄りのところに位置し、径70cm・深さ5cmほどの地床炉である。間仕切り溝はP1・P3から壁に向けて各1本、P2から壁に向けて2本、北壁中央に2本、西壁中央に2本の計8本が検出されている。また北壁中央から西壁にかけてと東壁には、それぞれ壁周溝がめぐらされる。幅15cm・深さ5cm前後で全周はしない。住居址南東隅ならびに北東隅の床面上より、高坏を中心に多量の土器が出土している。

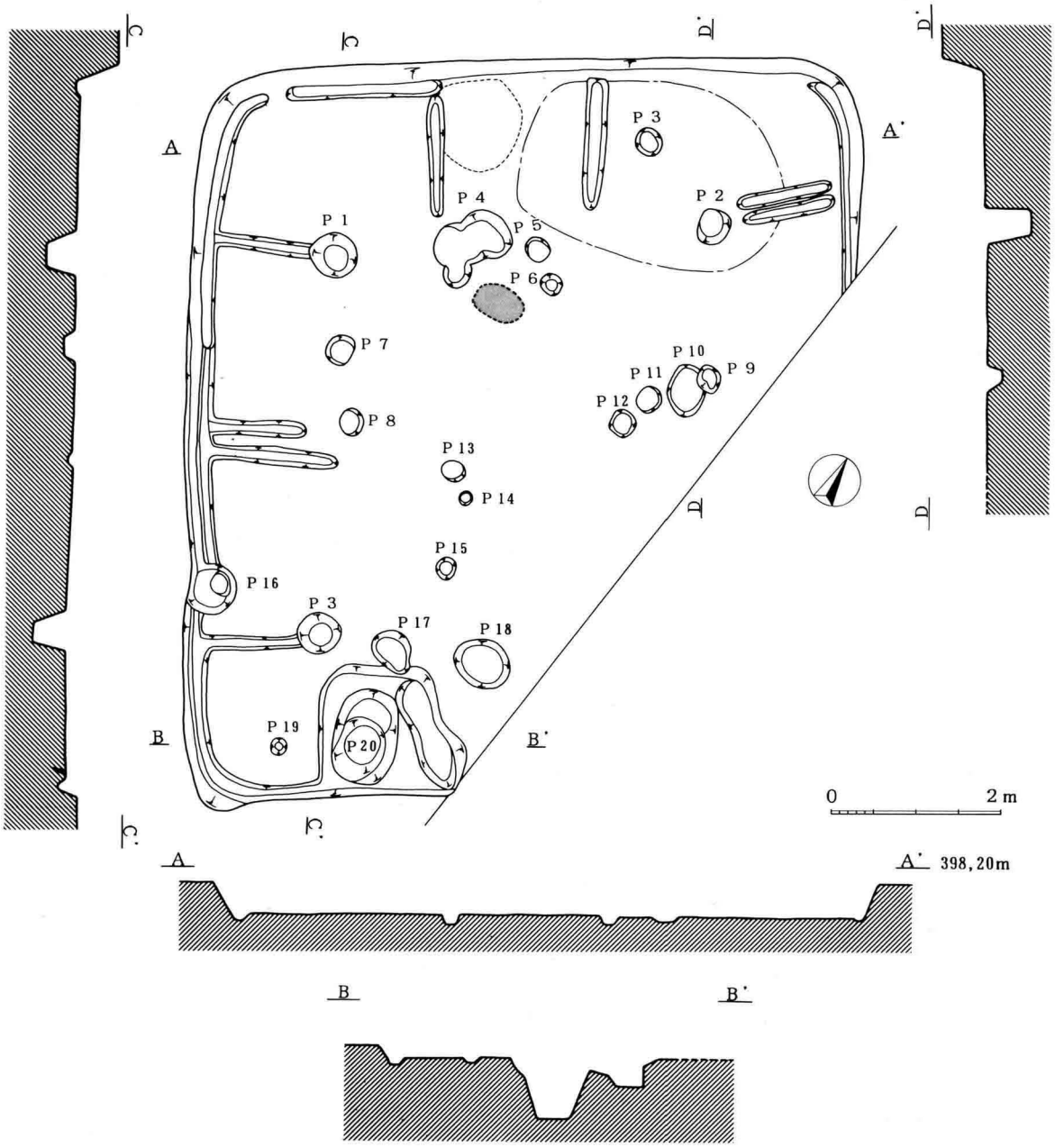


図123　54号住居址実測図　（1：80）

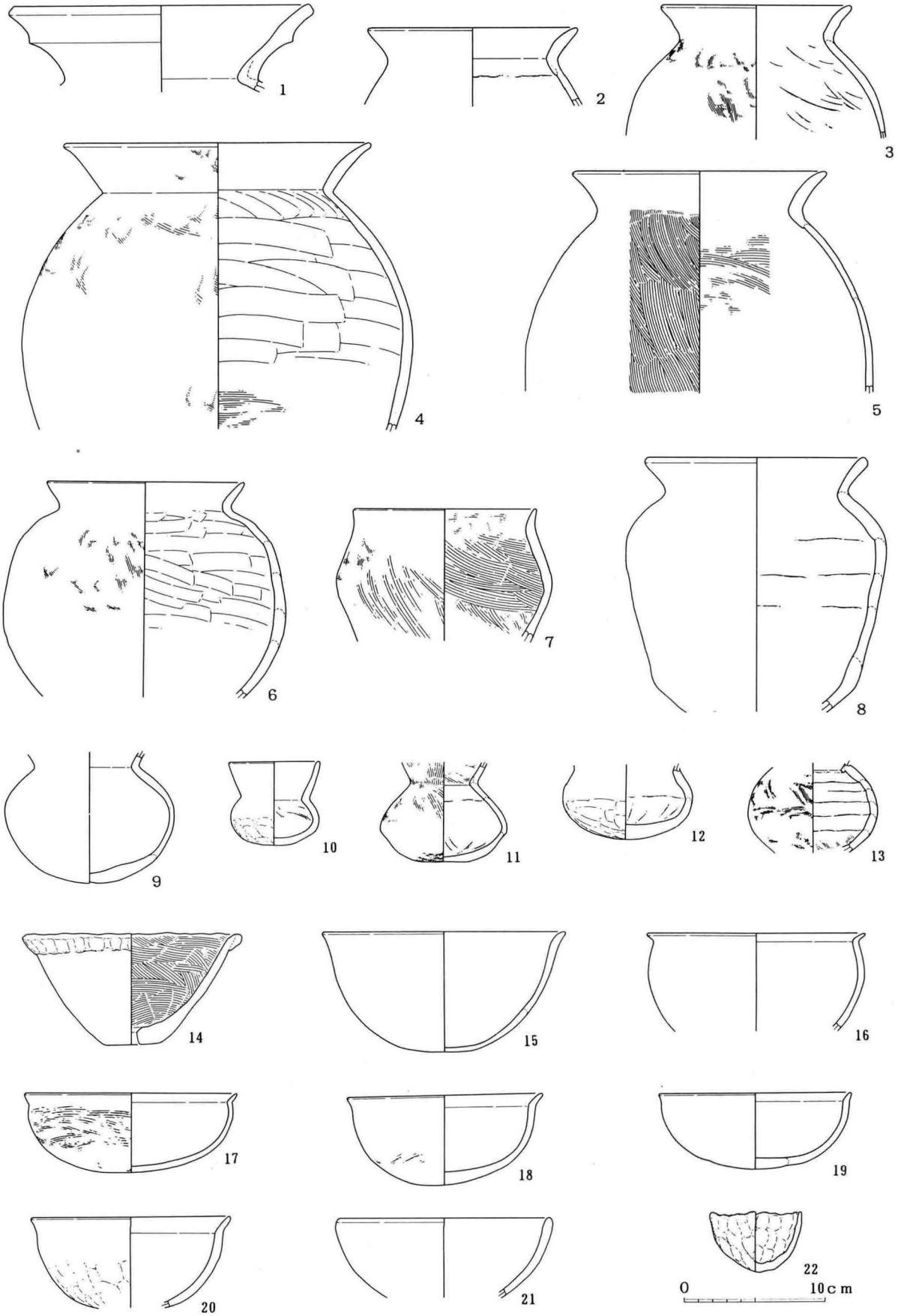


図124　54号住居址出土土器実測図①　（1：4）

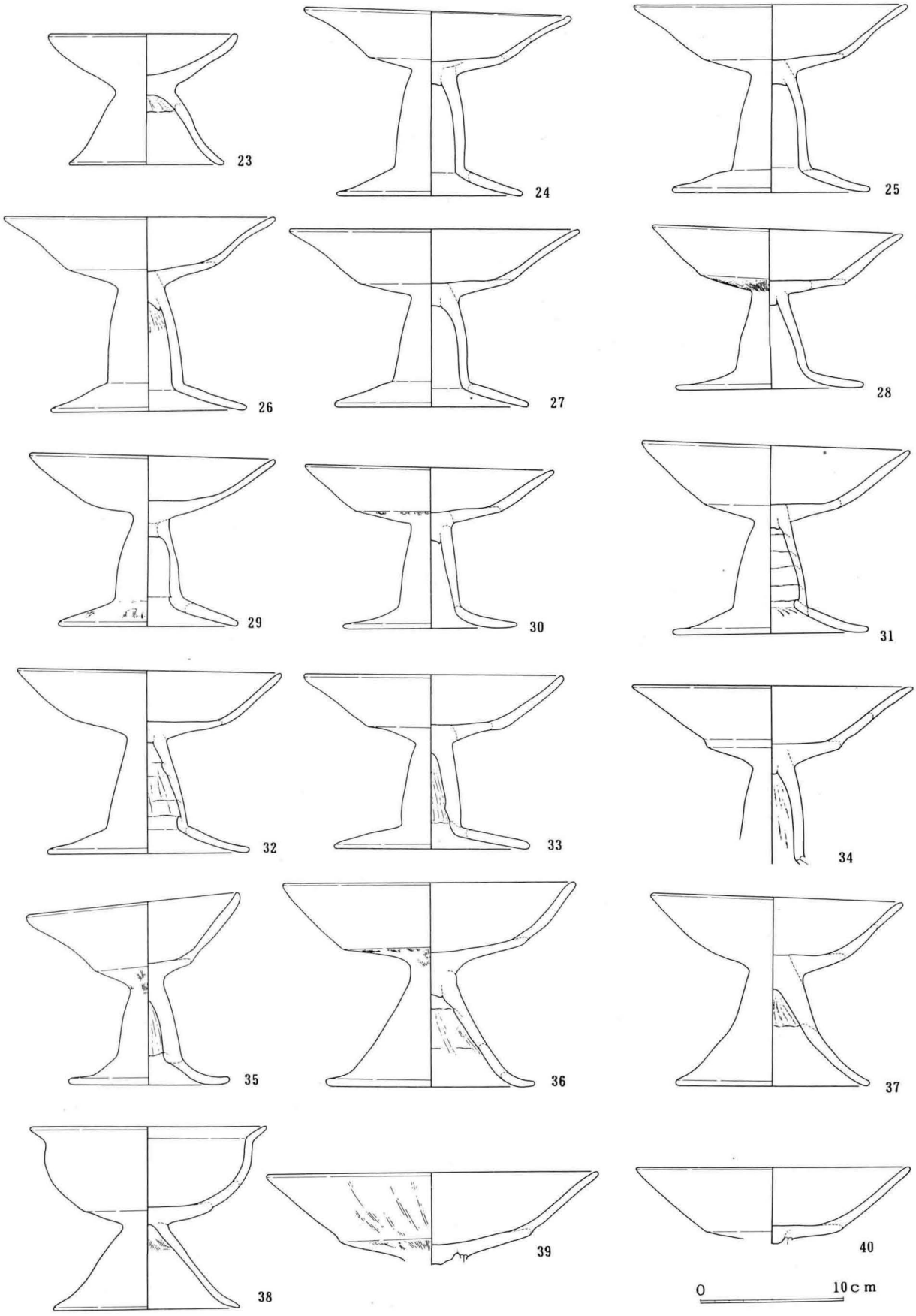


図125　54号住居址出土土器実測図②　（1：4）

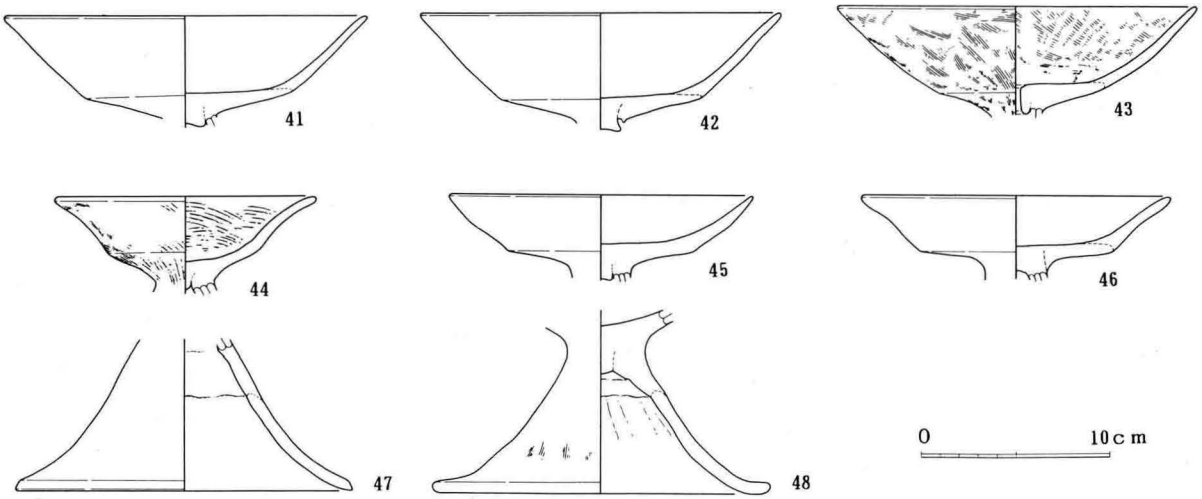
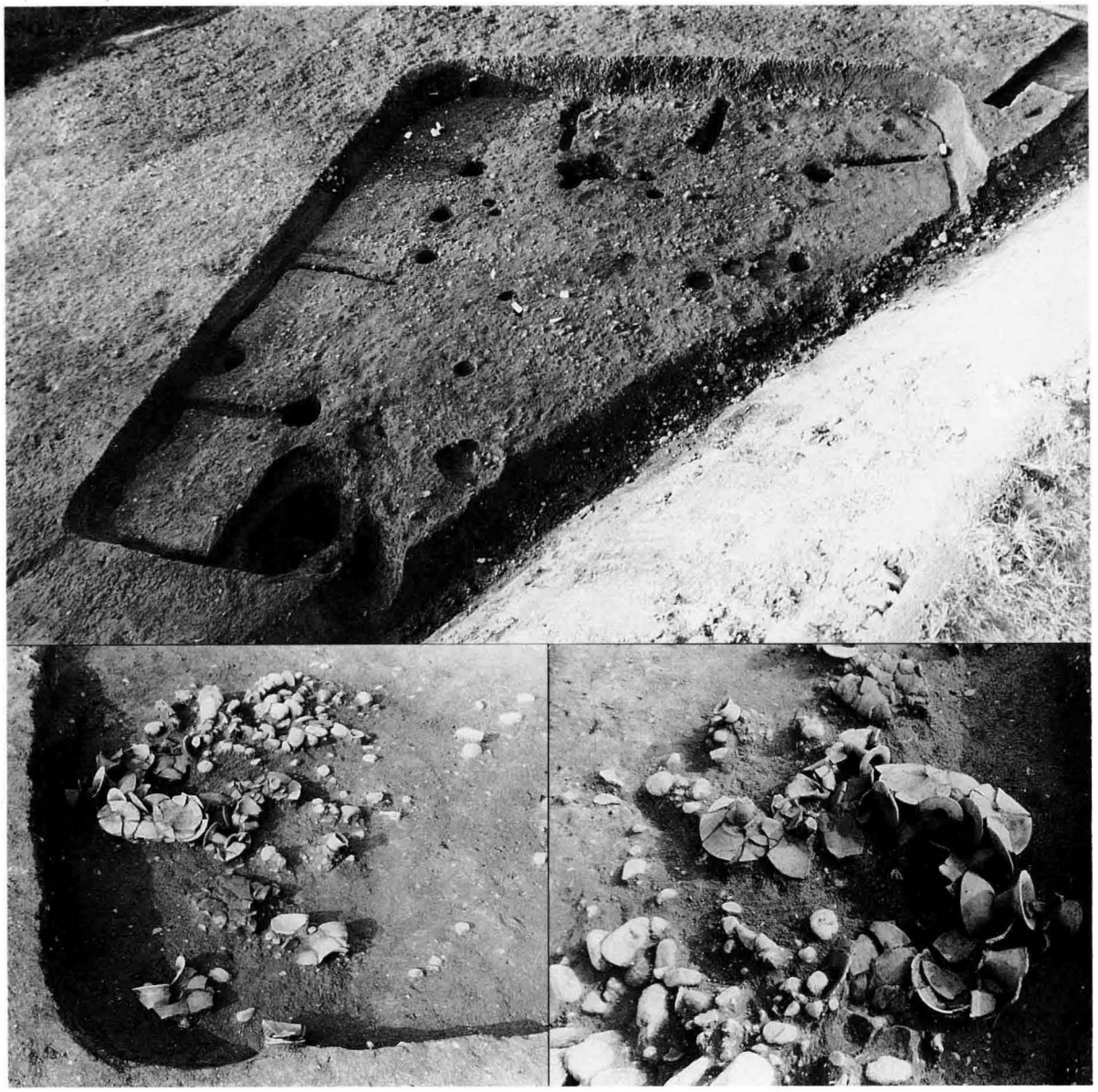


図126　54号住居址出土土器実測図③　（1：4）



54号住居址・土器出土状況

55号住居址　（図127～132）

住居址北側の1/3ほどを検出したに過ぎず大半が調査区外となる。住居址北東隅の上層を平安時代の56号住居址に切られる。確認面からの掘り込みは平均30cmほどと深い。床面は全体に軟弱で不明瞭なものである。平面プランは一辺10.20mほどの大型の隅丸方形住居址と予想される。主柱穴はP1・P2と考えられ一辺5.80mほどの4本方形配列と考えられる。奥壁側柱穴間中央やや内よりのところに地床炉を確認している。間仕切り溝はP1から壁に向けて1本、P2から壁に向けて直交する形で2本、奥壁中央やや東寄りのところに2本の計5本を検出している。壁際には幅25cm・深さ10cm前後の壁周溝が存在し、全周するものと考えられる。

奥壁際を中心に床面より若干浮いた状況できわめて多量の土器群が出土している。住居址廃絶後の比較的短期間の内に一括して投棄されたものと考えられる。

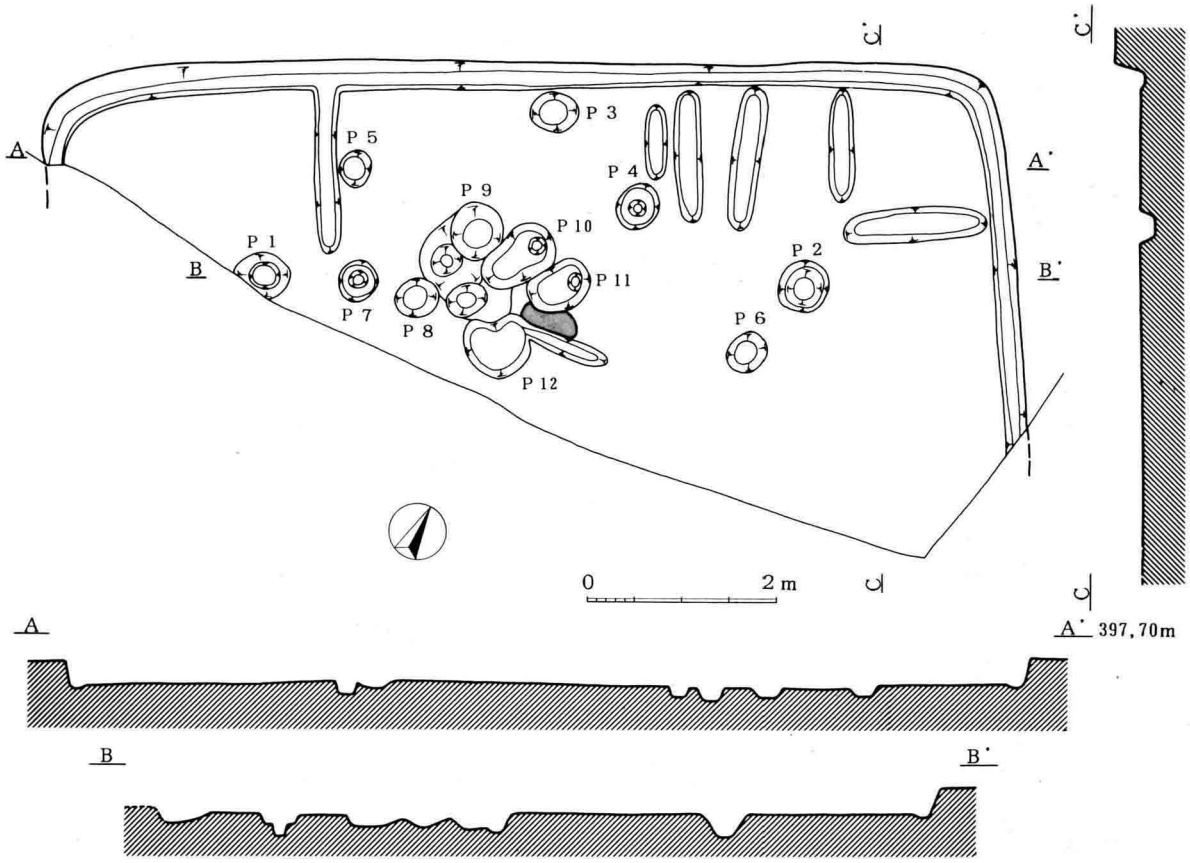


図127　55号住居址実測図　（1：80）

55号住居址

図128　55号住居址土器出土状況実測図　（1：40）

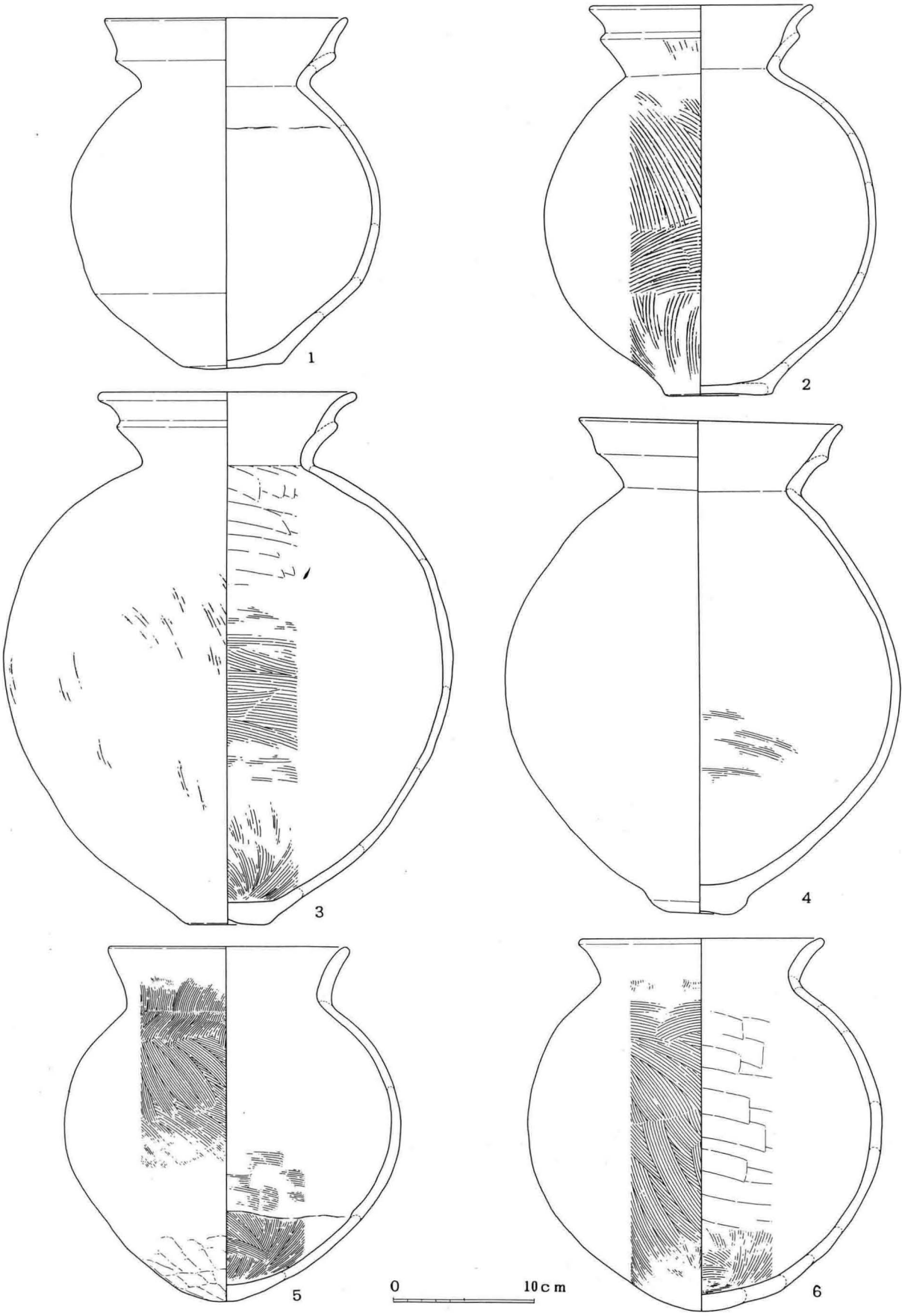


図129　55号住居址出土土器実測図①　（1：4）

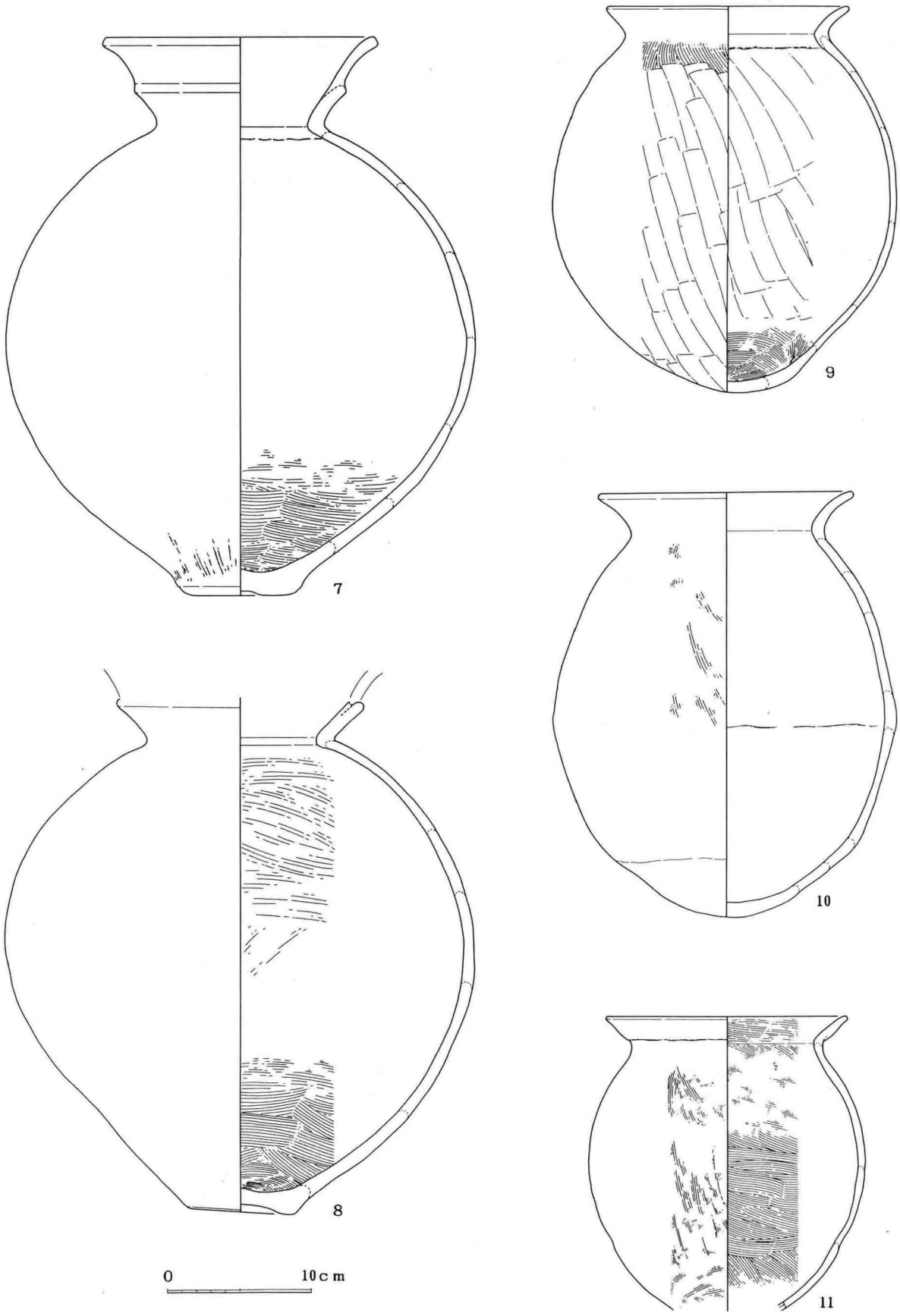


図130　55号住居址出土土器実測図②　（1：4）

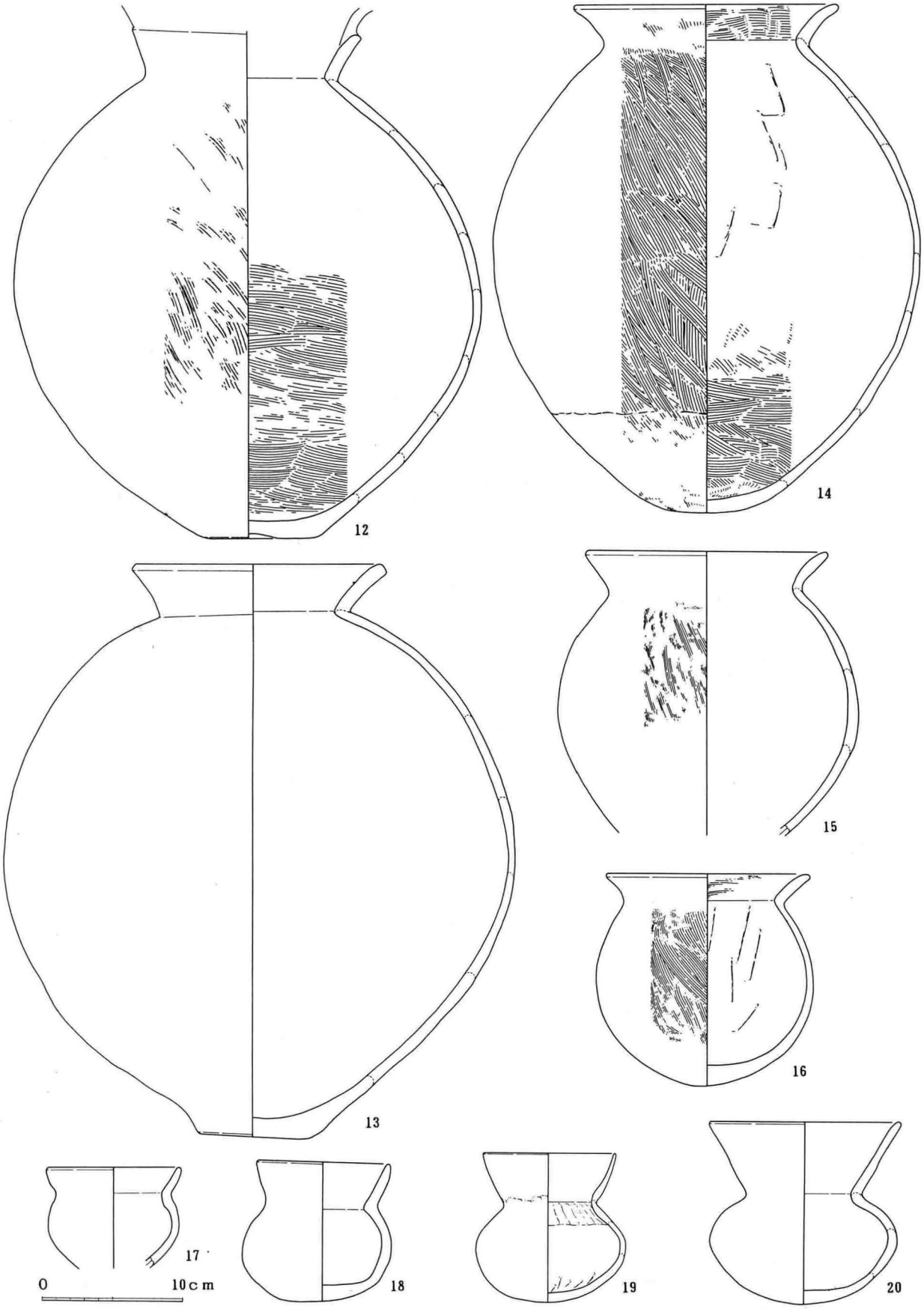


図131　55号住居址出土土器実測図③　（1：4）

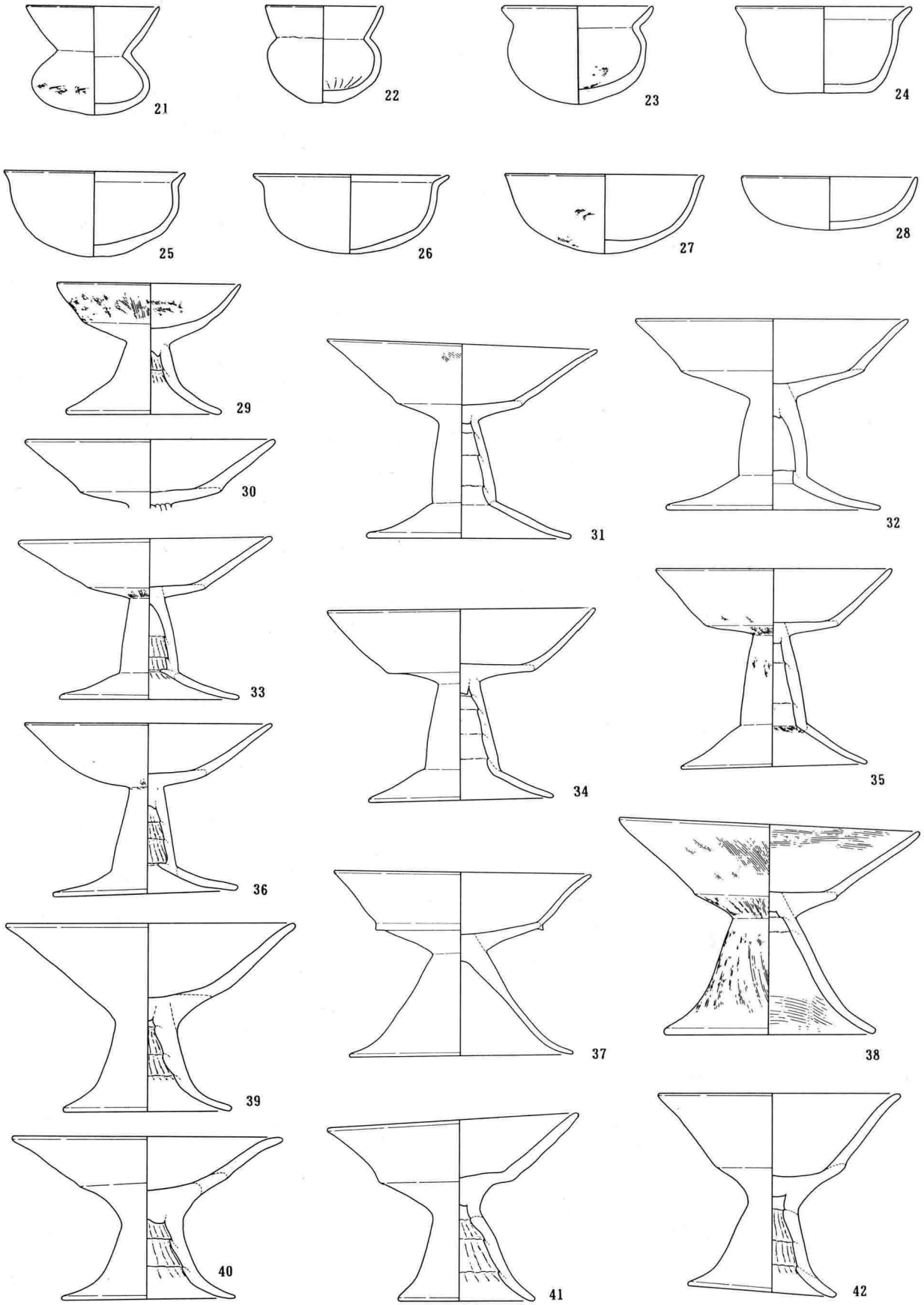
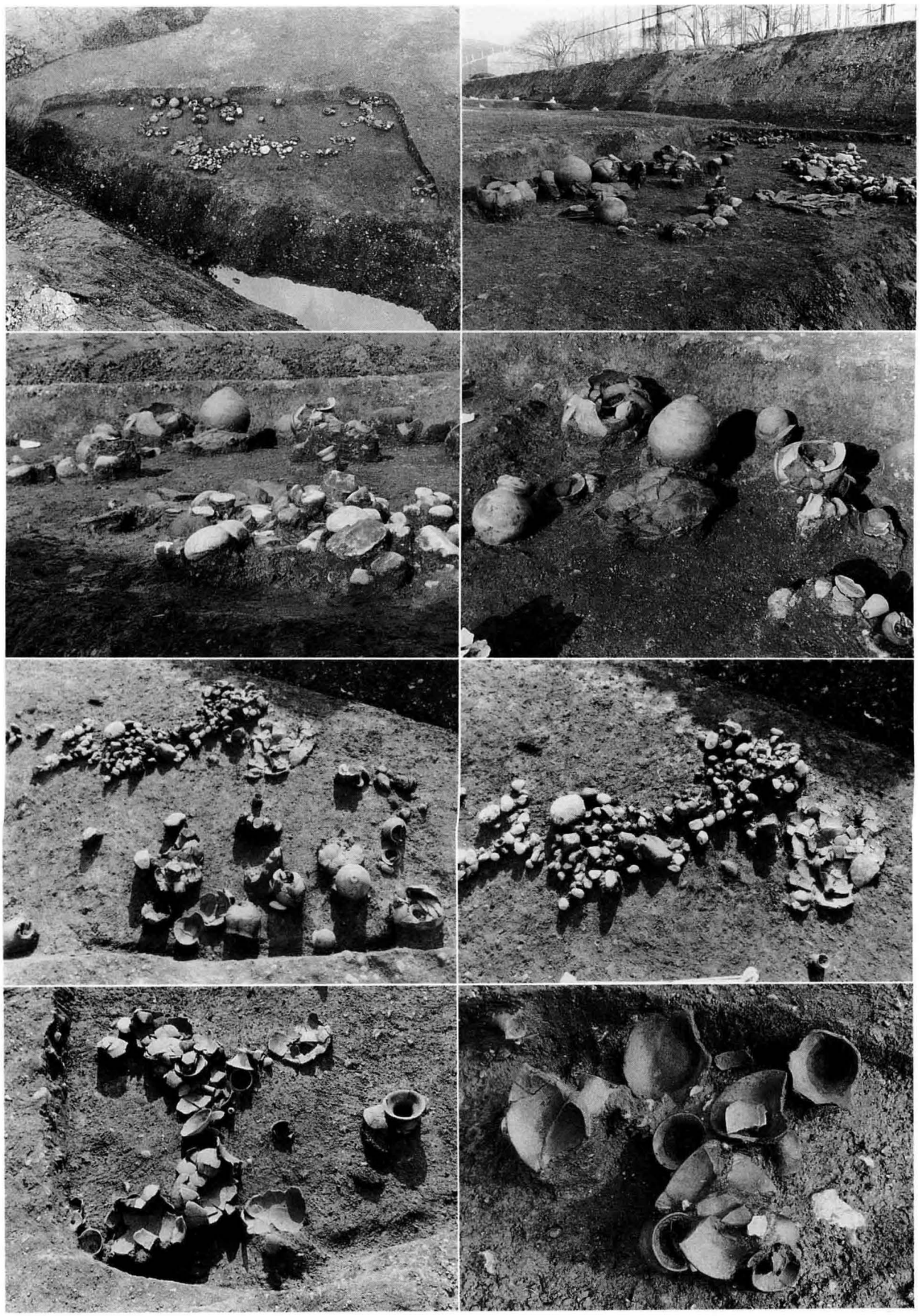


図132　55号住居址出土土器実測図④　（1：4）



55号住居址　土器出土状況

57号住居址　（図133～135）

弥生後期の97号住居址、古墳時代の62号住居址を切って構築される。確認面からの掘り込みは奥壁側で30cm前後、南壁側で15cm前後である。床面は全体に軟弱で不明瞭である。平面プランは5.10×4.70mの隅丸方形住居址である。柱穴はP1～P6まで検出している。主柱穴はP1～P4で2.40×2.30mのやや不整な4本方形配列である。P7は2段にわたる掘り込みを有する入り口部ピットで、深さ60cmを測る。カマドは奥壁中央やや西寄りのところに位置し、焚き口部に石組を有する石組カマドである。石組はほぼ原形を保った状態で検出されている。規模は両袖間外側で0.60m、内側で0.30m、長さ0.80mである。また長さ0.90mほどの煙道も検出されている。カマド東側の奥壁際に、高坏・坏類を中心に多量の土器群がほぼ原位置を保った状況で出土している。

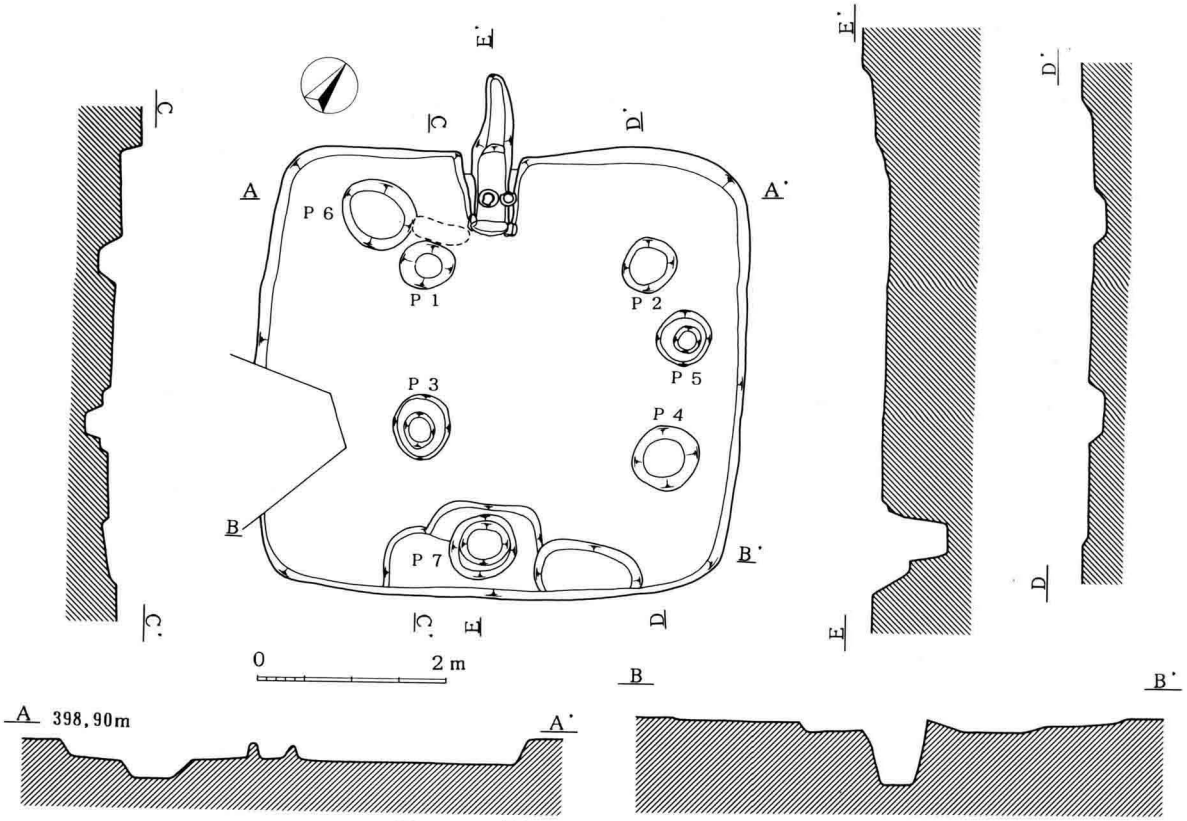


図133　57号住居址実測図　（1：80）

57号住居址カマド

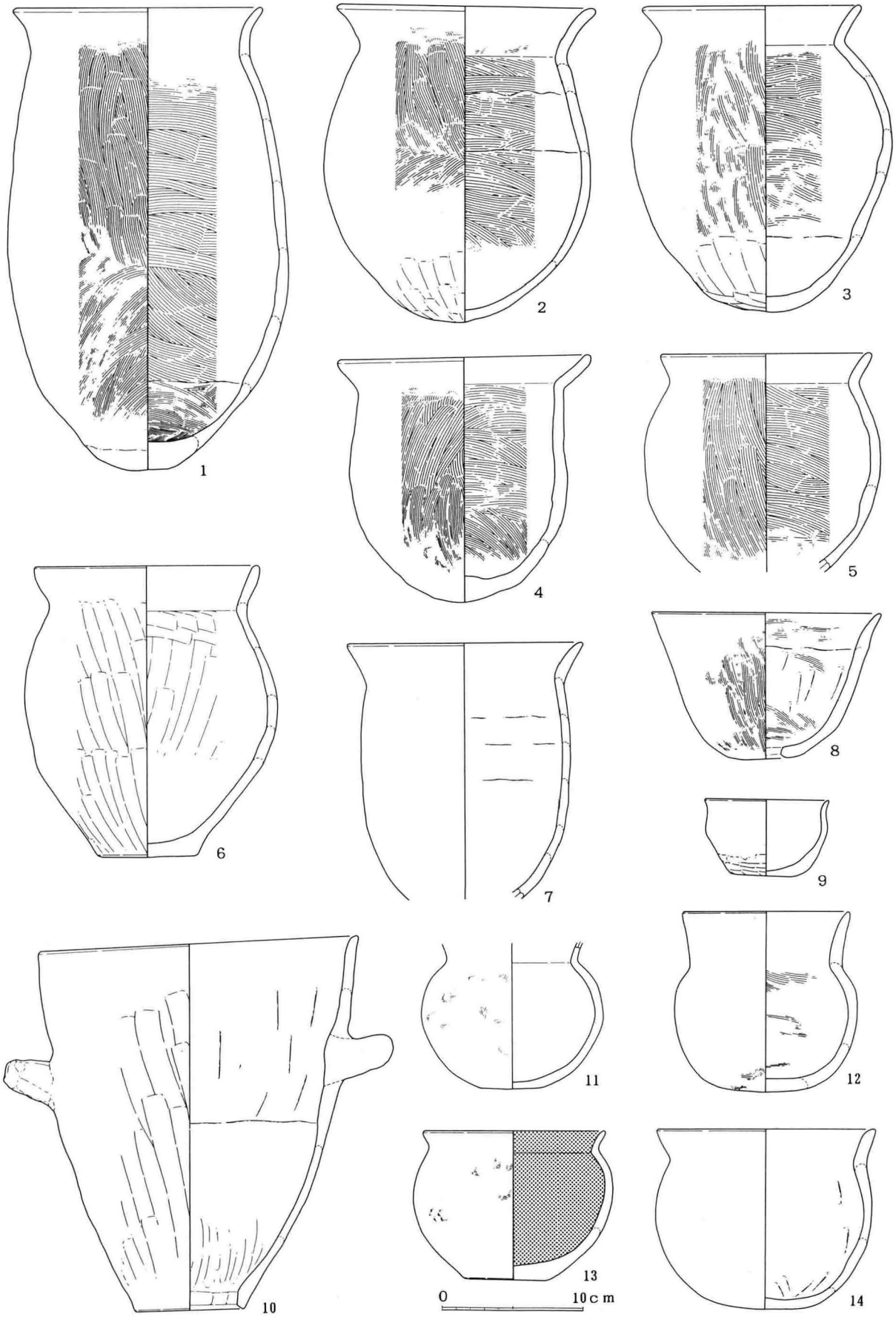


図134　57号住居址出土土器実測図①　（1：4）

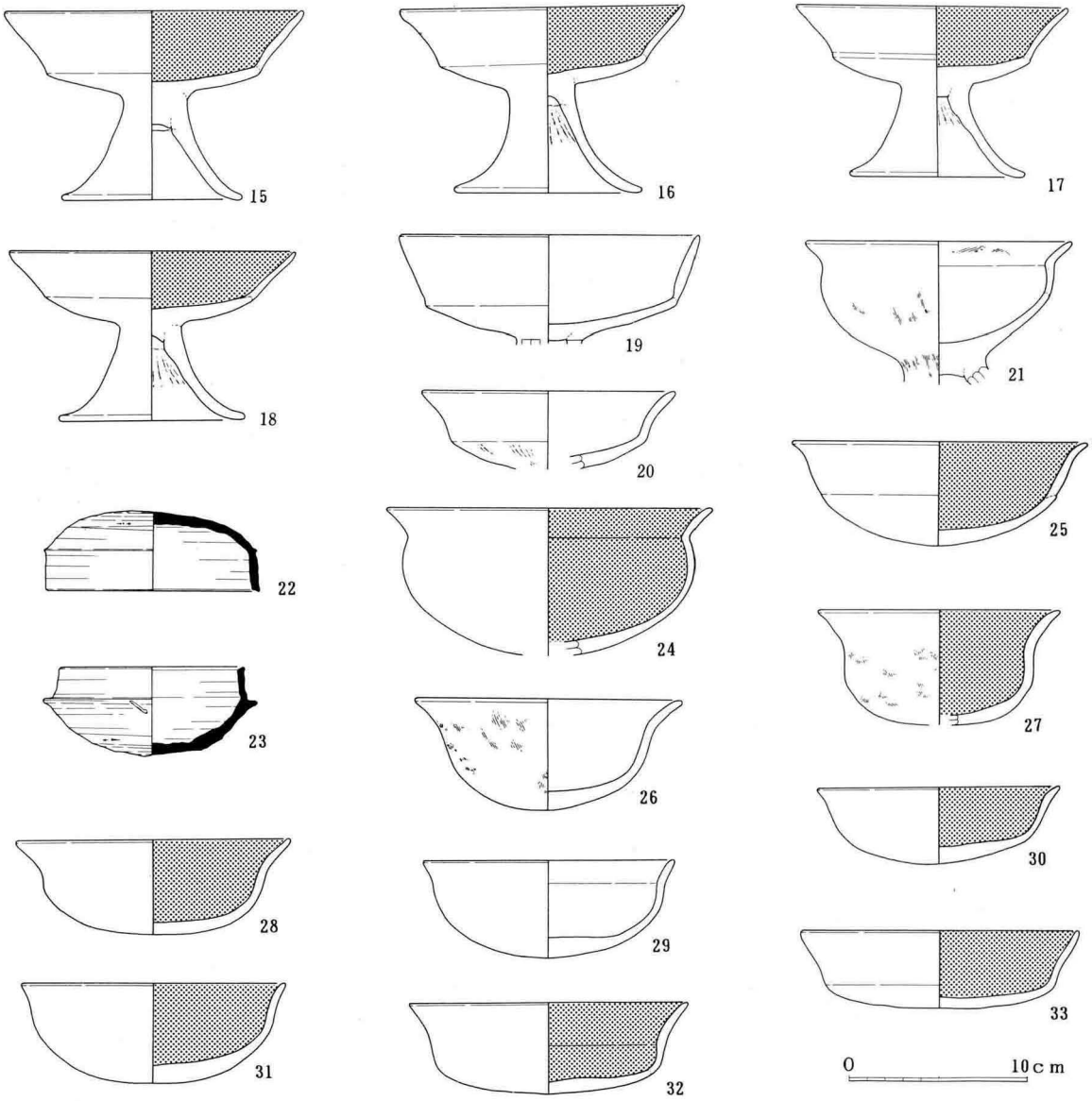
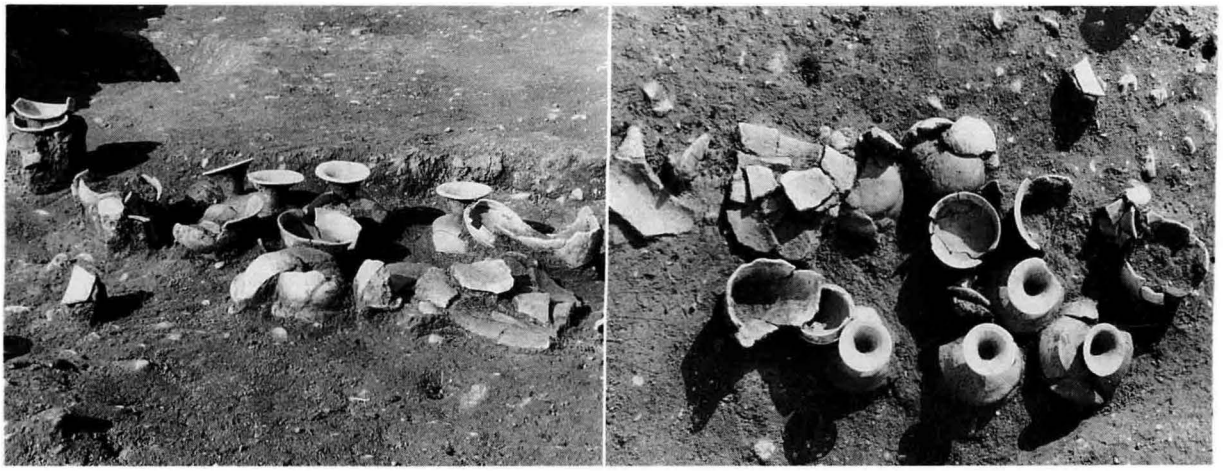


図135　57号住居址出土土器実測図②　（1：4）

57号住居址　土器出土状況

57号住居址

57号住居址カマド・土器出土状況



57号住居址　土器出土状況

59号住居址　（図136・137）

弥生後期の61号住居址を切って構築されるが大半が調査区外となり詳細は不明である。確認面からの掘り込みは平均30cm前後と深いが、床面は全体に軟弱で不明瞭である。平面プランは一辺8.70mほどの大型の隅丸方形住居址と予想される。P1は主柱穴と考えられるが柱穴配列等詳細は不明である。P2は二段にわたる掘り込みを有する入り口部ピットで、上面で1.00×1.10m・深さ54cmを測る。その他の施設は不明である。

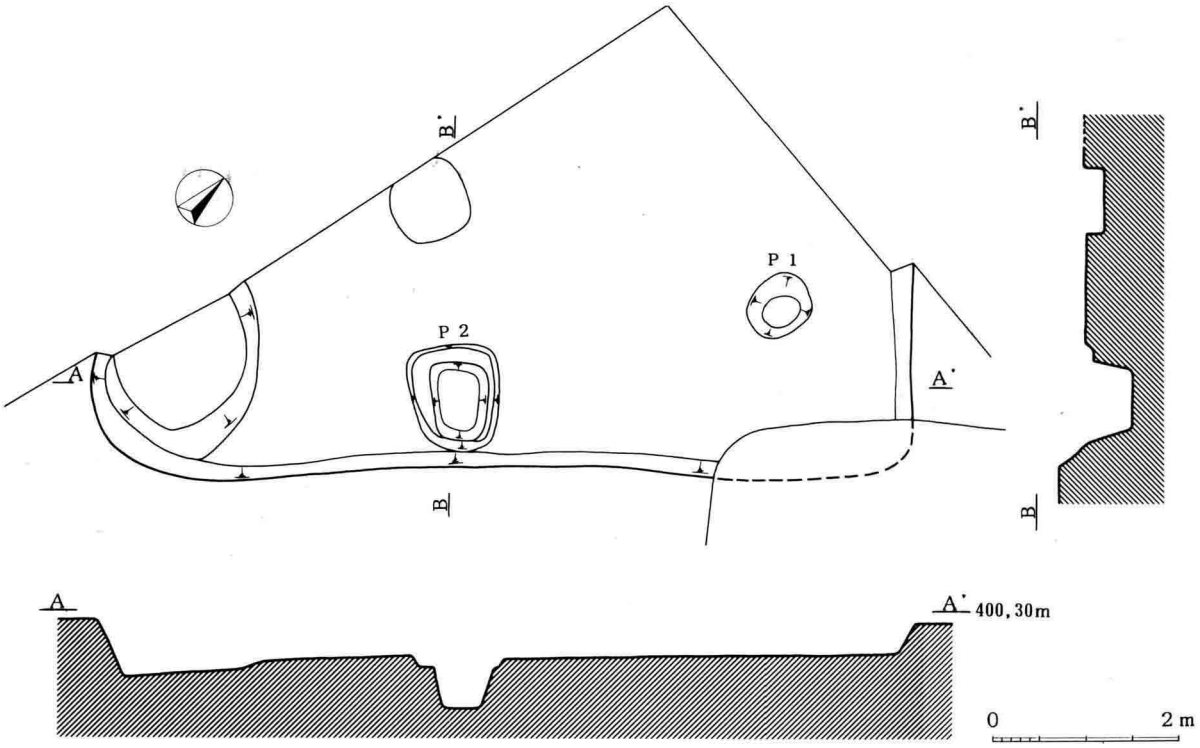


図136　59号住居址実測図　（1：80）

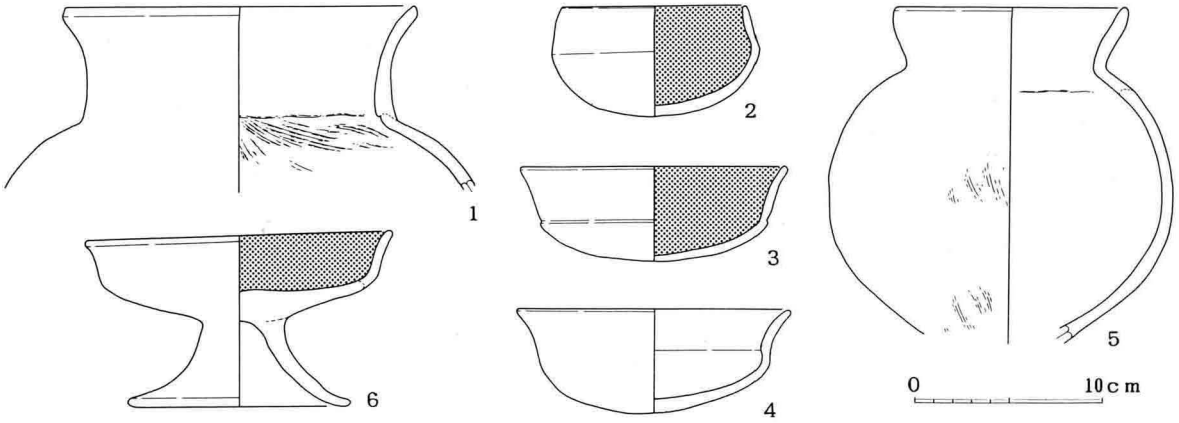


図137　59号住居址出土土器実測図　（1：4）

66号住居址　（図138・139）

弥生後期の67号住居址を切って構築される。確認面からの掘り込みは平均60cm前後と深いが、床面は全体に軟弱で不明瞭である。平面プランは6.50×6.90mの隅丸方形住居址である。柱穴はP1～P5までを検出している。主柱穴はP1～P4で3.30×3.50mの4本方形配列である。P5も間仕切り溝との関連よりすれば支柱となる可能性が高い。P6は二段にわたる掘り込みを有する入り口部ピットで、径80cm、深さ60cmを測る。両脇に二本の間仕切り溝を伴う。カマドは奥壁中央に位置し2個検出されている。西側のものを破壊して東側のカマドにつくりか

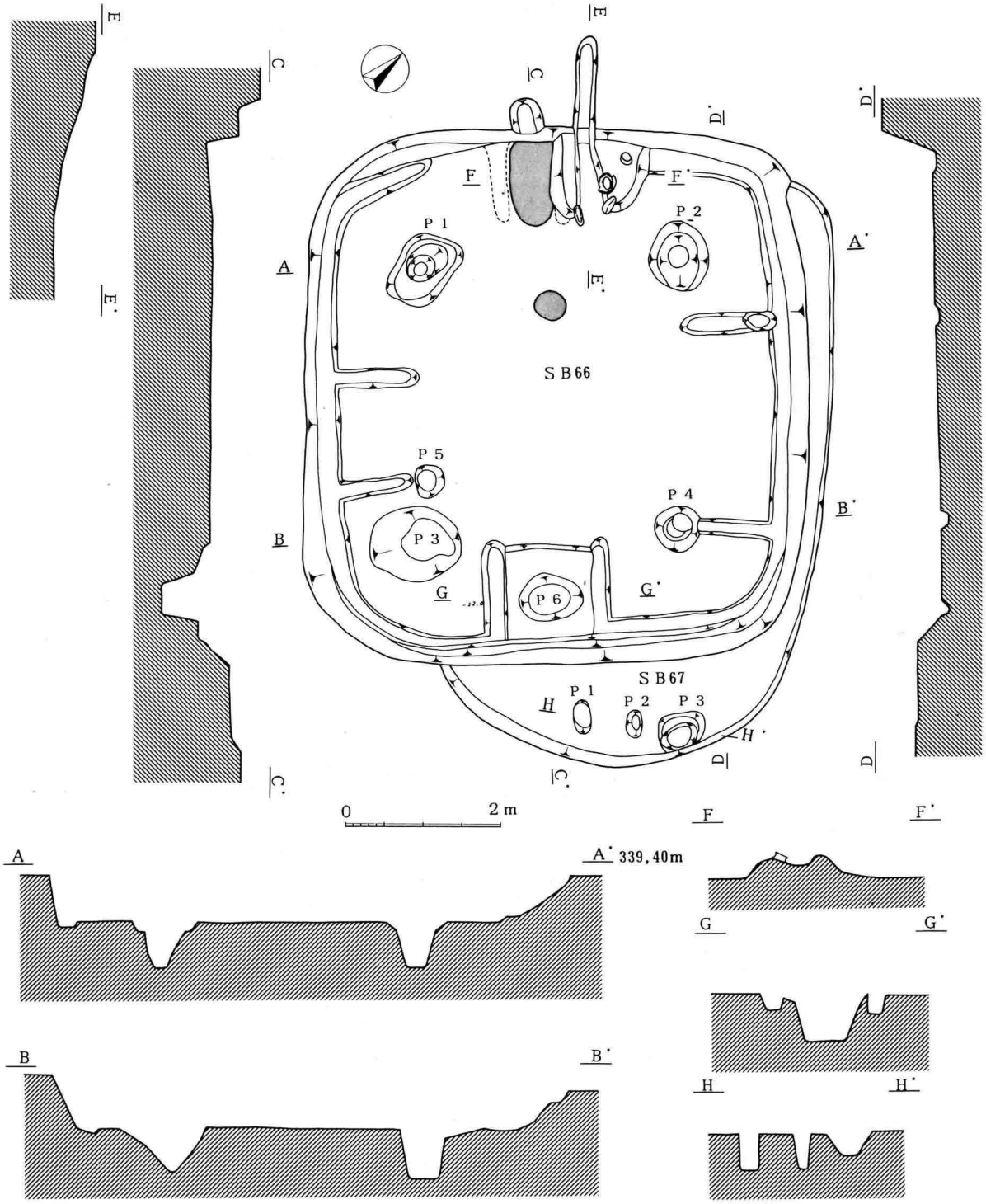


図138　66号・67号住居址実測図　（1：80）

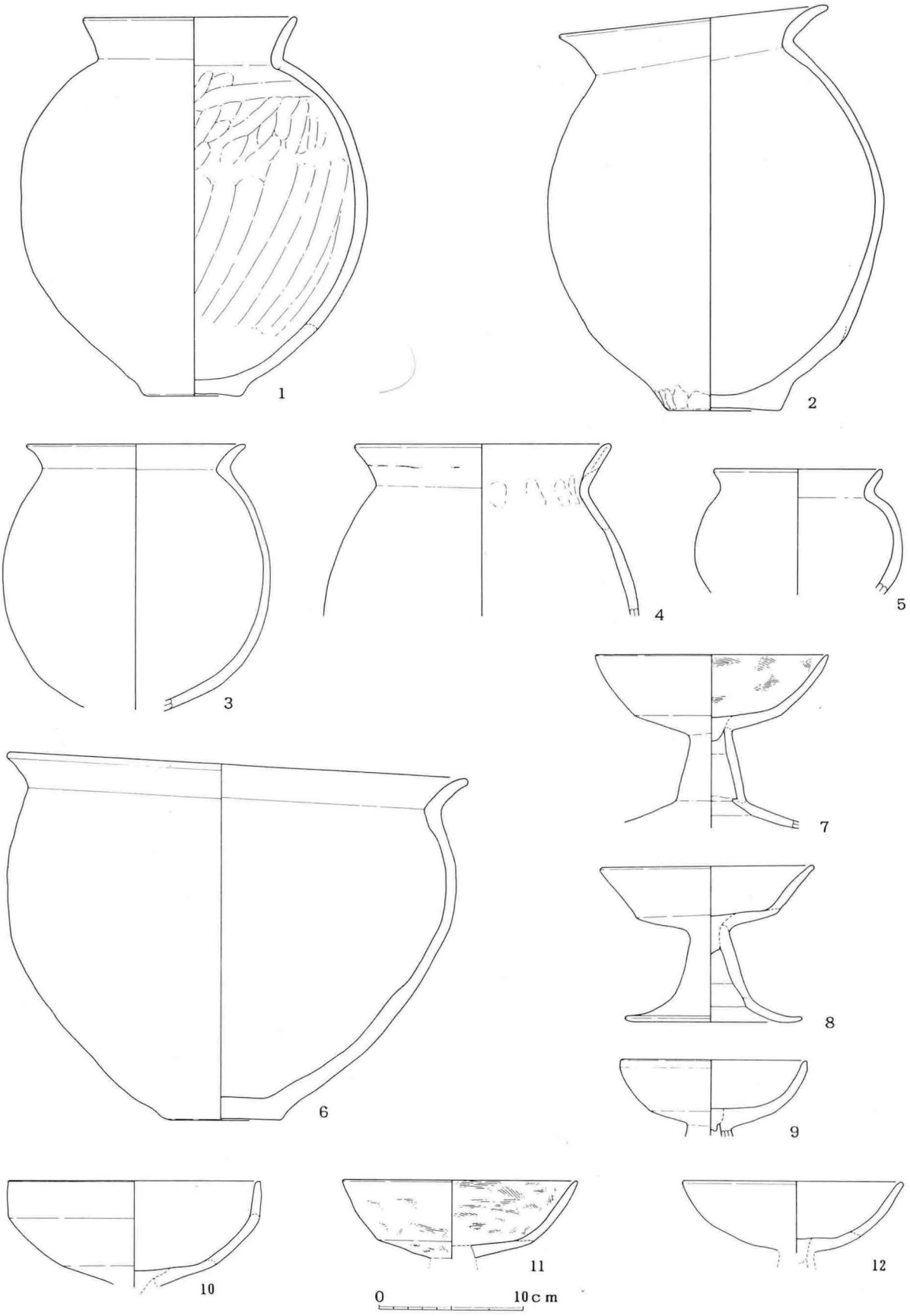


図139　66号住居址出土土器実測図　（1：4）

えている。東カマドの規模は両袖間外側で1.10m、内側で0.30m、長さ1.10mである。また長さ1.20mほどの煙道も検出されている。両袖先端にそれぞれ河原石が検出されており、カマド構築材の一部である可能性が高い。燃焼部はフラットであるが、床面より高いレベルである。P1・P2間中央やや内寄りのところに径30cmほどの焼土の堆積が検出されている。間仕切り溝はP1・P2の内側に壁に向けて各1本、P4・P5から壁に向けて各1本、P6の両脇に2本の計6本が検出されている。また、奥壁側のカマド周辺を除き壁周溝が全周している。幅20cm、深さ10cm前後である。カマド周辺を中心に床面より若干浮いた状況で、比較的多量の土器が出土している。

66号住居址

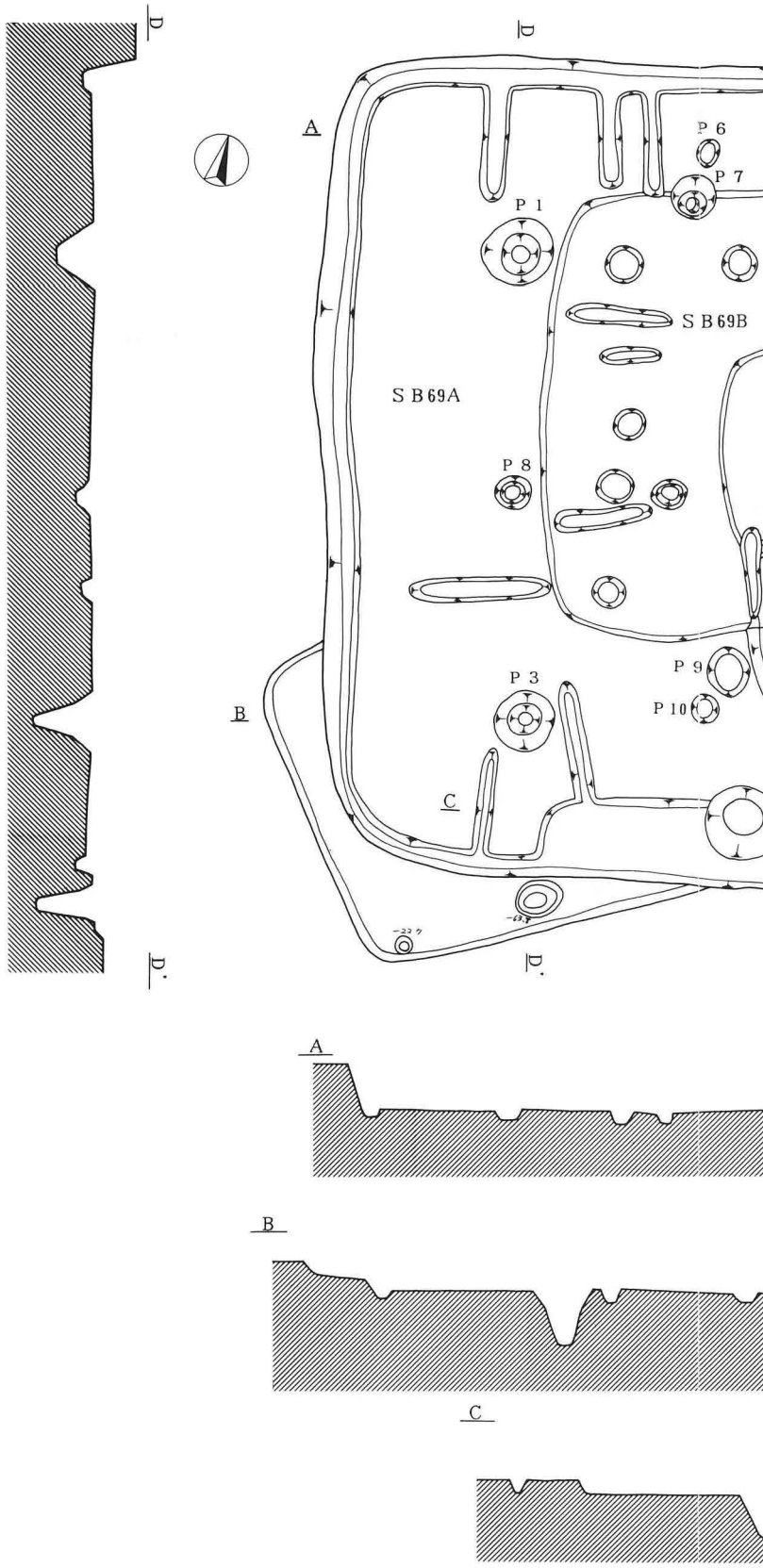


図140　69号住居址

69号住居址　(図140～143)

当初単独の大型住居址と予想し調査を進めたが、調査の進行に伴い内部に他の2軒の住居址を検出するに至った。以下この3軒の住居址について69A・B・C号住居址として記述する。

69A号住居址　(図140)

平面プランは、9.70×9.20mの大型の隅丸方形住居址である。確認面からの掘り込みは平均50cm前後と深いが、床面は全体に軟弱で不明瞭である。本住居址に直接伴う柱穴としてはP1～P11がある。主柱穴はP1～P4で、5.40×5.20mの4本方形配列である。P8・P11などは掘り込み規模の点より、柱穴間中央に位置する支柱穴と考えられる。P12は入り口部ピットと考えられ、径80cm・深さ45cmを測る。カマドは奥壁中央やや東寄りのところに2個検出されている。西側のカマドを壊して東側のカマドにつくりかえている。東側カマドの規模は両袖間外側で1.10m、内側で0.50m、長さ1.60mである。また長さ0.70mほどの煙道も検出されている。燃焼部は平坦で、支脚に転用されたと考えられる高坏が、倒立した状況で出土している。また燃焼部は床面より若干高いレベルにある。西側カマドは長さ0.90mほどの煙道部を検出し

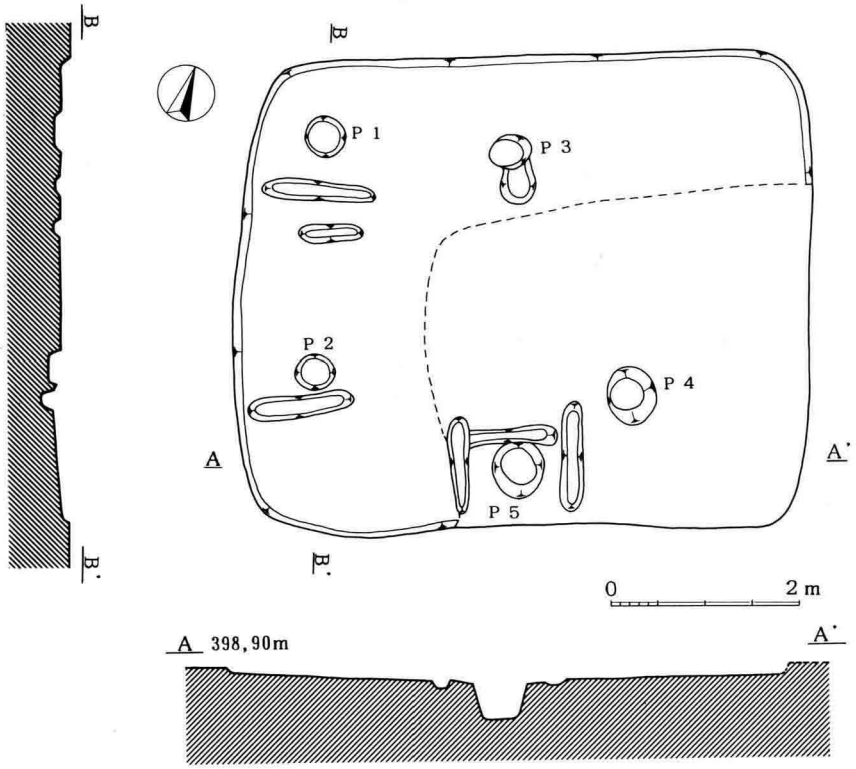


図141　69B号住居址実測図　(1：80)

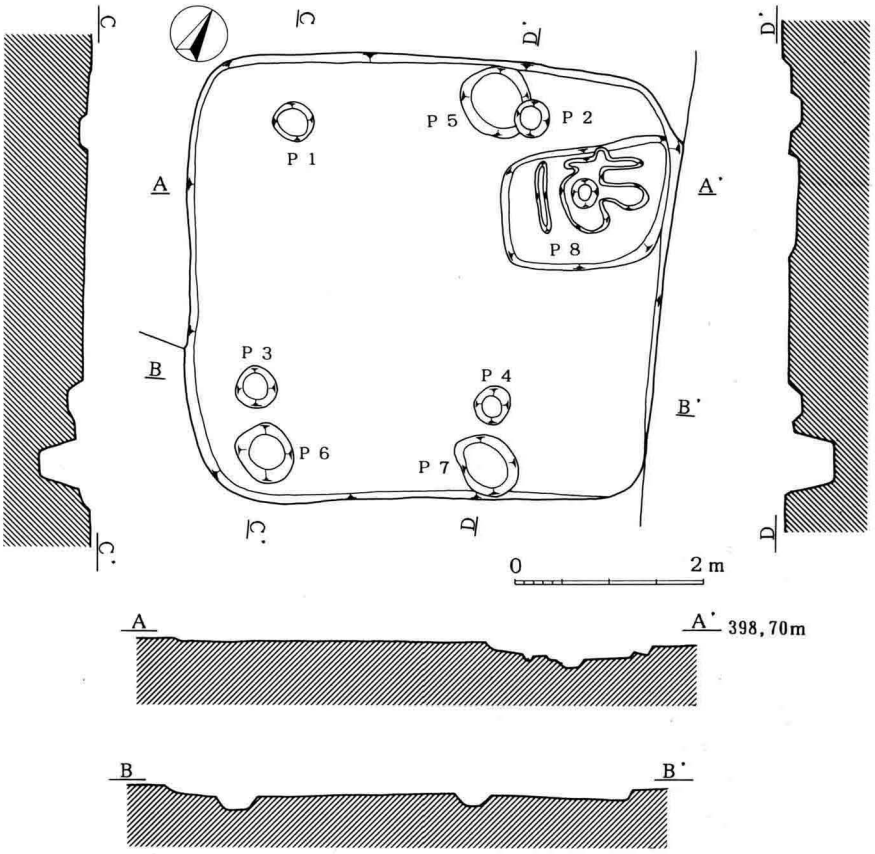


図142　69C号住居址実測図　(1：80)

たのみである。間仕切り溝はP1・P7間中央に壁へ向けて3本、P3・P8間に壁に向けて1本、P3の両脇に2本、P2から壁に向けて1本の計7本を検出している。奥壁ならびに西壁際には、幅15cm・深さ10cm前後の壁周溝を検出しているが全周はしない。

69B号住居址　(図141)

平面プランは6.00×5.00mのやや不整な隅丸方形住居址で、床面は全体に軟弱で不明瞭である。柱穴はP1～P4を検出しているが、柱穴配列等は不明である。間仕切り溝との関連からP1・P2などは、主柱もしくは支柱穴の可能性が考えられる。両脇に間仕切り溝を伴うP5は入り口部ピットで、径50cm・深さ36cmを測る。間仕切り溝はこのP5の両脇に2本、西壁側に3本の計5本が検出されている。カマド等その他の施設は確認されていない。

69C号住居址　(図142)

平面プランは5.20×4.70mの小型の隅丸方形住居址で、床面は全体に軟弱で不明瞭である。柱穴はP1～P7を検出している。主柱穴はP1～P4の4本方形配列と考えられる。住居北東隅に不整な掘り込みを有するが性格は不明である。カマド等その他の施設は確認していない。

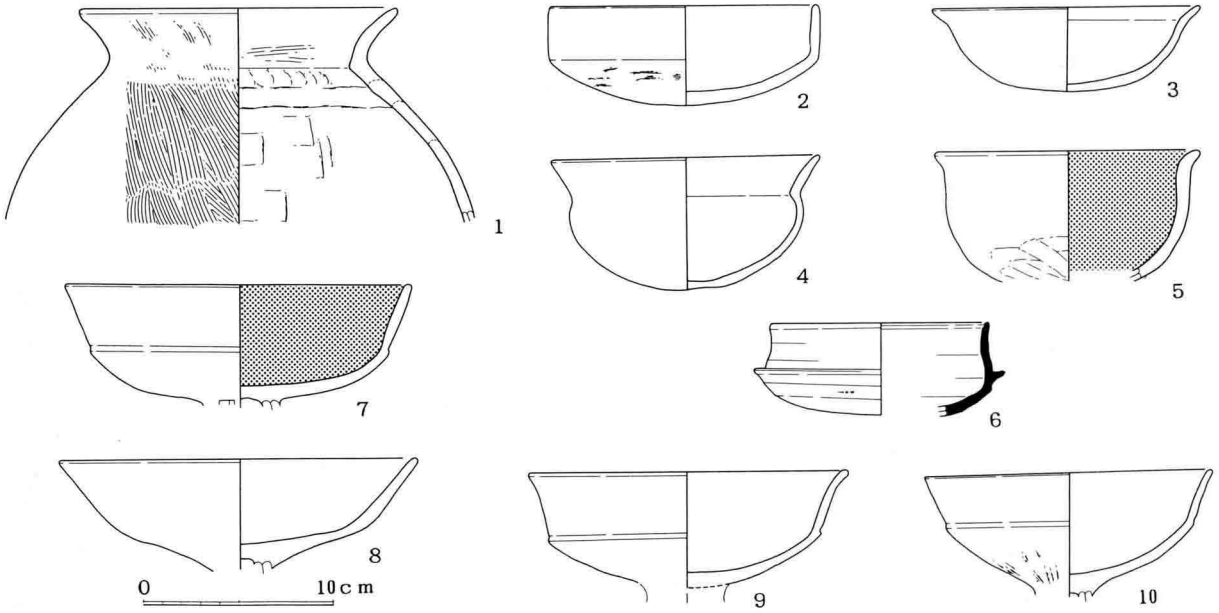
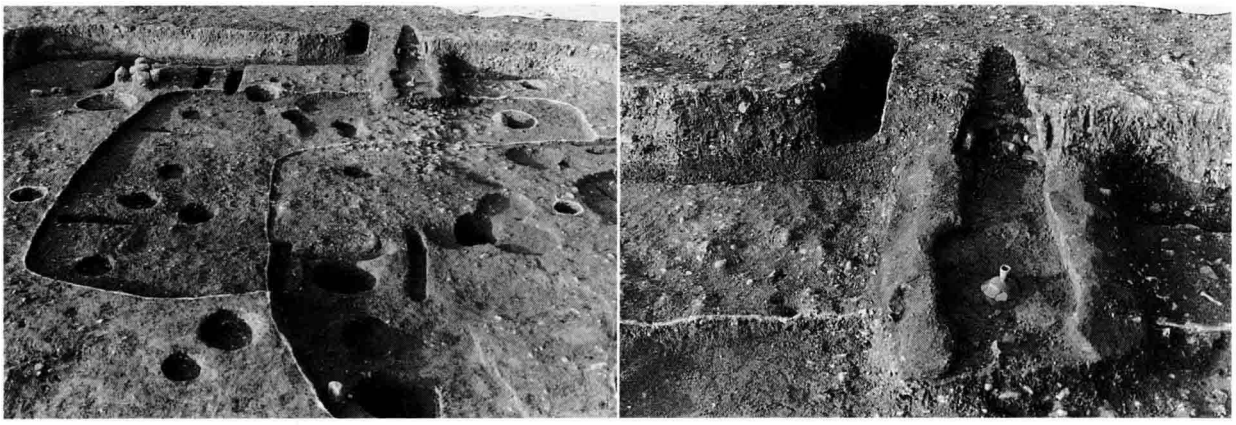


図143　69号住居址出土土器実測図　(1：4)



69号住居址・カマド

70号住居址　（図144・145）

大半を暗渠によって破壊され、また一部が調査区外となるため詳細は不明な部分が多い。確認面からの掘り込みは平均10cm前後と浅く、床面は全体に軟弱で不明瞭である。平面プランは一辺8.20mほどの大型の隅丸方形住居址と予想される。柱穴はP1～P7まで検出している。主柱穴となるのはP1～P4と考えられ、一辺5.00mほどの6本方形配列と予想される。P8は入り口部ピットで深さ30cmを測る。間仕切り溝は西壁に3本、P8の両脇に2本の計5本を検出している。カマド等その他の施設は確認されていない。

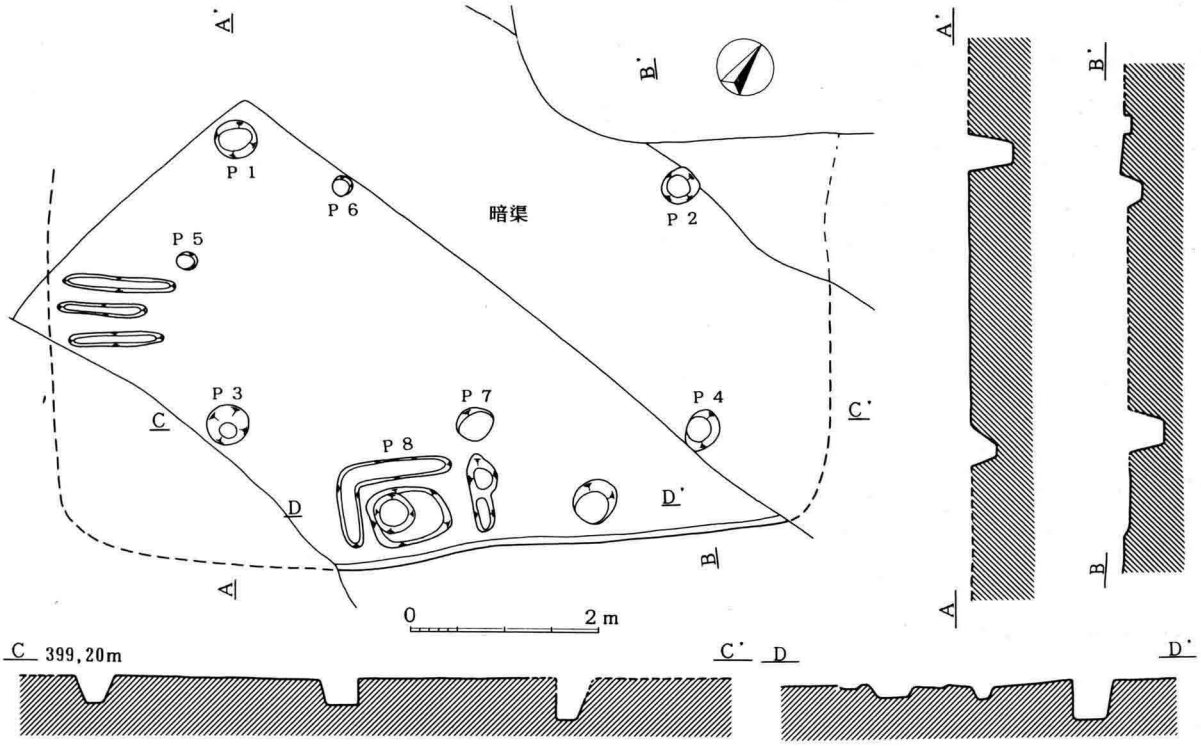


図144　70号住居址実測図　（1：80）

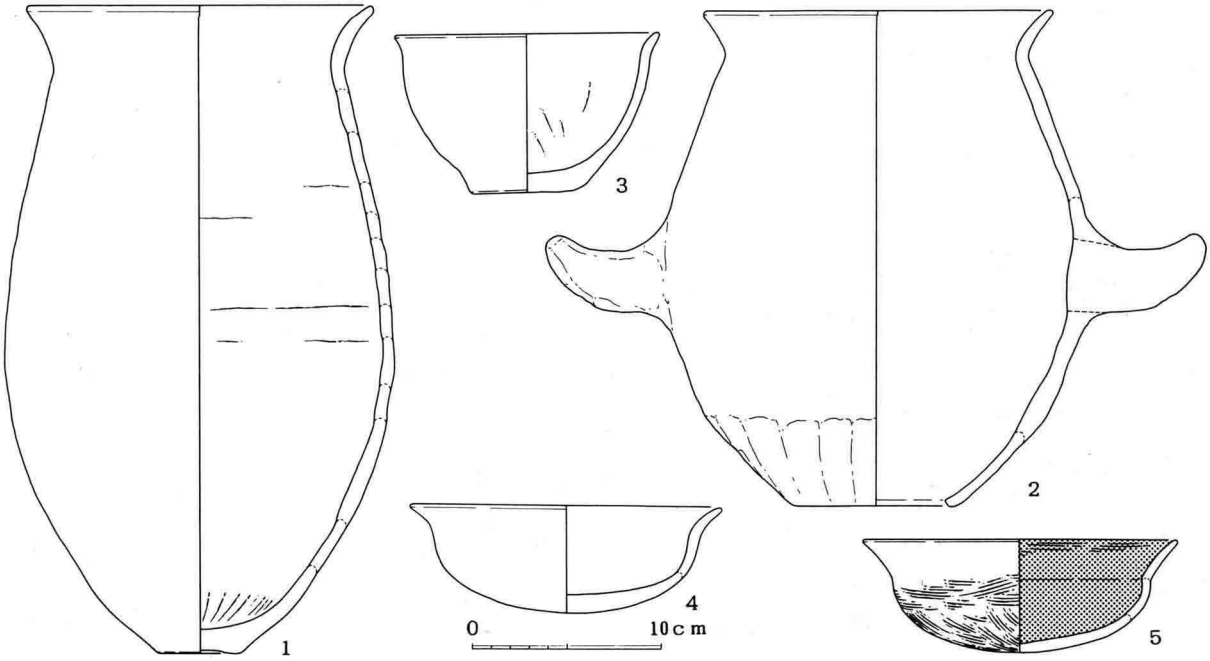


図145　70号住居址出土土器実測図　（1：4）

72号住居址　（図146・147）

古墳時代の74号住居址を切って構築されるが、大半が調査区外となり詳細は不明である。確認面からの掘り込みは平均25cm前後で、床面は軟弱である。平面プランは隅丸方形住居址と予想されるが、規模は不明である。住居址北西隅から西壁際にかけて、幅20cm・深さ10cmほどの壁周溝が検出されている。カマド柱穴等その他の施設は確認されていない。奥壁際の床面上より甑と鉢が出土している。

74号住居址　（図146・148）

弥生後期の73号住居址を切って構築されるが、古墳時代の72号住居址に切られる。またかなりの部分が調査区外となり、詳細は不明な部分が多い。確認面からの掘り込みは平均50cm前後と深いが、床面は全体に軟弱で不明瞭である。平面プランは一辺6.40mほどの隅丸方形住居址と予想される。柱穴はP1～P8が検出されている。主柱穴はP1・P2と考えられ、一辺2.90mほどの4本方形配列と予想される。P3・P5なども支柱穴と考えられよう。

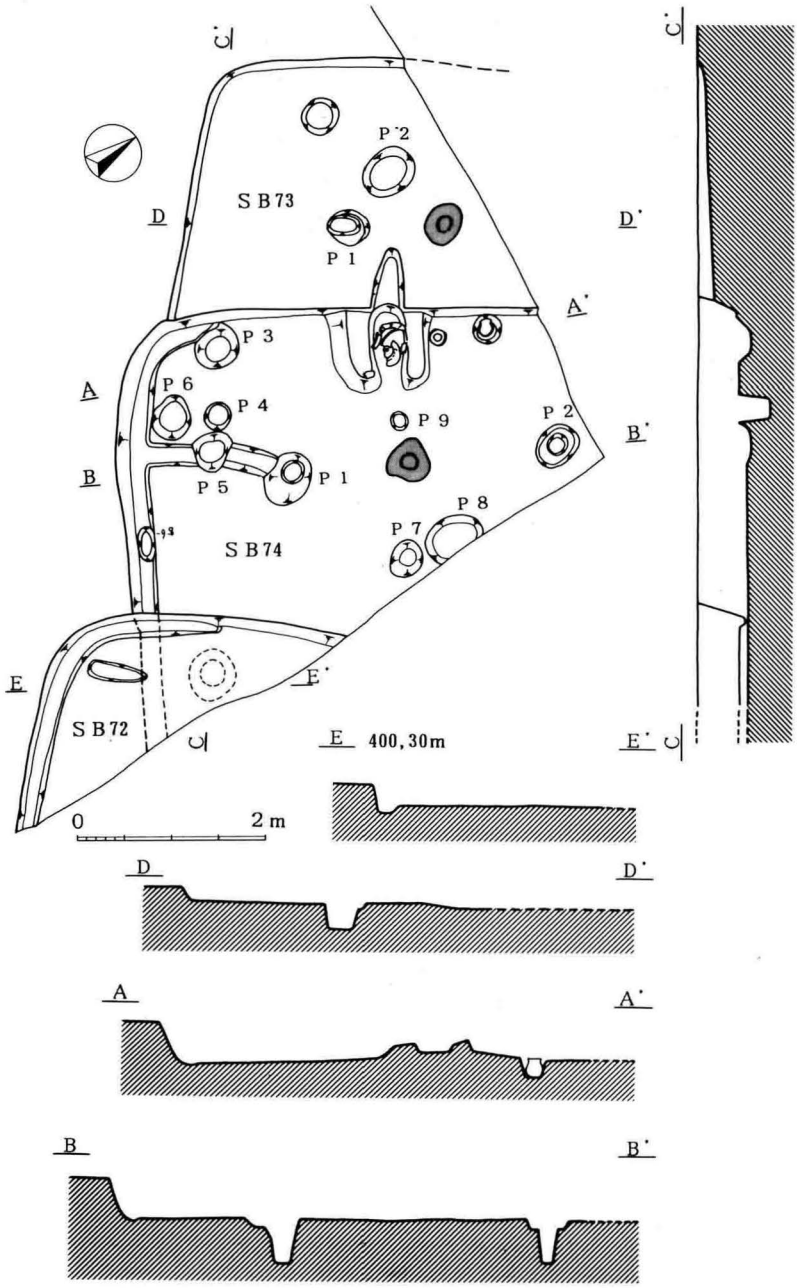


図146　72・73・74号住居址実測図　（1：80）

72号住居址・土器出土状況

カマドは奥壁中央に位置する。規模は両袖間外側で1.00m、内側で0.30m、長さ0.90mである。また長さ0.60mほどの煙道も検出されている。カマド前面に径50cmほどの硬化した焼土の堆積を確認している。一般の地床炉と同一の機能を想定すべきか不明であるが、一応炉と判断した。またP9は内部に炭化物・焼土が充満した状況で検出されており、カマドもしくは炉に伴う施設と想定される。間仕切り溝はP1から壁へ向けての1本が検出されている。また住居址北西隅から西壁際に幅20cm・深さ10cm前後の壁周溝が検出されているが、全周はしない。カマド内ならびにカマド周辺を中心に比較的多量の土器が出土している。

図147　72号住居址出土土器実測図　（1：4）

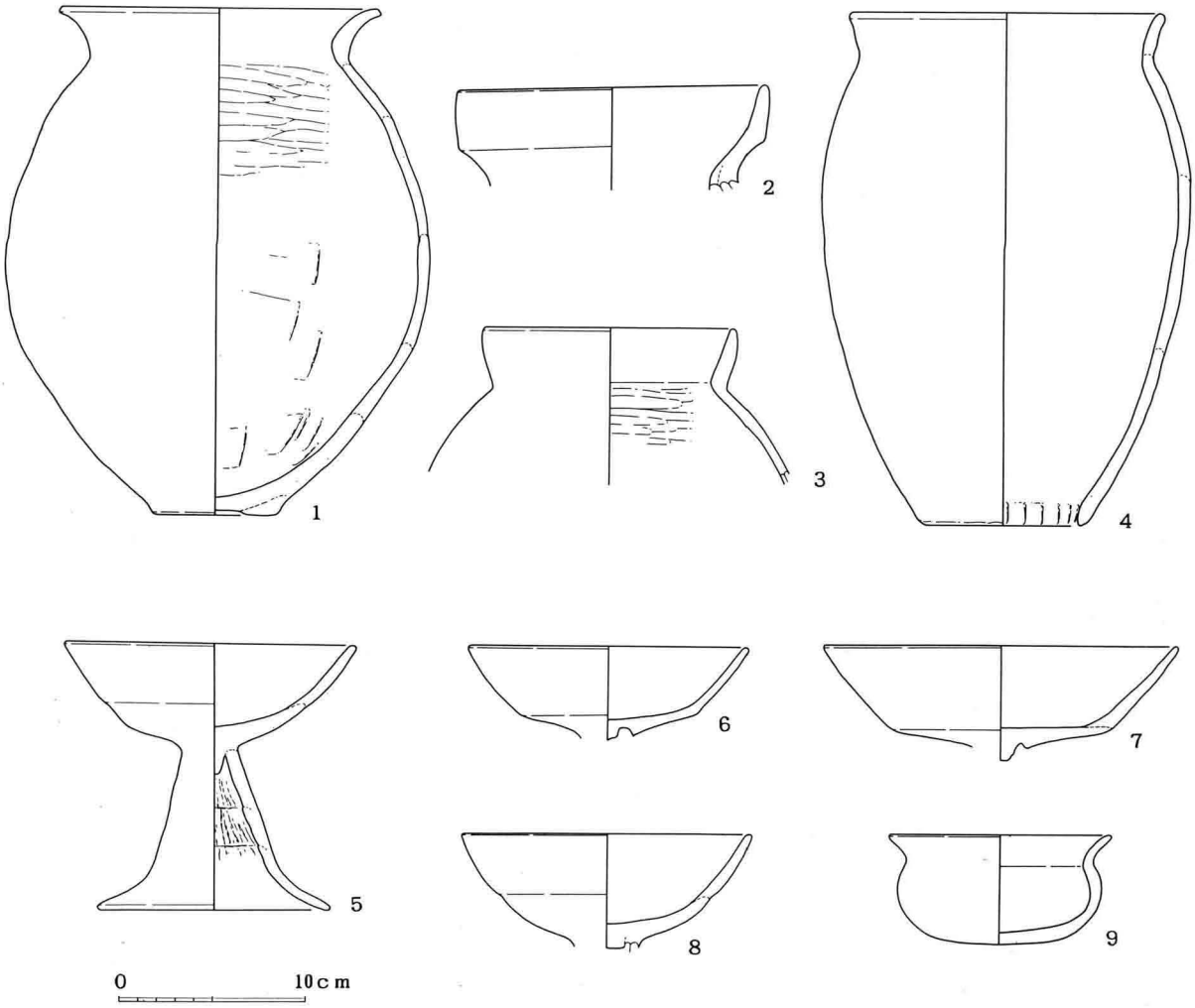


図148　74号住居址出土土器実測図　（1：4）

75号住居址　（図149・150）

弥生後期の82・83号住居址を切って構築されるが、古墳時代の81号住居址に切られる。確認面からの掘り込みは平均50cm前後と深いが、床面は全体に軟弱で不明瞭なものである。平面プランは9.50×9.40mの大型でやや不整な隅丸方形住居址である。柱穴はP1～P11までを検出している。主柱穴はP1～P3と考えられ、5.50×4.80mの4本方形配列と予想される。間仕切り溝との関連よりすればP4・P5も支柱となる可能性が高い。カマドは奥壁中央やや西側のところに位置するが、ほとんど破壊された状況で燃焼部の焼土の堆積をかろうじて確認したにとどまる。間仕切り溝はP1から壁に向けて直交した形で2本、P2・P5から壁に向けて各1本、カマド前面に2本、西壁中央に2本、住居址南西隅に3本の計11本を検出している。また住居址北西隅から西壁にかけての壁際に幅20cm・深さ10cm前後の壁周溝を検出しているが全周はしない。

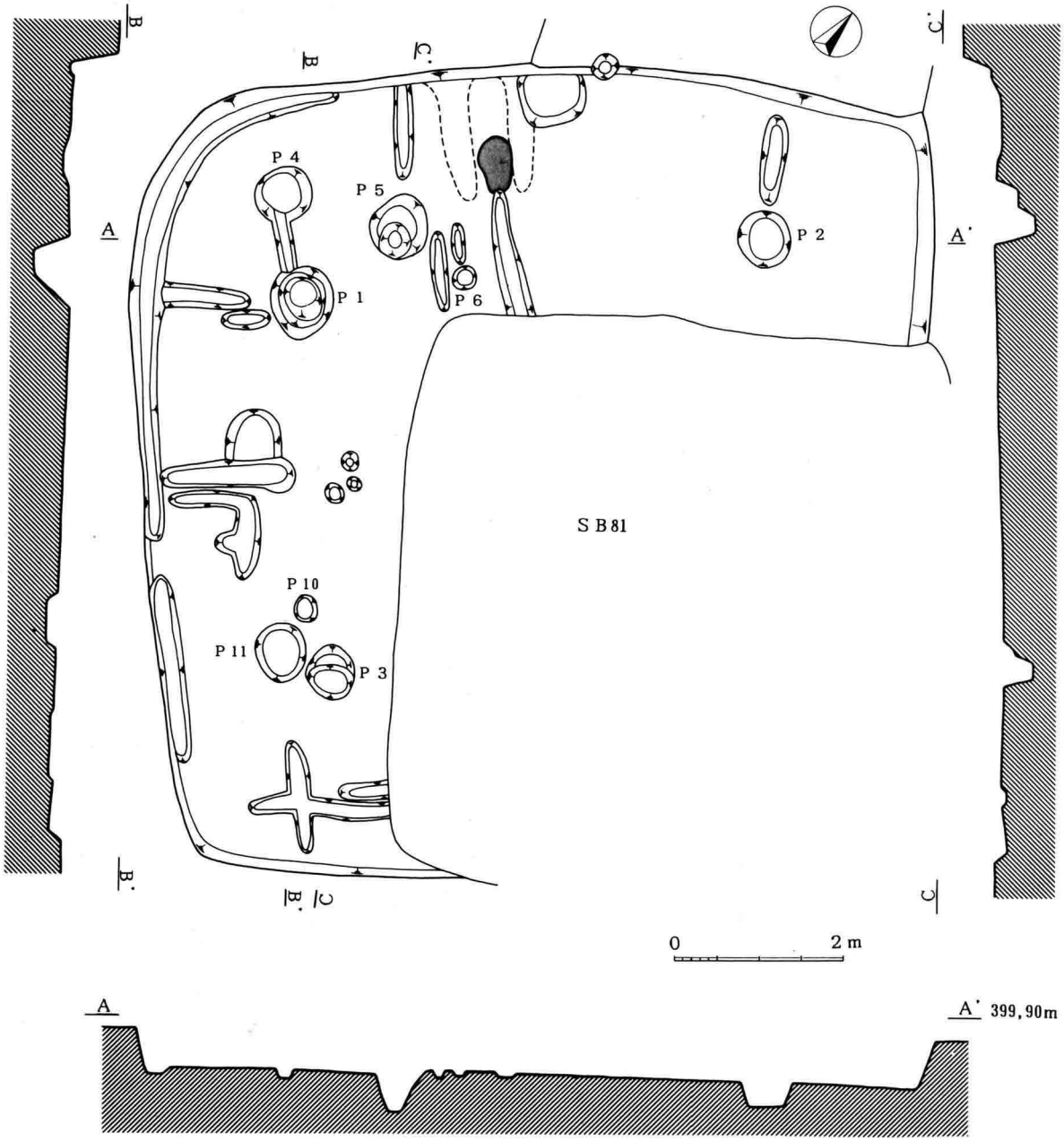
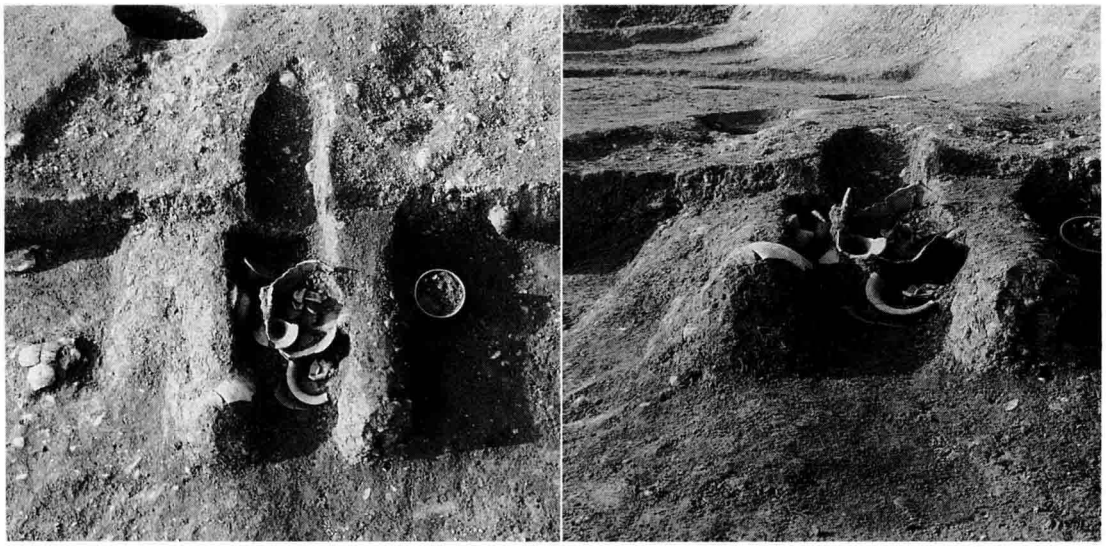


図149　75号住居址実測図　（1：80）

74号住居址



74号住居址カマド

75号・81号住居址

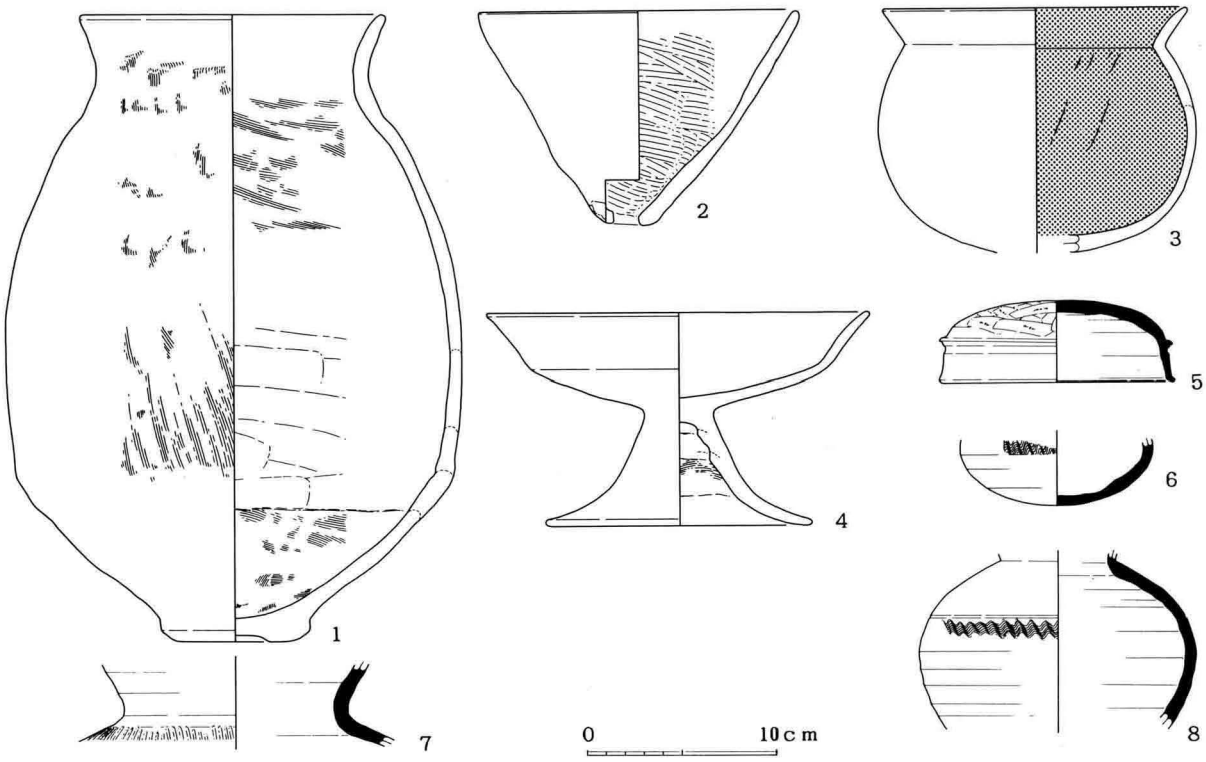


図150　75号住居址出土土器実測図　（1：4）

76号住居址　（図151・152）

弥生中期の102号住居址を切って構築される。確認面からの掘り込みは平均50cm前後と深いが、床面は全体に軟弱で不明瞭である。

平面プランは8.10×8.60mの大型の隅丸方形住居址である。柱穴はP1～P20まで検出している。主柱穴はP1～P4で、5.10×5.30mの4本方形配列と考えられる。P5～P12も、間仕切り溝との関連よりすれば本住居址に伴う支柱として把握できよう。

カマドは西壁中央と北壁中央に1個づつ検出されている。西側カマド規模は両袖間外側で1.20m、内側で0.50m、長さ1.10m、煙道長1.50mである。北側カマドは袖部が破壊された状況であったが、規模は両袖間外側で0.80m、内側で0.40m、長さ1.30mほどと推定される。また長さ1.20mほどの煙道を検出している。ともに燃焼部はフラットで、床面とほぼ同一のレベルである。北側のカマドを破壊して、西側のカマドにつくりかえたものと推定される。住居址中央付近には、径50cmほどの焼土の堆積を2個確認しており、ともに地床炉と考えられる。

P21・22はそれぞれ入り口部ピットと考えられ、カマドのつくりかえにともない新たにP22が設置されたものであろう。P21は径70cm・深さ23cm、P22は径80cm・深さ38cmを測り、ともに両脇に間仕切り溝を伴う。

間仕切り溝は確実なものとしては、P1・P2・P4からそれぞれ壁へ向けて直交する形で各2本、P3・P5・P6・P8・P9・P12からそれぞれ壁へ向けて各1本、P21・P22の両脇に各2本の計16本が検出されている。壁周溝はカマド付近と東壁中央付近を除いてほぼ全周し、幅20cm・深さ10cm前後である。

壁際を中心とした床面上より坏類を中心として比較的多量の土器が出土している。

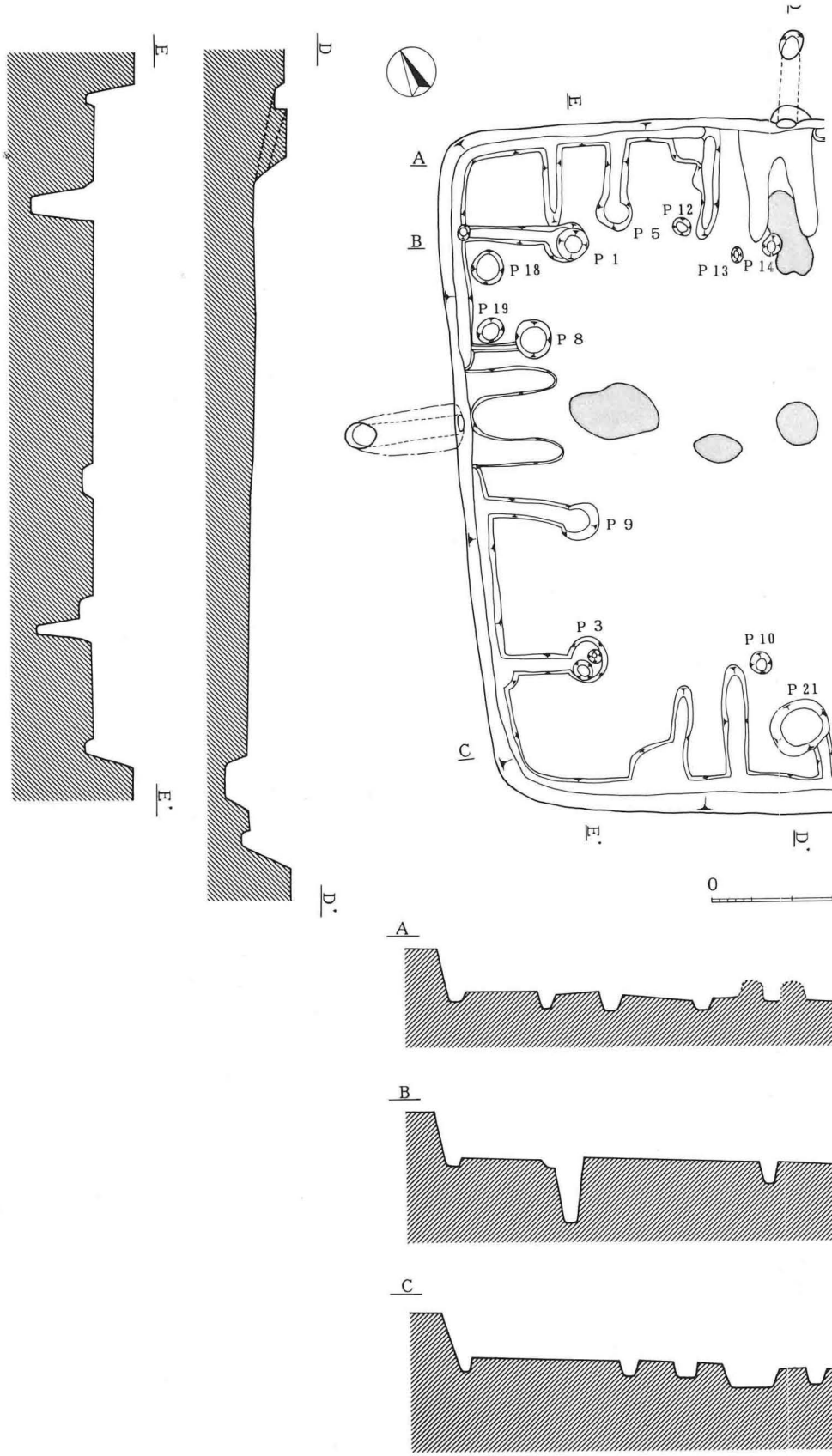


図151　76号住居址

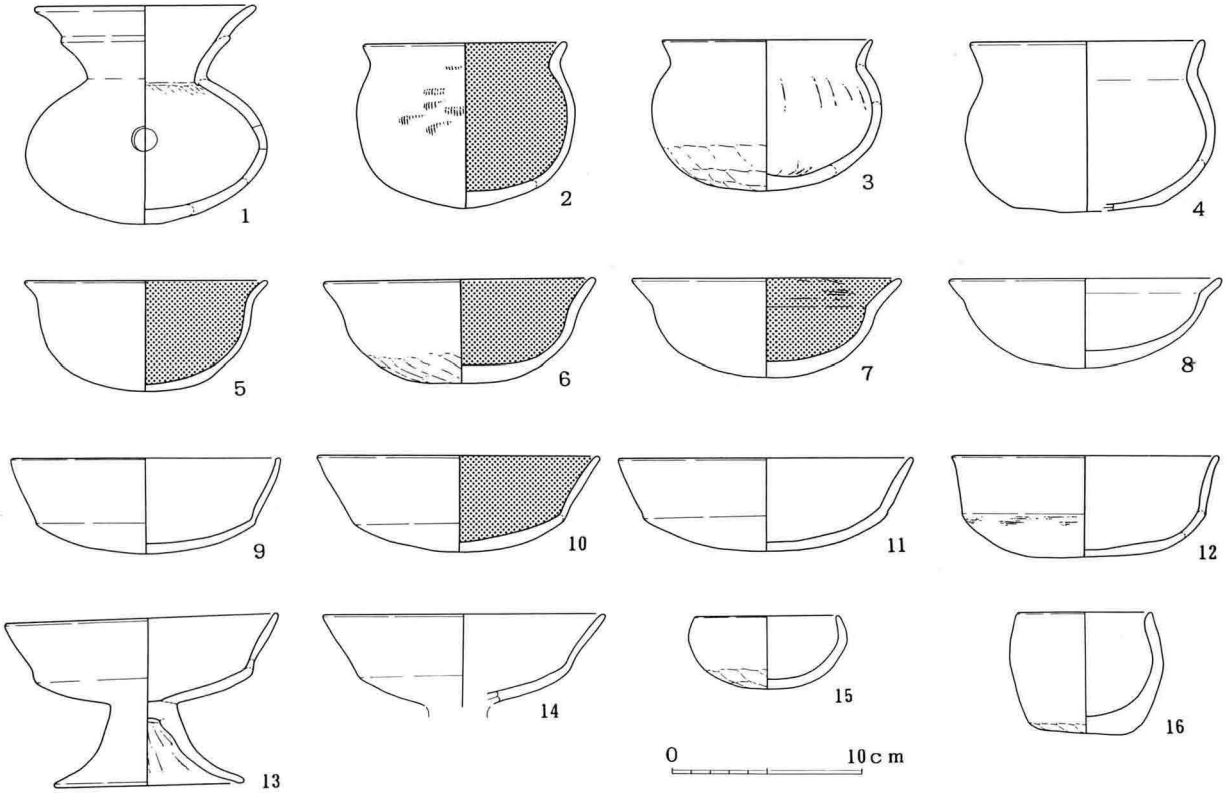
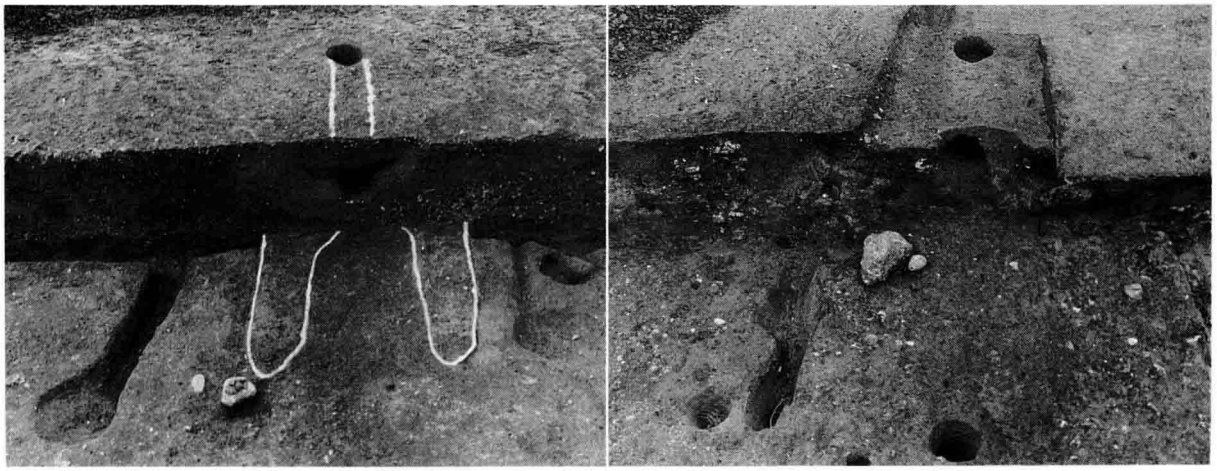


図152　76号住居址出土土器実測図　（1：4）

76号住居址



西カマド　　北カマド

80号住居址　（図153・154）

古墳時代の98号住居址を切って構築される。確認面からの掘り込みは平均20cm前後と浅く床面も全体に軟弱で不明瞭である。

平面プランは5.90×5.50mの隅丸方形住居址である。柱穴はP1～P13を検出した。主柱穴はP1～P4で3.80×3.50mほどの、不整な4本方形配列である。カマドの西側に位置するP14は貯蔵穴と考えられ、内部のピットの深さは50cmを測る。

カマドは奥壁中央やや東寄りのところに位置し、規模は両袖間外側で0.90m、内側で0.30m、長さ0.90mである。住居址北西隅から西壁中央部の壁際にかけては、幅60cm高さ10cmほどのベッド状の高まりが検出されている。

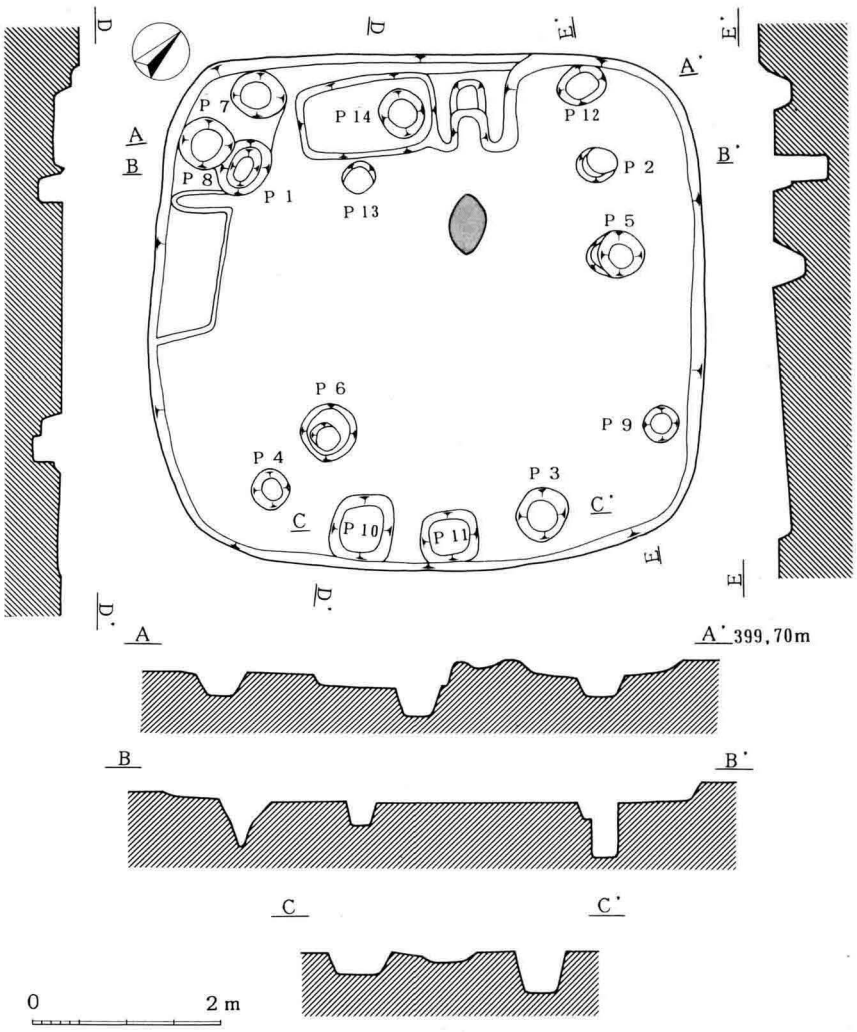


図153　80号住居址実測図　（1：80）

80号住居址

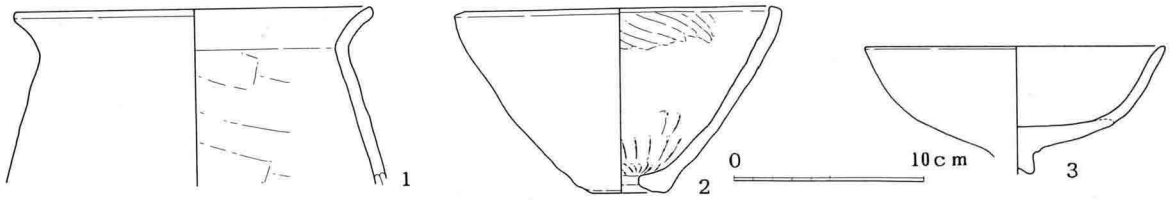


図154　80号住居址出土土器実測図　（1：4）

81号住居址　（図155・156）

古墳時代の75号住居址を切って構築されるが、南東側1/3ほどは調査区外となる。確認面からの掘り込みは平均70cm前後と深いが、床面は全体に軟弱で不明瞭である。平面プランは6.30×6.70mの隅丸方形住居址である。柱穴はP1～P6まで検出している。主柱穴はP1～P3で3.50×4.10mの4本方形配列である。P3から壁へ向けてのびる溝を壁周溝とすれば、南側へ住居址の拡張が行なわれている可能性があり、当初はP1～P4の主柱穴配列とも考えられる。カマドは奥壁中央やや東寄りのところに位置し、規模は両袖間外側で1.30m、内側で0.30m、長さ1.00mである。住居址中央付近に焼土の堆積が2箇所確認されており地床炉の存在した可能性がある。西壁際には壁周溝が検出されており、幅20cm、深さ10cm前後である。全周はしない。カマド・カマド周辺より比較的多量の土器が出土した。

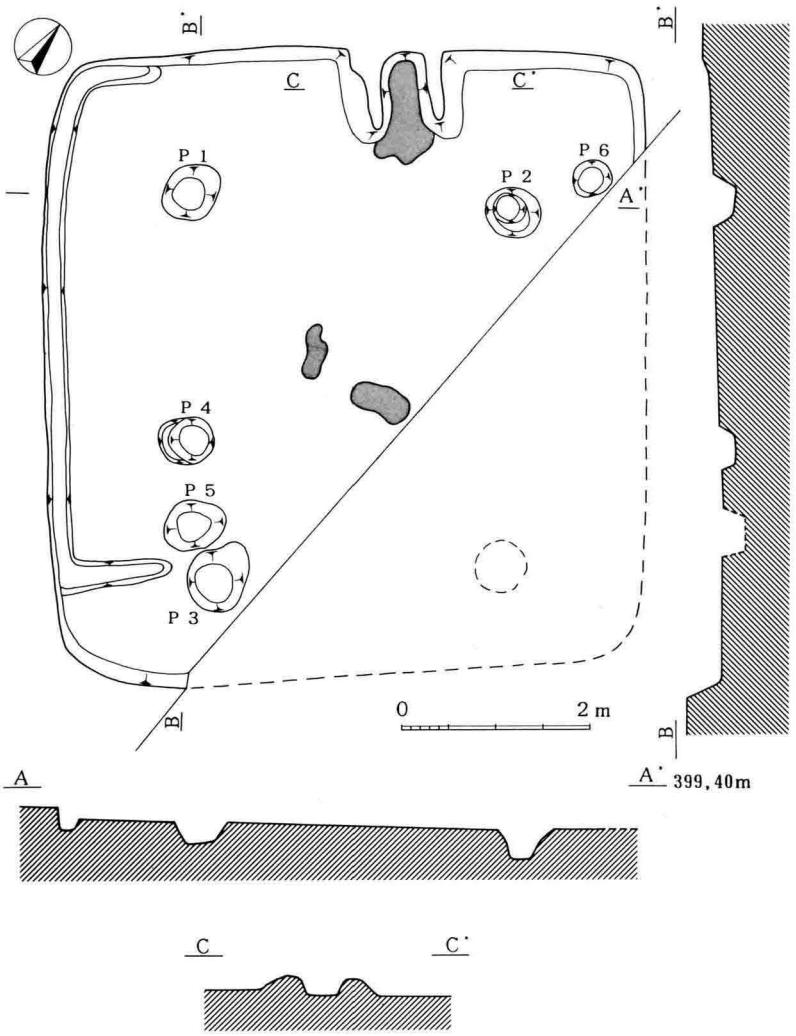


図155　81号住居址実測図　（1：80）

81号住居址・カマド

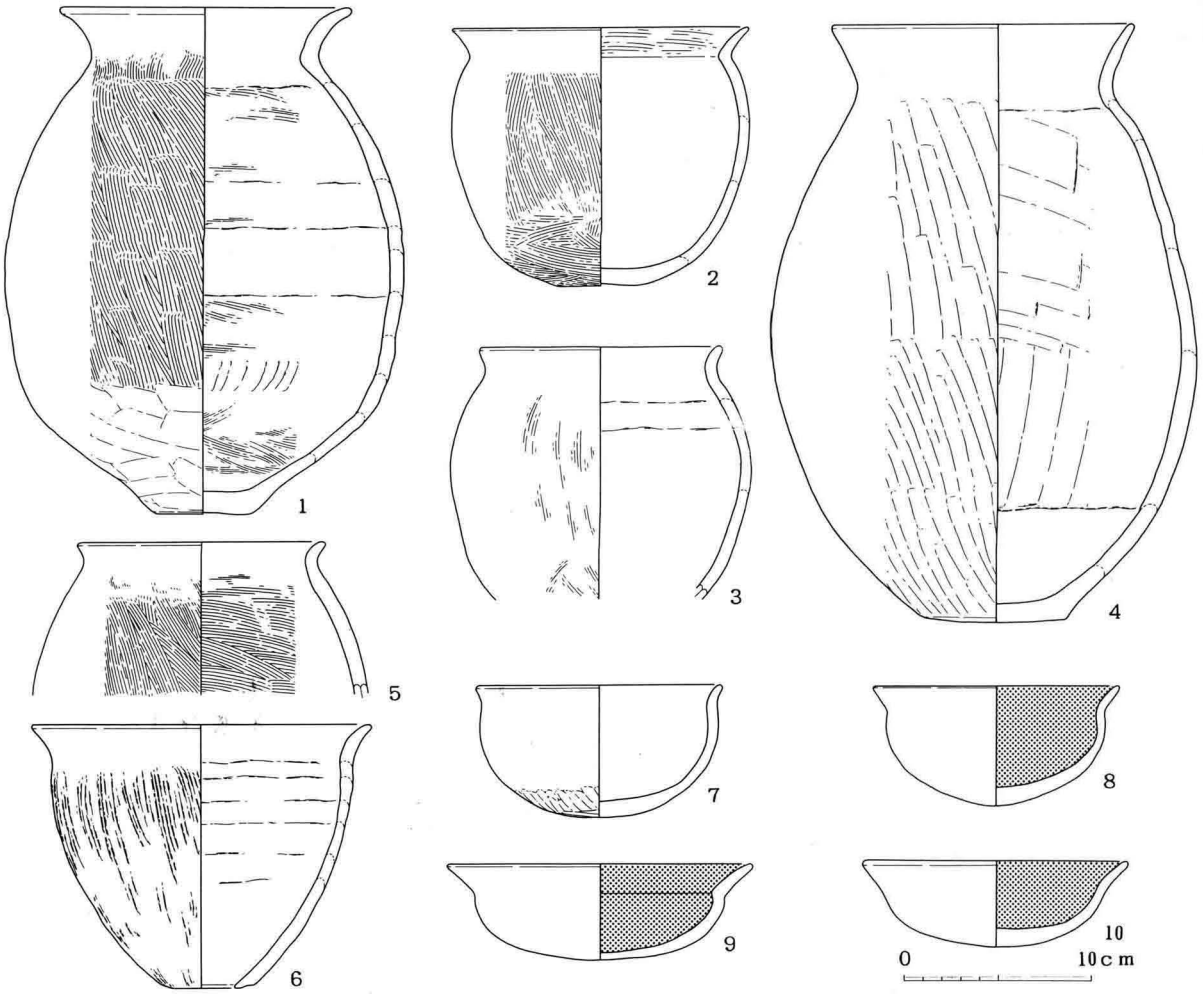


図156　81号住居址出土土器実測図　（1：4）

86号住居址　（図157・158）

弥生後期の90号住居址の上に構築され、古墳時代の89号住居址に切られる。遺構の切り合いが激しく詳細は不明な部分が多い。確認面からの掘り込みは平均20cm前後と浅く、床面は全体に軟弱である。平面プランは一辺9.30mほどの大型の隅丸方形住居址と考えられる。柱穴は2本検出されているが主柱穴配列等の詳細は不明である。カマドは奥壁中央やや東寄りのところに位置し、両袖間外側で1.20m、内側で0.40m、長さ1.00mほどの規模である。カマドの西側に1.20×1.10mほどの貯蔵穴が存在し深さ78cmを測る。その他の施設は確認されていない。かなり多量の土器が出土しているが、本住居址調査過程にて89号住居址との切り合い関係が判明したため、同住居址の土器が混在している可能性が高い。

86号・89号・90号住居址

89号住居址　（図157）

弥生後期の90号住居址、古墳時代の86号住居址を切って構築される。他遺構との切り合いが激しく詳細は不明な部分が多い。確認面からの掘り込みは平均50cm前後と深

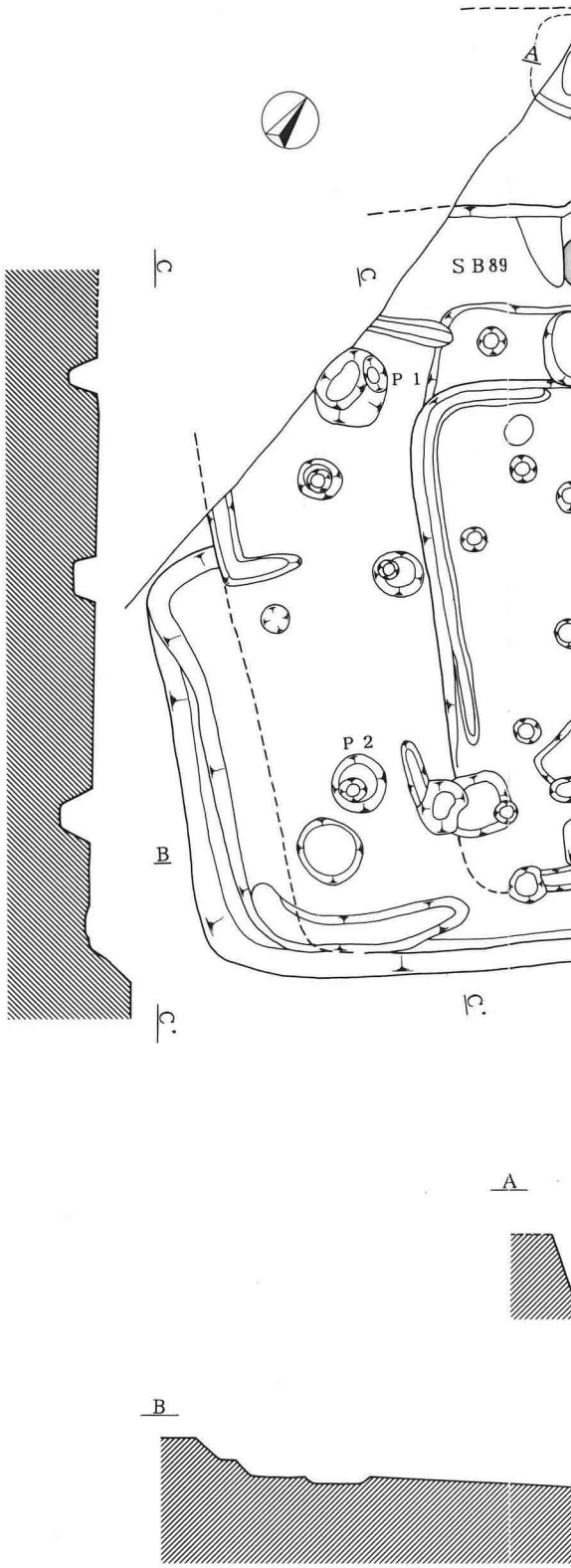


図157　86号・89号・90号

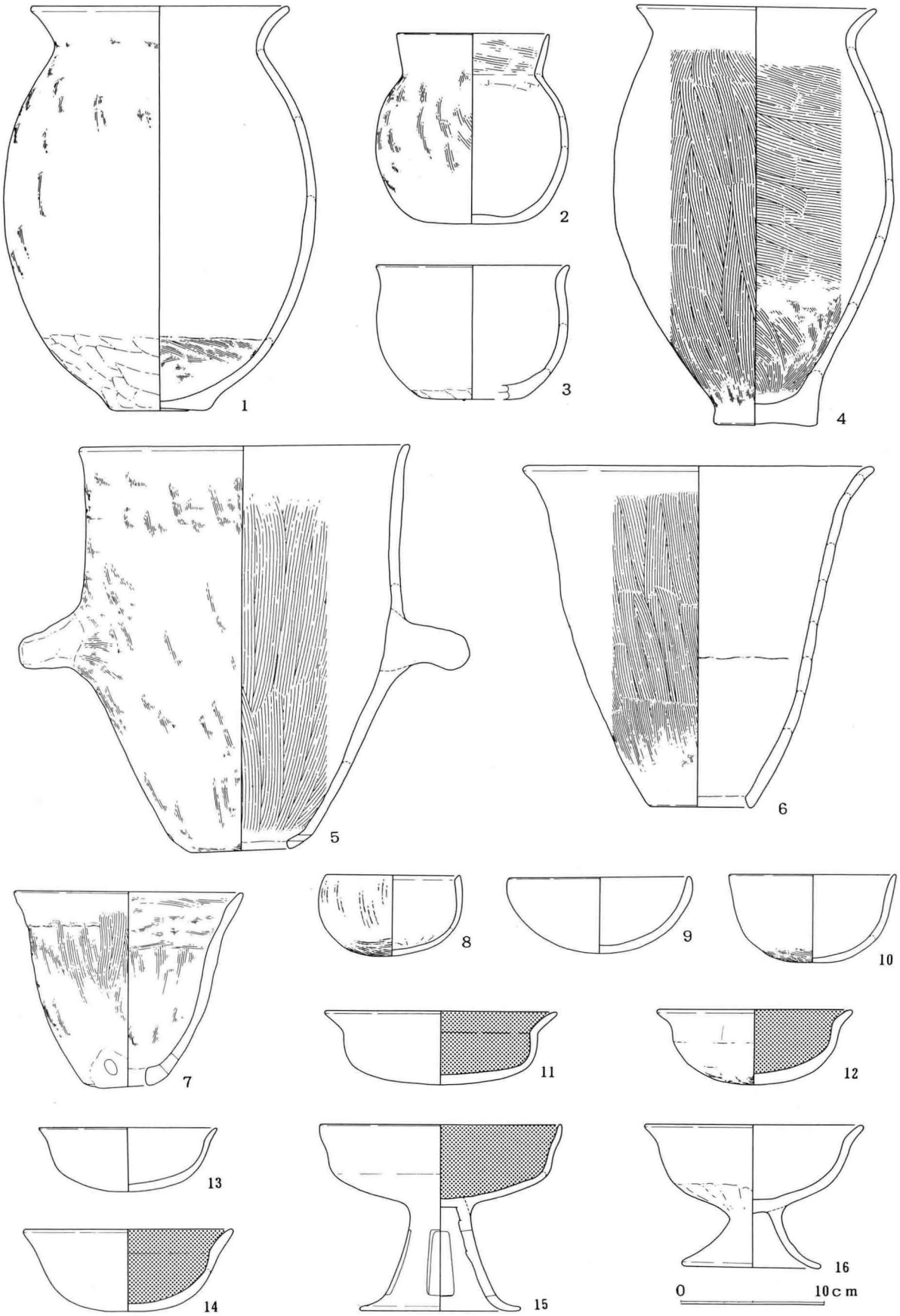


図158　86号住居址出土土器実測図　（1：4）

いが、床面は全体に軟弱で不明瞭である。平面プランは8.00×7.50mほどの隅丸方形住居址である。柱穴は多数を検出しているが、主柱穴と考えられるものはP1～P4で5.00×4.40mほどの4本方形配列と考えられる。カマドは奥壁中央に位置し、規模は両袖間外側で1.10m、内側で0.50m、長さ0.80mほどである。間仕切り溝は確実なものとして、P3から直交する形でのびる2本を確認したに過ぎない。西壁際に壁周溝が存在する可能性があるが詳細は不明である。

88号住居址　（図159・160）

古墳時代の96号・108号・109号住居址を切って構築されるが、南東側は大部分が調査区外となり詳細は不明な部分が多い。確認面からの掘り込みは平均20cm前後と浅く、床面は全体に軟弱で不明瞭である。平面プランは一辺6.60mほどの隅丸方形住居址と予想される。柱穴はP1・2を検出したが、主柱穴はP1と考えられる。柱穴配列は不明。カマドは奥壁中央付近に位置するものと考えられ規模は両袖間外側で0.80m、内側で0.30m、長さ0.90mである。カマド前面にかなり広範に焼土の堆積を確認しているが性格不明である。間仕切り溝は西壁中央付近に2本を検出した。奥壁から西壁にかけて幅15cm・深さ10cm前後の壁周溝を検出したが全周はしない。

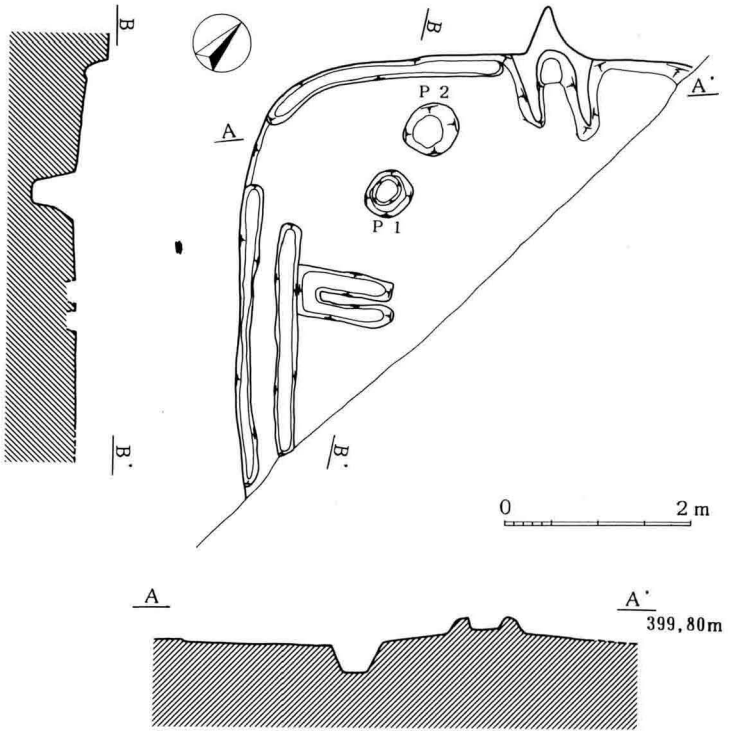


図159　88号住居址実測図　（1：80）

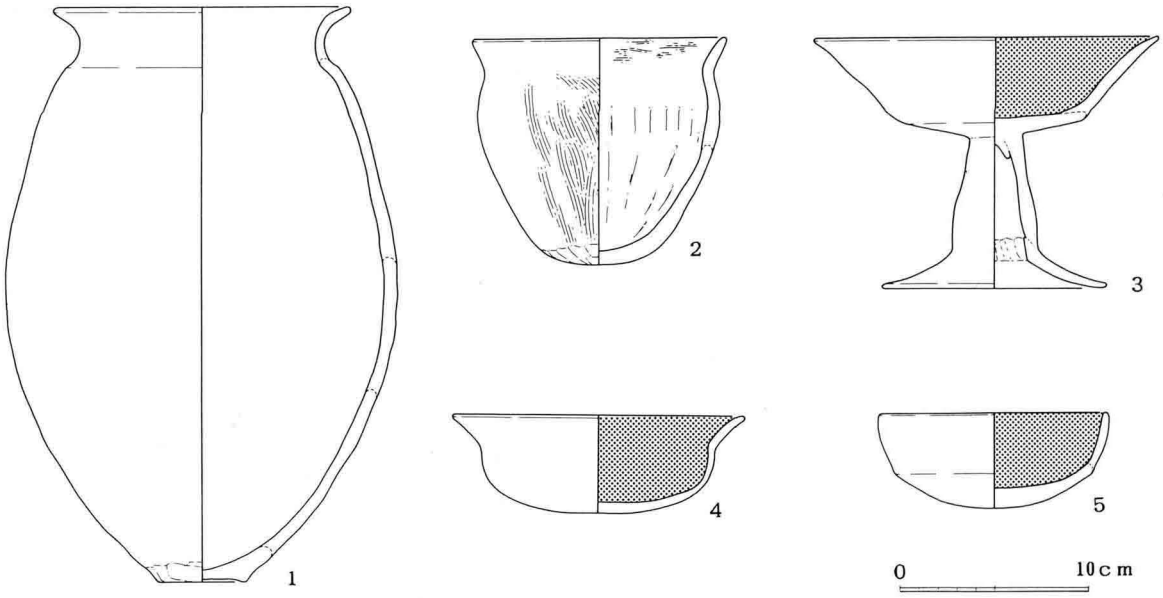


図160　88号住居址出土土器実測図　（1：4）